202
299

202-299
1200800072979

202-299

箒庵高橋義雄著

辛酉

大正茶道記

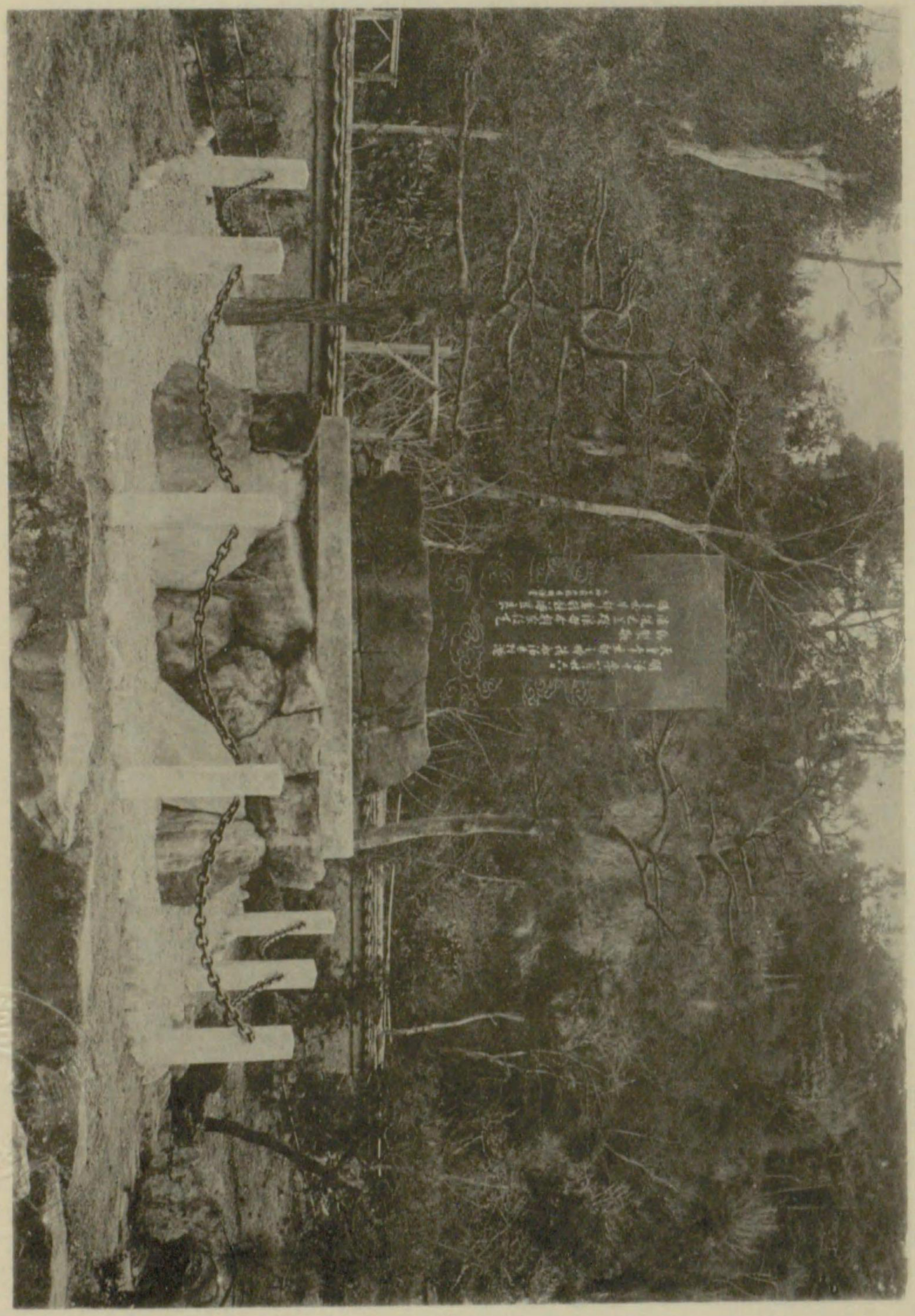
大正
11. 5. 29
内交

東京 箒文社藏版

エト6×33

島津公爵家藏　松屋肩衝（松屋肩衝參照）

詩仙堂（詩仙堂丈山記參照）



鳥羽樋山公園御製碑

（鳥羽御製碑參照）

益田紅艶時雨西行扮装（載蝸庵紅艶参照）

製本變更理由

大正茶道記は今年發行分より製本の様式を變更せり、本記の前身東都茶會記は、第一輯より第七輯まで一定の和本式にて發行し、大正九年大正茶道記と改題後も猶ほ一回和式を採用せしが、此頃書肆慶文堂主人の說に、和装は一見優美なるが如くなれども、之を店頭に陳列するに當り、講讀者は肩書に依つて書名を知る能はず、又試に之を披見するの際、其包紙を破損するの恐れあり、旁々取扱上の不便少からず、是に於て取次書肆は内容如何に拘らず、擧つて和本を忌避するの傾きあれば、大正茶道記は辛酉分より以後總て洋本式に改められたしと云ふ、謂れを聞けば如何様一理なきに非ず、茶書としては和装が風雅なるやうなれど

も、書肆も購讀者も皆な之を便とせる今日、強て舊式を固執する必要もなければ、乃ち飜然慶文堂案に贊成して、今次より洋本式を採用せし次第なり、讀者幸に之を諒せよ。

大正壬戌孟夏

著者誌

辛酉 大正茶道記 目次

鶏肋雜炊 …… 一頁

大正名器調―藪内家職方―輸出美術品―滿幅皆畫―名笛大獅子―盲人の月―夕時雨―生前香奠卷―馬鹿囃子―杉本一齋―桂谷畫談―新畫家氣質―鶏旦の詩―舞樂の歌―盆栽同好會

芝翫と山陽 …… 三一

贏馬之圖 …… 五五

藪蛇庵紅艷 …… 六四

青山莊夜話 …… 八一

湘南空心庵 …… 八九

紅艷追福會 …… 九八

東瀛師木像 一〇七
光悦作山姥面 一一三
新網茶會 一二二
辛酉大師會 一二九
一木庵茶評集 一四三
櫻川茶會 一五三
圓齋茶會 一六二
靈寶館落慶式 一六六
知足齋爐名殘 一七四
鴻池新田 一八三
一樂莊茗筵 一九二
高襟茶會 二〇〇

詩仙堂丈山忌 二〇八
永坂初風爐 二一九
高野詣記念會 二二五
燕庵茶會 二三五
葉雨庵初風爐 二五四
松浦家青磁 二六一
三味線供養 二七〇
飛雲閣茶信 二八一
鳥羽御製碑 二八五
松屋肩衝 二九一
安田松翁 二九七
永坂殘茶會 三一三

網島邸晩秋會 三二〇
尾州家藏品拂 三三一
鶴叟殘茶會 三三五
扇庵口切 三三九
東山大茶會 三四四
辛酉光悅會 三七一
鹿ケ谷茶會 三八一
夕時雨會 三九二
楓軒口切 四〇一
青山夜話會 四〇七
馬越翁口切 四一三

辛酉 大正茶道記

箒庵 高橋義雄 著

一 鷄肋雜炊

（大正十年一月一日）

馬鹿に長引いた猿年の茶道記が漸く種切となつたから、是れより鷄年の記事始めを爲さうと思ふが、矢張去年の材料で、手當り次第に書き並べた者だから、題して鷄肋雜炊と云ふのである、其處で先づ

大正名器調

と云ふ眞面目な事より始めやうが、昨年は三月十日より我大正名器鑑に登錄すべき名物茶入茶碗の調査に取掛つて、十二月十日に至るまで、東都は勿論京都大阪廣島に

跨つて訪問した家數が五十九軒、檢覽並に撮影した茶入が百九十三、茶碗が二百三十七で合計四百三十點である。之に以前の分の三百八十三點を合算すれば、此事業に着手してより檢覽並に撮影を遂げた茶入茶碗は總計七百八十三點で、天下名物茶入茶碗を約千點と觀れば、此事業も最早已に峠を越して、百里の道が殘る所二十里許りとなつたのである、併し昔より百里を行くには九十里を以て相半すと云ふ事もあれば、此事業に於ても殘る二十里が最も困難であるかも知れぬが、今年中にはどうやら結了するだらうと思ふのである。

抑も名物は天下の名物で、其所有者は之を預つて大切に後代に傳ふると同時に、此名物を茶道の爲め工藝の爲め、其他有益なる目的の爲めに、展示すべき場合には快く之を展示するのが其義務である筈だ、此理窟より推して行けば、名物所有者は大正名器鑑編輯者の請ひに應じて、一も二もなく其名物を展示すべき筈であるが、扨て愈々之を拜見して撮影するまでの段取は決して容易の事でない、況んや東都を離れて地方に赴き、名器所藏者の都合好き時日を打合せて、愈々其目的を達するまでには種々の苦心を要するのである、然も其の苦心甲斐あつて拜見が叶ひ、寫眞が撮り得られれば誠に有り難い仕合せだが、中には名器の一覽は許すが寫眞はお斷りと云ふ者がある、是は彼の明治初年に寫眞を撮れば命が縮まると云ふ奇說を言ひ觸らしたのと一般で、寫眞を撮れば名物の品位を損するやうな一種の迷信であるらしい、斯かる主人に抱へられたる名器は、現在無事で此世に存在しながら、同類や兄弟と名器鑑中に肩を比べて立つ事が出來ない日蔭者と成り果つる譯で、嘸やさぞ其持主を怨んで居る事であらう、聊か我田引水かも知れぬが、名器所藏者は篤と此邊の事態を考慮して、此際進んで余等の希望に應じ、精々便宜を與へられん事を偏に懇願する次第である、兎に角今年は最後の大奮發で、殘餘の名器を取調べ、アハレ犬年の年頭には大正名器鑑查が首尾能く完成した事を報告する光榮を得たいと、東天紅の聲勇ましき鷄年の前途を自ら祝福する次第である。

二

藪內家職方

京都の藪内宗匠家には、其好みを以て製作を命ずる職方を吟味し、動もすれば粗製濫造に流れんとする茶器の形式を崩さゞる注意を嚴にする慣例が遺つて居る事を、同宗匠の令弟節庵君より聞き及んだ、藪内家では表裏千家同樣、代々出入職人を定めて、宗匠の好み物其他の注文品を製作せしむる仕來りであるが、同家は他家と違ひ其職人代替りの節、宗匠自ら其作品を試驗し、之に及第せざる者は假令正當の相續人たりとも、爾後其出入を停止する慣例である、斯くて釜は中川萬兵衞、金物は村田耕閑、陶器は樂和全、塗物は遠坂宗仙と云ふが如く、古來最も有名なる夫れ〴〵の職方を使用し來り、大抵其子孫が今日まで出入して居るが、其中でも塗物は最も嚴格なる試驗を爲すさうである、遠坂宗仙初代は寛永頃の人で卯兵衞と稱し、盛阿彌の後に於て最も有名な塗師であつたが、此人は殊に棗を造るに長じ、丸味を持つた合口でも、或はキッカリと切立つた合口でも、自由に製作して其妙を極め、彼の宗哲より一段名作が多かつたさうだが、此初代遠坂の作つた黑棗が、富山市梅澤町妙巖寺と云ふ寺に今でも一つ遺つて居る、是れが藪内家に於ける黑棗の摸本で、此棗に寸分相違ないやうに塗り得る者に非ざれば同家の出入塗師たる事を許されぬのである、夫れで德川時代には京都と富山と遠路交通不便なるにも拘らず、遠坂の新主人たる者は富山の妙巖寺より態々彼の黑棗を借り來り之を摸作して藪内家に持參し、比較對照の上、宗匠より及落の宣告を受くるを例としたさうだが、此慣例は今日も繼續して、棗は内面の塗方が一段六かしい者であるから、其試驗に及第するには餘程腕前を磨かなくてはならぬ、是れが職方に對する非常の奬勵であるが、近來は時勢に連れて往時の如く宗匠家が其權威を振ふ譯にも行かず、追々斯かる美風の廢れ行くに隨ひ、各職方共に名人の種切れと爲るのは、茶器の製作が古今相及ばさる事益々遠くなる原因で、誠に慨嘆の至りに堪へぬ、と節庵君が語つて居たが、是れは藪内家ばかりでなく、職方を吟味する習慣は今後寧ろ一層嚴格にしたい者で、注文者の好事が次第に墮落すれば、名器の再び世に出づる機會が絕對に無くなるからである。

三

輸出美術品

日本の古美術品が海外に輸出されたのは、維新前に於てはナポレオン三世時代に日本より古美術品を巴里萬國博覽會に出品して、彼の地に於て其幾分を賣却したのが稍纏まつて海外に輸出された嚆矢であらう、夫れより維新後になつて舊物破壞の風國中に吹き荒み、古美術品が二束三文で賣買せられた際、米人ではフエノロサ、モールス、佛人ではビゲロなど云ふ多少美術眼を具へた外國人が、之を買收して自國若くは其他に持ち去つた其數量は不分明であるが、兎に角相當の古美術品が外國に輸出された事は事實である、余は今より三十年前歐米諸國を漫遊して彼の公私美術館を歷觀したが、當時は何等美術的鑑識眼のない青書生であつたから、如何なる程度の我が美術品が彼の地に輸出されたかと云ふ事を測量する事が出來なかつた、其後日本より美術鑑賞家若くは道具商の洋行した者は少くないが、其說區々で信を措くに足らなかつた處が、昨年の夏大阪の春海商店專務春海熊三が、我が道具界不況の折柄海外の情況を視察して來やうと云ふので、約半年間歐米漫遊に出掛けて舊臘歸朝して曰く、私は歐米諸國到る處の美術館に出入して、其中に如何なる日本美術品が陳列されてあるかと注意し、又個人所有の美術品も夫れ〴〵紹介を得て多數に檢覽して參りましたが、外國人の嗜好は一種特別で、繪畫に於ては浮世繪、四條派、漆器に於ては常憲院時代品、陶器に於ては伊萬里、鍋島、九谷等の如き者が其多數を占め、日本に於て最も珍重する古佛畫、古土佐繪卷、宋元及び日本古畫、或は宗達、光琳の作品の如き一二目星き者がないでもありませんが、米國大都市の美術館に飾られた光琳の屛風に眞赤な僞物を見受くるが如き次第で、評判程に名品が海外に散逸して居らず、況んや名物茶器等に於てをやである、斯くては我が國寶が海外に散逸したのを慨く所でなく、我が美術的價值を彼等に知らしむる爲め、寧ろ今少し多く名品を海外に散布する方が、却て得策ではあるまいかと感じた程であると云ふ報告であつた、熊三は商賣柄とて我が古美術品に就ては一隻眼を有する者である、余は彼れの報告に據りて始めて我が古美術品の海外に輸出された程度を推測する事を得たから、茲に其報告を紹介して同好者の參考に供する次第である。

滿幅皆畫

余は昨夏伊香保山中に於て小室翠雲子と閑談の際文人畫は餘りに描き過ぎて減筆の妙に乏しく、隨つて餘韻を留めざる者比々皆是れであると言つた處が、翠雲子も略同說で本來文人畫は形似の外に超越して、氣韻を以て勝るべき者であるから、減筆の間に餘韻を留むるば寧ろ其本領なるべきに、古來支那南畫派の筆法が大抵滿幅皆畫式であつたが爲め、日本の文人畫家も多くは其顰に倣ひ、貴說の如く所謂描き過ぐるの弊に陷つたのであるが、今後の文人畫家は大に靜思熟案して、時代に相應する新意匠を出さなくてはなるまいと答へたのを田邊碧堂君が一覽して、折もあらば之に對する自說を述べやうと待ち構へて居られたさうで、去年十一月二十一日、不忍辨天境内某旗亭に開かれた遊戲三昧會と云ふを一覽に出掛けた余を見るや、貴下は伊香保畫談中に支那の文人畫は兎角描き過ぐる弊があると言はれたが、其原因の第一は、彼の國の建築は日本に比すれば著しく壁が高いので長上幅の上の方まで繪が擴がつて居なくては室内裝飾として甚だ淋しいからである、又第二には支那は廣大なる土地で、揚子江の上流は格別其他は概して廣漠たる無景の場所が多く、到る處山水に飢ゑて居るから、其慾望を滿たすには寒岩枯木と云つたやうな簡單なる繪畫では到底物足らぬのである、是れが貴下の所謂描き過ぐる文人畫を要求する原因と爲るのであるから、支那文人畫の筆法が滿幅皆畫と爲るのは自ら其理由があるので、一概に之を非難する事は出來ぬのであると語られた、流石に久しく支那に漫遊して、彼の國の事態を究められた碧堂君の支那文人畫說は、如何にも尤もに思はれたが、支那は支那、日本は日本で、支那人が描き過ぐると云つて床が低く且つ坐つて掛物を眺むる日本人が其眞似をするにも當るまい、支那人が滿幅皆畫式を好むと云つて、日本の文人が減筆氣韻式を抛棄する必要もなからう、立話の際であつたから余は十分碧堂君の意中を盡し得なかつたが、君の支那文人畫に對する觀察は如何にも適切であるとしても、余が翠雲子と談論した減筆氣韻說には何等影響を及ぼさぬやうである、他日君と再論して何か感服するやうな名說を聞き得たらば、重ねて之を紹介する事としやう。

五

名笛大獅子

余は舊臘五日、厩橋梅若の舞臺で三番目能井筒を演じたが、其節笛方を勤めたのは舊福岡藩士で、維新後能樂師と爲られた杉山立枝翁であつた、翁の嚴父杉山文左衛門は千石取りの大身で、舊藩時代には大隊長を勤め、金子子爵なども其部下に屬した事があるさうだが、翁は少年の頃より能管に堪能であつたので、下らぬ役人などに爲るよりも日本一の笛吹に爲つた方が宜からうと金子子爵等の勸めに依り、遂に能樂師に爲つたさうである、翁の笛の莊重な音調は、素人耳にも唯ならず聞ゆるから、吹く其人は言はずもがな笛も定めて名品であらうと一夕其笛物語りを聞いた處が、果せる哉此笛は天下一の名笛であるさうだ、往昔中村一噌と云へる能管の達人が此笛を祕藏して居た時、その子も父に劣らぬ名人であつたが、行狀正しからず炬燵に當りながら此笛を吹いたので、親なる一噌が見咎めて大に小言を言つた處が、小一噌は憤激して其笛を柱に投げ付け、口元より二つに折つて仕まつたさうである、左れども天下の名笛であるから、其の後元の如く繼ぎ合はされて何時しか黒田侯爵家の所藏に歸したのである、笛は如何なる名品でも時々吹かねば鳴らなくなると云ふので、杉山翁は舊藩臣の縁故を以て屢々其笛の拜借を願出でたが、是れは黒田家の世襲財產であると云ふので容易に許可せられなかつた處が、豫て太鼓に堪能であつた故長知侯の追善能に石橋を出さるゝ事と爲つたので、翁は此時彼の大獅子の笛を吹きたいと願出で、其時だけは拜借が叶つたが、程なく愛子に別るゝよりも辛い思ひを爲して返上した後で他の笛を吹く氣になれず、到頭金子子爵の口添を以て重ねて黒田家に嘆願して、再び彼の笛を拜借する事となつたので、外出する時には之を懷中して肌身離さず、就寢の際は枕元に差置きて、急變あれば直ちに携帶して立退くやう片時も之を手放さぬと云ふ事である、因て請ふて其笛を一覽せしに、如何樣五百年外の物と覺しく眞黒に古びて、口の邊で二つに折れたのを漆で繼合せた處がある、又笛の頭に後藤祐乘の作なりと云ふ純金高彫の獅子が取付けてあつて、其筒は結構な金蒔繪であるが、普通の笛より餘程大形であるから、藝が勝れて息の強い人でなければ之を吹きこなす事は

出來なからう、蓋し杉山翁の如きは翁が笛やら笛が翁やら物我一體となつて、彼の言ふに言はれぬ妙音を出すので、此等は德川時代能樂道の遺物として今日最も珍重すべき者であらうと思ふ。

六
盲人の月

東明節の元祖平岡吟舟翁が、昨年幾箇か新曲を物された中に盲人の月と云のがある、翁は先づ目明の方を作つて盲人の方を余に加勢せよと言はれたから、狗尾續貂の恐れはあるが其後半は余が補足したのである。

盲人の月

〽某は此あたりに住む風雅者にて候が、冴えわたる明月にうかれ、いつしか此森のほとりまで參つて候

本調子〽アラ不思議や最年たけし盲人の森の木影にやすらゐて、物思はしげなる風情なり。

〽盲人の心にうつる明月を知るよしもなき目明人、うたてや見ゆる眼を持ちながら、月見る事は叶ふまじ。

〽なんといはるゝ。

〽眼あれども月見る心のあらざれば、盲人におとるあきめくらとかや。

〽如何にもさやう申たり、若しみ心にかなはずば、明月のありさまをそれにて御物語り候へ。

〽心得申候。

〽抑も我等が目に映る月といへば、夕空にほんのり見ゆる細月を三日の月とは申すなり、また宵やみをくまなく照す滿月を、十五夜の月とこそいふべけれ、東雲近ききぬ〳〵に、別れを惜むのこんの月を殘月とは申すなり、

二上り〽雨をかむりし朧月、雪を照すや冬の月、木影に見ゆる葉越月、廣野を出る草の月、波濤輝く水の月、田おもにうつる田毎の月にかげや唐ろく人、十三夜の牡丹餅なぞと、田舍童のナアざわ〳〵とおどりくるふも、ソンレハ〳〵月見る人の

德といふべし。

〽さておもしろき御物語りにて候。

〽盲人の月見と承り候は如何なる御事にて候ぞ、軈て語つて御聞かせ候へ。

〽左らば語つて聞かせ申すべし。

三下り　〽まづ我等盲人の眼こそ心の奥にひかへたり、萬物唯心と聞く時は時も所も一つなり、四季寒暖も心の儘よ、高いも低いもそれ〲に、心の月は照すなり。

琵琶唄　〽彼の蟬丸は逢坂の伏屋の軒をもる月に、琵琶をかなでゝ後の世までも高き調べを傳へたり。

〽惡七兵衞景清はさすらひ人となりて後、兩眼しゐて見えざれど平家一門の舟の中にすみし昔の月影をしのびて老をぞ慰めける。

〽それに我等の心も知らず、

〽明月や座頭の妻の泣く夜かな、花におく露小笹の霰こぼれやすさよめくらの涙なぞと、目あきの言草はヱ、何じやいな。

〽我等の世界にや闇はないわ。

本調子　〽雨が降る夜も月がある、目明は眼で見る空の月、盲人は心で見る月の、淸き光は內と外色卽是空と悟りつゝ、我家をさして歸りゆく。

以上一曲は從來類例のない意匠で、影や唐ろく人及び明月やの邊には前人未發の節附があつて、然も目明を陰氣に盲人を陽氣に唄ふのが作者の工夫の皮肉な處である、兎に角大正時代に於ける我が音曲界の一產物であるから同好者のお笑草に一應其由來を說明して置くのである。

七

夕時雨

昨春波多野古溪翁は抱一上人が彼の待乳沈んでこずゑのりこむ今戸橋と云ふ端唄の文句より思ひ附いて、夕時雨と箱書附せられた出雲權兵衞燒伊羅保寫の片身替り茶碗を得られたが、上人が江戸趣味に富んで、發句に堪能で河東節を好まれたと云ふ處から、古今の名句を寄せ集めて夕時雨と云ふ一篇を綴り、之れに河東の節付をさせ

られたが其文句は左の通りである。

夕時雨

本調子〽秋の暮男は泣かぬものなればこそ、背戸の梢に百舌鳥の聲、木曾殿討たれたまひぬと夕榮空に物言へば、唇寒き秋の風、藪も畑も不破の關越えてはかぶる袂柿、十が十まで澁いかは、知らねど蒂の初ちぎり、けふも暮れゆく群鴉、阿房〱〱々々とあざ笑ふ、

三下り〽馬にも散るや道ばたの、清水涸れゆく柳かげ、石ところどころ置く霜に、傲れる花は黄菊白菊そのほかの名は無くもがな。

・本調子〽その柴垣に白露もこぼさぬ萩のひとうねり、何をすねてか憎らしや、あちら向いては鴫が立つ、門立ち出れば我も行く人なるぞうたてき、待乳沈んで梢のりこむ今戸橋、土手の相傘かたみがはりの夕時雨、けふはどうして來さんした、さういふ初音を聞きに來た、晴れて又しぐるゝ音や軒の松、小蓑ほしげな猿殿の兎とひゆく夜寒でも内ぞゆかしき、

二上り〽喜見城、抑も此處の繁昌は迦陵唄ひて頻伽舞ふ、麥訶うずめの大一座、闇の夜でさへ月が照る。

〽思ひざしなら武藏野でござれ何ぢや七人猩々舞か、指す飲む挾むは繪そら事かいなてんとたまらぬ空即是色界しどもなや。

一上三下り〽更けゆく夜の戸張には、巫山の雲の縫模樣、その色包む誰が袖の、情思へばなか〳〵に逢はぬ昔がましぞかし、ばかされに來て眞實を、打込んで聞く明の鐘。

〽かゝる時雨を他所の里雨に華さく我庵は、一刷毛さつと繪の筆に、浮世の空を墨流し、かたみがはりに烏賊の身を、かくす昔の夢のあとかな。

右夕時雨は長唄の方では吉住小十郎の名を以て通つて居る江本(改姓山田)舜平が、河東節にも達して居るので其節付を爲したさうだが、昨年軒端の松に時雨の音を聞く頃には、古溪翁の獨吟で此新曲披きがあるだらうと待設けて居たのに、翁が朝鮮旅行の爲め内輪でお披きがあつたゞけで、ツイ其音を聞得なかつたから、今年の冬には定

めて之を聽く事が出來るであらう。

八

生前香奠卷

昨夏伊香保の大火に際して面白い逸事があつた同地に村松秀茂と云へる八十近い老人がある、此人は狂歌を好んで其號を文廼屋と云ひ、伊香保の溫泉宿の主人で、時々東京へも出掛けて各方面に知人が多く、風雅で溫厚な性質であるから何人にも可愛がらるゝ老人であるが、此人還曆の時、是迄知人が死去すると誰彼となく香奠を贈つて置いたから、自分が死んだ時にも亦必ず香奠を贈らるゝであらう、左ればとて死んだ後では自ら之を見る事が出來ぬから、イッソの事生前に香奠を貰つて置かうと云ふので、香奠勸化帳とも觀るべき一卷を作つて、顯官紳士學者文人俳優力士其他凡百藝人に至るまで、知名の人に香奠の豫約を記入せしめた其數幾百なるを知らず、一卷又一卷遂に是れが四大卷と爲つたが、其所謂香奠なる者は墓碑の篆額を揮毫すべしと云ひ、追善に一句を手向くべしと云ひ、或は墓前に樹木を植ゆべしと云ふなど多くは滑稽味を含んで千差萬別の思ひ附を書附けたもので、本來の趣向が面白いから記入する文句も亦可笑しく、然も其香奠豫約者中にはアベコベにお先へ冥途へ旅立ちした者もあつて、今は世にも珍らしい生前香奠卷となつたが、昨夏伊香保大火の節村松老人の家は最も火元に近かつたので、着たきり雀で飛び出したまゝ跡に一物をも殘さざる始末だから、無論彼の珍卷も烏有に歸した事と思ひの外、當時木暮武太夫の本館に關直彥君が滯在せられたので、老人は例の卷物を君に示し、旁々香奠の記入を乞はんとて、大火の兩三日前彼の卷物を持參して悉皆關君に預けて置いたさうである、處で關君はどうであつたかと云ふに、要書入りの革包一つと卷煙草三箱を抱へたまゝ倉忙木暮別館に避難して、無慘にも秘藏の河鹿を燒き殺した程であつたから、彼の卷物も其儘に置去られたが、前日東京よりフラと遊びに來られた書生殿が、爛頭焦額の大働きで、二度まで火中を潜り拔け、君の室內に在つた雜品を大半取出して來られた其中に彼の卷物があつたので、關君は大に預り物の無事を悅ばれたが、村松老人は又格別で、此卷物さへ無難なれば家などは燒けても惜くはありませんと俄に元氣附

いたさうである、左るにても物の存滅は人智を以て測る可らずで、野分の朝に百尺の大木が倒れて居る傍に、一寸の小草が立つて居るのを發見する事もあるが、伊香保は丸燒と爲つたのに、香奠卷が無事であると云ふのは矢張此類ではあるまいか。

九 馬鹿囃子

馬鹿囃子と云へば、都下を始め近郷近在のお祭に大太鼓、小太鼓、笛、シャギリでチャンチキチヒューードン〳〵と唯無造作に囃立てる者かと思へば、イヤ中々左樣な譯ではないさうである、平岡吟舟翁は少年の頃より馬鹿得子が大好きで、其笛太鼓は勿論、例のおかめ馬鹿ひよつとこの振方まで悉く會得して居らるゝさうだが、此囃子にはしやうでん、四丁目、神田丸、屋臺、きりん、龜井戸、鞨鼓、かいでん、唐樂、鎌倉さがりはなど云ふ十數種あつて、正式に之を心得居る者は日本廣しと雖も吟舟翁の外今は一人もないさうで、此傳を失つて仕舞ふのは斯道の爲め誠に遺憾であると云ふので、杵屋六四郎が發起して長唄研精會囃子方連中の若手を集め、自宅を稽古場として一週一回翁の出張を乞ひ、馬鹿囃子の免許皆傳を得やうと頻りに稽古を勵んで居るが、今や其稽古數回に亙つて愈々興味が出て來る程段々六ケしくなる中にも、一番六かしいのは笛方で、皆傳に爲るには二三年掛るであらうと云ふ事だが、此連中が夢中になるに隨ひ、ヒュー〳〵ドン〳〵の聲は愈々八釜しく成り行きて時ならぬお祭騷ぎに近所隣は大迷惑であらうと云ふ評判である。

杉本一齋

杉本一齋とは誰の事やら一寸分らぬであらうが、是れは右馬鹿囃子の宿房を引受けた、長唄研精會の三味線方大立物杵屋六四郎の事である、六四郎は本姓杉本、名は金太郎で、當年取つて漸く四十八歳だが、名人肌の藝を重んじ名を惜む風があつて、動もすれば其藝の衰へざる中に隱居しやうと云ふ意嚮があるらしい、處で余に其隱居後の名を附けて貰ひたいと云ふ希望があつたが、急ぐ事でもあるまいと其儘打ち棄てゝ居た處が、此程弟子中の某より三味線の銘を乞はれて千鳥と名づけ、歌一首を其箱に書附けたもの、落款は六四郎でもあるまいと遽に雅號の入用が起つたと言はる

るので、余は即座に一齋と云ふ名を贈つた、其謂れは如何にと聞かれたから、雙六の賽の六の裏は一であるのである、即ち六が隱居すれば一になるのであると言つた處が、平常洒落好きの六四郎は呵々と打笑ひ、夫れならば一齋と云ふよりも寧ろ一賽と云ふ方が早分りでありませうと、一度で納まつて此問題が一切片附いたから、早晩公然と六が一に爲る時節が到來するであらう。

十　桂谷畫談

舊臘一日永眠した下條桂谷翁の經歷は、曩に大畫伯桂谷翁と題して當欄に記述したが、余は翁と多年の莫逆であつたから、想ひ回すと樣々の逸事が胸に浮んで來るのである、桂谷翁は天保十三壬寅生れであつたが、明治三十五年壬寅大晦日に余は翁を訪ねて先生の還曆の年も今日一日となりましたと挨拶したらば、左らば來年は卯年であるから兎を一つ描いて進ぜやうと言つて居る處に、野口小蘋女史が遣つて來られたので、是れは日本一の男女兩大家が一室に會したのだから、何か合作を願ひたいと言へば、翁は早速尺八絹本を展べて下の方に黑白の兎二疋を描き、明治壬寅除日桂谷寫として雲庵の印を押された、すると小蘋女史は直に畫筆を抽いて上の方に日輪を描き、兎の鼻先に福壽草を物して小蘋作旭及福壽草と認め、畫家の嗜みで此時携へ居られた小蘋の小印を押されたのである、桂谷小蘋合作は他に其類があるかも知らぬが、余に取りては是れが最も思ひ出多き記念物である、又其次の寅年即ち大正三年甲寅は桂谷翁の繪畫が老熟の極點に達した時で、此年に描いた者には殊に傑作が多いやうである、其頃翁の愛弟八木岡春山が畫竹を研究して大に悟る所があつたとて語る所に依れば、竹の幹を描く時、姿勢を正うして下腹に滿身の力を籠め息を吐かずに一氣に筆を運べば、稍師翁に近い者が出來ると云ふ事であつた、此時余は四谷傳馬町の天馬軒に住んで居たが、一夕親友相會した席上で桂谷翁が座輿に竹を描く所を見ると、是れは至つて無造作なもので、姿勢を正うするでもなければ下腹に力を入るゝでもなく、切山椒を頰張りながら傍人と談笑しつゝ、サラ〳〵と筆を運んだ、其時の出來は翁も自ら傑作と思はれてか、此竹は他人に遣らずに當家に保存して貰ひたいと

言はれた程で、丹青の能事も極所に至れば、形式を超越して斯かる無我の境に入るものかと一座大に感服した次第である、翁は嘗て松下牧童の大幅を畫いて明治大帝に獻納した事があつたが、至極御氣に入つた者と見えて屢々御學問所に掛けさせられたと云ふ事である、夫れ此れ思ひ合せて余は此頃七絕四首を捻出したから、已調ではあるが左に之を揭げやう。

破墨山水

丹青餘技本超群　桂谷盛名天下聞
破墨描成山水妙　雪舟以後獨推君

墨竹

湘雲楚雨好傳神　蘇軾文同德有隣
寫出兩三竿墨竹　虛心勁節亦如人

松下牧童

嘗描松下牧童圖　徵入宮園榮有餘
今日若人騎鶴去　千秋名下竟無虛

牧溪遺風

畫中眞理古今同　自不求工而後工
惜墨如金能省筆　牧溪繪事見遺風

十一　新畫家氣質

昨年三月頃まで古美術品の價額が鰻上りに昂進したのに連れて、新畫の相場も非常の高價に上り、描けば直出來る者が一幅何千圓甚だしきは何萬圓と云ふ勢ひであるから、少しも早く描いて貰はふと云ふ黑人仲間は、一幅に數千圓の前金を納めて只管揮毫を依賴したさうだが、斯かる注文が輻湊して京都の或る大家は銀行に十數萬圓の潤筆前金を預けて置いたと云ふ評判であつた、然るに四月頃から例の財界大瓦落で古美術品入札は跡を絕ち、新畫は値段に拘らず顧客皆無と云ふ慘狀を呈したので、豫て彼の大家に數千圓の前金を納めて一幅注文して置いた道具商が、素早く前金取

戻しと出掛けた處が、此日に限りて細君が愛想好く出迎へ、先生は只今手放し兼ねる仕事中でありますから暫時お待ち下されとて、茶よ菓子よと接待に勉め、果は午餐まで運び出して百方引止策を講じて、三時間許りの後長々お待たせ申しましたと先生の畫室に案内されたので、前金取戻しを言ひ出さんとせしに、先生汗を拭きながら大恐縮の體で、御依頼の一幅存じながら大延引にて何とも申譯なければ、今日大勉強にて只今漸く描上げたる所なりと先を越されて、件の道具屋は啞然として開いた口が塞がらず、澁々其一幅を頂戴して引下つたと云ふ珍談がある、餘りの珍談で少しく著述交りとも思はるゝが、如何にもありさうな事實であつて、當世流行の新畫家氣質が見え透くやうである、斯くて此新畫の一時大に流行したのは兎や萬年青の流行の如く、熱が覺むれば一場の夢となり、實力の伴はない盛名は決して永續する者でないと云ふ事を現實に證明した者ではあるまいか、果して然らば其盛衰の甚だしかつた程、畫家等の頭に益々多くの感動を與へた譯ではあるまいか、即ち昨年の春を界として新畫の價値に雲泥の相違を生じたのが、我が新畫家に反省心を起さしめ、彼等をして其實力を修養するの必要を感ぜしむる事を得ば、彼の激變は我が美術界の前途に多少の光明を與ふる一動機と爲り得るかも知れぬ、兎角物は善き方に考へて改善の道を講ずるが得策であるから、我が新畫家も其苦き經驗の中より或る物を贏ち得る覺悟があつて然るべきであらう。

十二　鷄旦の詩

岩溪裳川翁が、臘末我が伽藍洞を訪ふて翌新年の詩を示さるゝのは三四年來恒例の如くに爲つて居るが、舊臘も亦例の如く來洞せられて辛酉元旦と題する七律一首と、詠鷄七絕二首を示されたが、其七律の方は左の如くである。

春風鷄唱入鷄年　今古知渠五德全
絳幘迓籌金闕曉　烏巾對酒草堂天
獨嗤人意居牛後　誰趁雲心在鶴前
醉裏老懷難棄肋　梅窓晴日寫新篇

例ながら輕妙で用典自在であるが、其中絳幘送籌と云ふ事に就き、翁は、昔支那宮廷には衛士が鷄頭に擬した朱冠を着け宮中には鷄が居ないから其鳴き眞似をして曉を告げ廻る例制があつたので、唐の王維の詩に絳幘鷄人送曉籌と云ふ句があるが、曉籌は曉漏と同じく時を報ずるのであると物語られた西洋の歌劇の化裝隊に時々動物の形をして踊るのがあるが、支那の宮廷にはオペラ式が行はれて、千餘年前に早やコンナ化裝隊があつたものと見える、今年など帝劇邊で鷄人の歌劇でも演じたら目新しくて大受けだらうと思はるゝから、序ながら一寸お知らせして置かう。

舞樂の歌

舊冬永眠した御歌所寄人大口鯛二氏が、歌學に精通して兼て詠歌に堪能であつた事は人の能く知る所で、目下斯道の第一人者と云はるゝ宮中顧問官井上通泰博士なども平常氏を推稱して居られたが、或る時博士が寄人に面喰はしたと云ふ名譽談がある、兩三年前宮中御兼題に舞樂と云ふのが出て、專門歌人達も此題には大いに閉口されたさうだが、此時井上博士は

　祝ひてや御國の舞とさためけん　高麗もろこしを右に左に

と詠んださうである、是れは舞樂の時、高麗樂は舞人が右の肩を拔き、唐樂は左の肩を拔いで舞ふのが定制である、其事を博士が巧に活用されたので、大口氏などは感歎の餘り、此題は博士に手柄を立てさせる爲めに出されたやうなものであると言はれたさうだ、其時博士は大口氏に向ひ斯樣なる題を詠むには一つの秘傳があるが貴下若し御承知なくば御傳授申さうかと眞面目に言ひ出されたので、夫れは如何なる秘傳なるかと大口氏が問はれた處が、博士は呵々と打笑ひ、イヤ別に六かしい秘傳でもないが、夫れは學問をするのであると言はれたさうである。

十三
盆栽同好會

交詢社同人中盆栽趣味を同じうする者が、芝公園紅葉館に於て時々盆栽會を催さるる事があるが、其先輩には波多野古溪、北川南蠻、志賀直溫、山名次郎、中鉢苔石、岡田雨香

等の顔觸れがあり、新進には福澤趣亭、林雅亭、武智直道、倉知誠夫、今村繁三等の歴々があつて、各〻得意の名木珍卉を持寄り、天狗の鼻の鉢合せを演ぜらるゝは、諸君が年と共に頭が禿げたり腰が曲つたりして盆栽然たる古物の形相を呈して來たからと云ふ譯でもあるまいが、老人に相應しい清き樂き反動の少い道樂の選擇は頗る賢明なりと謂つべしである、而して最初は唯盆栽を陳列するだけで有たが、近來は段々新趣向が出て來て、昨年十一月廿日に催された武智直道君主催、北川南蠻翁後援の盆栽會の如きは、明治神宮鎭座祭と云ふ課題を出し、主人武智君は離れ座敷十疊の床に渡邊省亭筆旭日の圖を掛け、備前燒大花瓶に菊と桐を活け、床脇棚に古鈴、琅玕笛、鈿女命の陶像を置き、其下に榊の盆栽を飾られた、又岡田雨香君受持の小間には、文晁筆の幟に抱一上人が天王お祭と達筆を揮つた一軸を掛け、備前緋襷瓢形花入に一枝の野菊を活けられた、更に諸家盆栽持寄りの大廣間を見れば、金屏風を環して一家毎に一席を作り、北川南蠻翁のは鈴の繪を盛上げた根來塗りの懸板を掛け、春日神社にあつたと云ふ極めて小形の銅製釣燈籠を丈高き竹臺の上に置き、その傍に杉の盆栽を飾られた、中鉢苔石君のは明治天皇が徳川公爵家に御臨幸の際、勝海舟伯が自詠三首を書かれた横物を掛け、霜に飽きた楓の盆栽の下に小さき鳥居を立て、自然石の鳩を其傍に置かれ、其他十人許りの出品者が同課題に就き苦心慘澹の趣向を凝らされたのは頗る面白き陳列であつた、又舊臘二十一日には歳暮の盆栽會があつて、是れも様々の新趣向があつたが、本文の盆栽を引き立つる爲め、趣味を唆る様な掛物だの置物だのを附け加へるのは、近頃奇術師天勝が本藝の奇術にダンスや唱歌を加味するのと同様で、目先が變つて面白くはあるが、餘り増長して茶番的に陷らぬ用心が必要だらうと思ふ、若し夫れ盆栽夫れ自身の趣味に就ては、右同人諸君の面白い實驗說もあるが、是れは短篇では盡されぬから他日機會を得て改めて紹介する事としやう。

（大正十年一月十六日）

芝翫と山陽

一

舊臘二十五日の事であつた、歌舞伎座の暮興行中、色彩間苅豆卽ち累與右衛門の狂言

が大層好評で、今日千秋樂であるから是非一覽せよと或る友人の勸誘を受けたので、俄に思ひ立つて一覽したが、梅幸の累、羽左衛門の與右衛門は年輩技藝共に最も此役柄に相當して居る、其一方に地方の清元延壽太夫が音聲も技巧も今や老熟の極點に達して居るので、是れ程の累は余等の一代には重ねて見る事が出來ぬであらうと思はれた、余は此三拍子揃つた狂言に醉はされて唯陶然として見物席に控へ居た處に、中村福助丈が遣つて來て、親父が左る人より先代に關する賴山陽の手簡を見せられましたが、一度先生に鑑てお貰ひ申したいさうでありますから、此狂言が濟んだら別席へ御出でを願ひたいと云ふ事であつた、因つて歸途芝居茶屋武田家に立寄れば、先づ延壽太夫が遣つて來て、今度の累の淨瑠璃位骨の折れる者はありません、寒氣の折柄四本の高調子で有らん限りの大聲を發するのでありますから、事實精進潔齋で以て繫いで居るので、少しでも身體に無理をすれば到底アノ聲を出し續ける事は出來ませんと言はれたが、此等は古來刀鍛冶だの能役者だのが大切の技藝を現はすに當りて、別火若くは精進を爲すの意義を自然に說明する者であると思はれた、折柄歌右衛門丈がマンマと寶藏に忍び入りの型で、紫服紗で包んだ卷物を小腋に掻込んで此席に這入つて來たので、延壽共々其卷物を披き見れば、是れは賴山陽が其愛弟たる播州人馬場三郎右衛門に送つた手簡で、其中に芝翫の事を記した一節がある、而して其手簡は山陽の筆札の最も老熟した四十六歲の書であり、殊に愛弟に與へた者であるから無遠慮に達筆を揮つた者で、山陽書簡中最も優れた出來物と思はれた、そして此書簡中には姬路藩主酒井雅樂頭の一家老河合隼之介に關する消息が書かれてあるが、余は過般姬路藩の舊臣武井守正男に面した時、圖らず河合に關する逸事を聞かされ、其時山陽が此河合と最も懇親であつた事をも承知したので、此手簡を見ると同時に種々の感想が胸一杯に湧き起つたのである、又歌右衛門丈よりは、此書翰中にある芝翫が三代目歌右衛門で中村家歷代中最も技藝に秀で、俳諧狂歌戲作に長じた人物であつた事を傳へ聞いたので、夫等を綜合して芝翫と山陽の一篇を書いて見やうと云ふ考へを起し、直に其卷物を借受けて歸つたのである。

二

芝翫名入の賴山陽書翰は歌右衞門の家に取つては最も貴重にして、且つ興味ある寶物であるから、其價を論ぜず買取るが宜からうと勸告して、卽座に其卷物を借受けて歸宅の上之を寫し取つて見れば、頗る面白い書翰であるから、今左に其全文を揭げやう。

扨々申譯なきと云申譯もなき御無沙汰仕候、日々夜々關心候、ツイ狀一通上候事はやすけれども、それも無益抔と存候て及此候、每々近藤氏へ傳言申遣候相達候哉、三介氏もキッイ疎遠打過候、學生衆よりは每日詩文とも參候、今暮も九人連名にて金貳百疋參候(これも今年切に理可申哉とも存居候)此儀も三介氏に御傳可被下候、貴公御託しの絹三介氏にも畫は御理可仕候故、貴家へは如何可仕と存候、三介氏には長き卷物詩稿を遣候、貴公へは卽ちアノ絹に本朝詠史八首七律をよこには易けれども、一幅懸物にて本朝古今興廢一覽相濟候樣に可仕と立物に認候、

王朝　一　中興　二　鎌倉　三　室町　四 卽足利　織田　五　豐臣　六　御當家　七

右の通りに候、是は山陽外史一代の精神を籠候外史を詩にツヽメ候樣のものにて、畫よりは遙にましなるべし。

今年は老大夫下國無之と相見候、來春は母迎か送かに可參、其節は有無可懸御目と相樂候、平目の鱠、ゑひの炙難忘候、殊に再度奉訪の時、紅葉底一醉、往來夢寐候。芝翫も又々出申て私詩を遣し申候、篠崎さそ口惜カロウト存じ候、公儀願さへも願下に致候程の大先生なれば、山陽外史の絕句などは屁也、俟期來陽、目出度可申上候、御老母樣へ乍末毫よろしく不一。

伊丹劍菱より潤筆に一丁只今到着、アハレ此口あけを御同酌と存じ候事に候。

臘廿七日　襄

三郞右衞門樣

尙々大夫より拜借書物は御屋敷へ返璧仕候、私外史二冊大夫へ御借し申候あれを御返し被下度旨近藤へ申遣置候、それ所ではあるまじく候へ共、此節校正入用に候故、何卒急に御返し被下候樣致し度候。

三

芝翫名入の山陽書簡は一卷に仕立てられて、其末尾に山陽の義孫に當る頼潔通稱龍三氏の跋文が添へられてあるが、是れは漢文で且つ長篇であるから通讀に便なるやう左に其大意を飜譯しやう。

山陽翁小札の宛名三郎右衞門とある其人は、姓を馬場字を元華と云ひ、播州の人で翁の愛弟である、又書中に近藤とあるのは名を小五郎と稱する人で、三介と云ふのは姓を中谷字を士寅と云て、嘗て業を翁に受けた者である、其學生九人と云ふのは蓋し仁壽山黌に學んだ者であらう、其大夫と稱する者は、姫路藩の執政河合漢年である、漢年は名を鼎と云ひ、後道臣と改め、白水寸翁等の號がある、其篠崎と稱するは即ち小竹散人である、而して芝翫は當時の名優で年四十で藝を歇め、改めて龍玉と號した者である、書簡の長さは僅かに二尺六寸許りであるが、揮洒縱横許多の曲折があつて展讀する人をして晷の移るを知らざらしむ、又書中に云ふ所の本朝詠史七律(之を略す)及び芝翫に送るの詩は下記の如くである。

梨園白髮未知新　萬目奔流勇退身
採得驪龍珠幾顆　剩將鱗爪付餘人
舊譜飜來總覺新　眇軀扮出萬千身
愧吾筆腕受纒縛　不出神奇傲古人

此卷物には窪田喜三郎氏の手簡が添へてあるが、是れは氏が右山陽の手紙を頼潔氏に見せた時、潔氏は祖父山陽が芝翫の事を書入れた手簡は今日初めて一覽したが、極めて珍らしい者であると殊の外に感賞し、夫れに就き我家に傳へられた珍談があるとて、左の如く語られた事を書附けた者である。

梅颸女史(山陽の實母)は文政七年上洛の途次、大阪に於て先づ芝翫の忠臣藏の芝居を見られたが、程經て同じ芝居を京都に於て再見せられた時、芝翫の勤めた役で槍を遣ふ其手際が、大阪で見た時と大に違つて女史の意に適はなかつたので、女史は頻にもどかしがられて圖らず聲を發せしを、隣席に居た芝翫贔屓の客が不思議に思ひ、何でも是れは劍道の心得ある人ならんと、芝翫の樂屋に此事を通じたので、芝翫は女史の歸らるゝ時其跡を附けさせた處が、三本木の頼山陽の宅に這入られた

と聞き、翌日賴家を訪問して山陽に面會し、昨日の出來事を更に女史に尋ねた處が、夫れは却つて氣の毒であつた、實は先達て大阪角座で見た時の槍の遣ひ樣と、今度見た所と餘りに相違して居るので、我知らず聲を發したのが人の耳に留つて、却て恥かしい事であると挨拶されたさうである。

四

山陽の母梅颸女史が芝翫の忠臣藏を見られた時の逸事談が、賴家に傳はつて居るとて賴潔氏が窪田氏に話された物語りは、女史が如何に觀劇眼を具へて居つたかと云ふ事を證據立てる者で頗る面白い話であるが、是れには猶左の如き餘談がある、芝翫が京都で演じた忠臣藏の持役の內で、槍の遣ひ方に就き梅颸女史の批評を傳へ聞き、三本木の賴山陽の宅に罷出で、女史より同じ芝居でありながら京都大阪兩地に於ける演藝の仕方に相違あるは如何にと尋ねられた時芝翫は京都大阪と區別して藝事を粗略にする譯には非ざれども、兎角藝事は相手に依り又其時の呼吸に依りて氣合の掛ると掛らぬとあり折惡く今度のがお目に愜はざりしは如何にも不調法の至りなるが左るにても槍の遣ひ方に就き斯くまで微細に御覽下されしは劍道の御心得あるに因る事と存ぜられ我等俳優の敎訓にも相成るべき事なれば誠に有難き仕合なりとて其日は唯感謝の意を表して立歸りしが、是れが緣故と爲りたるにや其後芝翫は屢々賴家に出入して山陽の知遇を受けたりとなり又此芝翫の勤めたる忠臣藏の持役は唯槍を遣ひたりと云ふまでゞ、梅颸日記にも夫れ以上の記事は見當らないが梅颸女史が山陽の請ふがまゝに上洛して京大阪を見物したのは文政七年の事であつて其日記中に左の通りの記事がある。

文政七甲申

二月晦日　廣島を出立せり。

三月十四日　大阪に着久太郎迎へに來る。

四月三日　角の芝居見物せり、中村芝翫市川團藏澤村國太郎、忠臣藏梅ケ枝なり。

四月二十日　因幡藥師の芝居見物せり、角座の出しものと同じく、芝

翫忠臣藏。

此日記に由つて觀ると、如何樣女史は大阪で芝翫の忠臣藏を見て京で又同芝居を見た事が事實である。而して芝翫が賴家に出入するやうに爲つたのは、或は前記賴潔氏の談話の如く、梅颸女史の芝翫に對する劇評が端緒となつたのかも知らぬ。併し山陽が態々二絕句を贈つて彼を激賞した所を觀れば、當時芝翫が京阪に於て如何に有名であつたかと云ふ事も分り、又芝翫と山陽との交情が可なり濃厚であつた事も分るのである。

五

賴山陽の愛顧を受けたる中村芝翫は、三代目の中村歌右衛門で、當時京阪地方に於て名聲嘖々たる千兩役者であつた。彼は文筆に長じ年四十の役者盛りに役者を罷めたさうであるが、俳優にして作者を兼ね、俳優の方では梅玉と號し、作者の方では龍玉と稱したさうである。山陽が彼に與へた七絕二首は、彼が作者の名たる龍玉に因みて趣向を凝らされた者であるが、此詩は其後多少改訂された者と見えて前後少しく字句の變つた所がある。山陽が此詩を書いた者の中に、酒間戯作贈龍玉子時乙酉八月也山陽醉客と云ふ落欵のあるのを觀れば、之を書き與へたのは文政八年で、梅颸女史が芝翫の芝居を見たと云ふ翌年である。此時山陽は四十六歲で關西の文壇に於て已に大名を博した時であるから、芝翫は其詩を得て嬉しさの餘り扇面に左の文句を認めて山陽に送つたさうである。

　京都にて山陽賴先生に目通りせし時、我作者をする時の名を龍玉と云ふを聞き給ひて、卽座に詩を作り與へ給ふ其嬉しさに、

　　ひらかせる筆のいなづま墨の雲

　　　おとに聞えしらいをいただく

其處で山陽は昨年母なる梅颸女史が上洛中、芝翫の芝居を見た事がある其記憶を喚起して、舊遊を偲ぶのよすがとなさんと思ひし者か、梅玉より贈られた此扇子を廣島なる母の許に送られたさうである。山陽書翰中に芝翫も又々出申候て私詩を遣し申候、篠崎さぞ口惜しからうと存じ候とあるのは、無論山陽が七絕二首を芝翫に

贈つた時の事であらう、其篠崎さぞ口惜からうと云ふのは如何なる事であるか、兎に角山陽と小竹と芝翫との間に何かの交渉があつて、山陽が小竹を出し拔いたと云ふやうな椿事があつたものだらうと思はれる。

六

賴山陽に愛顧せられた三代目中村歌右衛門は如何なる役者であつたか、今の五代目歌右衛門丈が所藏する梅玉餘響及芝翫節用百戲通を借讀して見て、彼が果して山陽の愛顧に背かぬ程の偉才であつた事が分つたのである、抑も初代中村歌右衛門は加賀の產であつて、俳名を一先と云ひ、後に加賀屋哥七と改めた中村源右衛門の弟子中村千彌に就て修業し寬保二年初めて江戶中村座に出勤、天明八年大阪中の芝居にて新薄雪狂言に、正宗の役を勤めたのを一世一代として寬政三年行年七十八で歿したのである、此人は卽ち三代目の實父で、三代目が晚年或る人に示さんとて自ら其履歷を認めた者の中に左の一節がある。

私實父初代の歌右衛門は元加州の產にて、十七歲の時役者に相成り、江戶へ出て申し歌右衛門と改め、京都に出勤致し、夫れより三都にて人も知る役者に相成り、後年水木東藏と申す中芝居の役者へ名前を讓り、加賀屋哥七と改め勤め居られし內、東藏少々心に叶はぬ義有之名前を取上げ苗字だけ付させ中村東藏と申す、是れ卽ち二代目歌右衛門にて、これにて私は實子ながらも三代目に當り申し、初めは福之助と申し安永八年三月三日の誕生に御座候、親共申候には我は若氣の至りにて放蕩に身を持ち、斯樣の家業に成り果てたれども、其方は姊の緣付居り候醫師中川正甫の方へ遣はし少々物も讀ませ末々は醫者にする積りと申され候、私幼心にはやはり役者に爲りたく色々と申し、其頃の立者三五郞、雛助、三保木などを母より賴み、此人々參り先づ〳〵我等へ預置かれ候へと申され候得共親共聞入れ不申、私七歲の思案に、此上は神佛を賴んでなりとも役者になりたいと、其頃千日前竹林寺に今も有之候不動尊大に御利益ある由承り候故、これへ水をあび雪の降るのも厭はず、裸にて祈り居り申す內に、着物を取られ候事も御座候、母申候には方々の子供は皆子供芝居へ樂屋入をするを面白い事のやうに思ふ子供心は尤もじやが、父御

が物堅いゆへと色々なだめられ、其内親共頼み寺正法寺へ參るとて私を連れられ其歸るさ、いつも日本橋を北へ渡る・處を、どういふ事にか其日は若太夫芝居の前を過られ、看板を觀て奥次郎が座頭じやなと申、何心なく立つて居られ候時、勘定場私共の伯父源藏居合せ、無理に勸めて一幕見物致させ申候、其狂言は國姓爺三段目にて、頼太夫かたり首ふりにて韓琦奥次郎、錦祥女花桐、和藤內友藏、皆々私同年の子供に御座候、之を見て歸りがけに源藏へ相談し、芙雀、三保木、雛助、雷太などへも申合、次の替りより私を出す積りに親共申候、是れは全く竹林寺不動樣の御蔭と子供心に嬉しく存じ居り申候。

三代目歌右衛門が其幼時に於ける役者志願の熱烈なりし前記自敍傳を見れば、後年彼が名優として大名を成したのも、決して偶然でない事が分るのである。

七

三代目歌右衛門は、實父の意志に抗して幼年より役者を志願した丈けに、技藝夙成、行く所として可ならざるなく、十七八の青年で大阪角の芝居にまねぎ看板を出された程の人氣役者であつた、所作舞が大得意で、初め嵐小六に習つて遂に自ら一家を成し、後年江戸に出づるや中村秀鶴の藝風を慕ひ、志賀山流の舌出し三番叟を傳へて自ら之を勤めたさうだが、山姥、金時、法界坊、塚本狐、名古屋山三、逆艫の松右衛門など、所作事交りの狂言が其獨擅場であつたさうだ、彼は本藝の外に數々の隱し藝があつて、龍玉の名を以て狂言戲作を爲し、俳諧が得意で俳名を芝翫と云ひ、後梅玉と改め、百戲園又は百奇と稱した、而して其發句は東山土卯に學び、狂歌は江戸に於て蜀山人、浪花に於て鶴延屋翁又は六々大人に習つたさうだが、舞臺に於ける藝力より湧き出づる一種獨特の才調は自ら一家の體を成して專門家を凌いださうである、彼は好んで小歌を作り自ら節付して之を唄ひ、又振付して之を舞ふた、さうかと思へば時に畫筆を弄んで俳畫を寫し、又自ら之れに讃する事もあつた、本來意匠に富んだ人であるから、新狂言が出る毎に目新しい衣服の模樣を案出したが、元祖が加賀から出たので梅鉢の紋を用ひ、模樣の好みも梅の花が最も多かつた、又此人は眼が大きかつたと見えて印章に眼玉形を用ひ、目蝶、目出鯛、目玉絞りなど云ふ模樣を工夫して當時大に流行した

さうである、梅玉餘響中には彼の發句、狂歌、小歌等を澤山載せてあるが、夫れ〴〵一種の風格を具へて其凡手に非ざる事を示して居る、斯くまで多藝多能であつて盛名天下を動かした名優三代目歌右衛門は、天保九年七月二十五日、還暦の歳を一期として大阪で歿したので、高津の東正法寺に葬り、法號を歌唄院宗讃日德と云つたが、其辭世の句は

南無さらば妙法蓮華經かぎり

と云ふので、是れは其碑陰に彫り附けてあるさうだ、天保九年庸齋と云へる人の書いた梅玉餘響の序文に、

梅玉子之於俳戲、至矣盡矣、末旦淨丑、莫所不宜、古云左右逢原、又云前無古人、後無來者、其斯人謂乎、今茲戊戌、不幸遠逝、年實還曆、性至孝、嘗在江戶、場罷將歸、有一大官人、以千金留之、辭曰老母在浪華、待吾久矣、官人固要之、亦固辭曰美姬亦待矣、官人笑而罷。

の一節がある、蓋し彼は先天的名優であつた上に、多才多能にして風雅の嗜み深く、文學技藝凡百の趣味を解したので、德川の文化爛熟期に於ても斯界の第一人者と云はれたのであらう、古來偉人の相遇は眞に稀有なる者で、山陽ありと雖も此人なくんば詩を贈る事も出來ず、又狂歌の返答をする者もあるまい、今日文壇果して山陽ありや、藝苑又三代目歌右衛門の如き者ありや、思ふて此に至れば聊か嘆慨を發せざるを得ないのである。

八

賴山陽が芝翫名入の手簡を與へた馬場三郎右衛門と云ふ人は蓋し姫路の藩臣であらう、而して書中に今年は老大夫下國無之と相見候、來春は母迎か送かに可參、其節は有無可懸御目と相樂候とあり、又尙尙書に大夫より拜借書物は、御屋敷へ返壁仕候、私外史二冊大夫へ御借し申候、あれを御返し被下度旨近藤へ申遺置候とある、此老大夫と云へるは無論姫路藩老河合隼之介の事である、隼之介は賴潔氏の跋文にあつた通り、姫路藩主酒井雅樂頭の家老で、字は漢年、諱は鼎、後道臣と改め、白水、寸翁等の號のあつた人である、明和四年に生れ、才學並び秀で一廉の器量人であつたので、時の藩主酒井忠以の愛する所となり天明七年其父、宗見に代つて家老職に就いたが、氣

概のある人であるから、當時の同僚と説を異にして其職に安んぜず、京師に出でゝ儒を以て世に立たんと志し、十數年間專ら讀書講學に從事して居つたが、其頃姬路藩の財政紊亂の極度に達し、負債七十三萬兩に上つたので、遂に隼之介を起して家老の上席に置き、其理財的巨腕を揮はしめた處が、彼は先づ殖產工業に着眼し、山林を拓いて桑茶等を栽培せしめ、或は新田を造り又は製鹽業を奬勵し、加古川と圓山川とを疏通して運輸交通の便を開き、藍染紋松葉染若くは革細工、白粉等の製造業を興して財用の充實を謀つたので、幾何もなく藩政大いに振ひ、貪吏影を潛め、年を經るに隨つて巨多の負債を消却した許りでなく、財帑頗る裕に爲つたので、文政二年時の藩主酒井忠實は深く河合の功勞を嘉し、姬路城の東南阿保村に在る仁壽山と云ふ景勝の地を彼に賞與せしに、河合は此處に仁壽山黌と云へる校舍を設け、文庫を造て書籍を蓄へ、朱子を祀りて配するに藤原惺窩を以てし、學者を聘して藩の子弟を敎育せしむる方法を立てたので、姬路地方に遊歷する學者は、黌內の迎賓室に宿泊して、或は靜かに著作を爲し或は出でゝ子弟に敎授し、行脚僧に於ける禪宗寺の觀があつたさうである、

武井守正男の談に、仁壽山は眺望の佳い處で、河合が迎賓館に充てた水樓と云へる樓閣は、一目に十一國を見渡す事が出來ると云ふので、其中に六一亭と云ふ者があつたが、是れは日本六十六州の六分の一を一目に見渡すと云ふので斯く名けたもので、其中伯耆の國は大仙の山が見ゆるので、之を一州に加へたのださうだ當黌內には固より藏書が多いので、山陽の日本外史の如き參考書及び其他の關係に於て、仁壽山黌に負ふ所が少くなかつたと云ふ事である。

九

姬路藩老河合隼之介は、姬路藩の功臣として盛名嘖々、天下に轟いて、丹羽左京太夫老臣丹羽彖之介、水野出羽守の出頭土方縫殿介と併せて當時の三介と稱せられた、河合は姬路に仁壽山黌を設けて子弟を敎育し、學者を禮待したが中にも、山陽に對しては最も深く敬意を表し最初五百石で姬路藩に召抱へんとしたが、山陽が之に應じなかつたので、彼が京都と廣島との間を往復する途次、仁壽山黌に立寄つて子弟の薰陶を爲す事を依賴した、其處で山陽も其知己の恩に酬ゆるが爲め心を盡して山黌の子弟

に教授し、長時日彼の水樓に寄宿して、詩文を添削し經史を講義せられたさうで、山陽の詩文中に仁壽山黌に關する者が尠くない、初め山陽が仁壽山黌に於て河合藩老と會見した時、山陽は河合と初對面の挨拶を爲して、頭を上げて床の間を見ると、刀架の上に河合の刀が架けられてあつて、自身の帶して來た大小は次の間に捨て置かれたので、心中不平に堪へず、河合が如何に一藩の老職とは云ひながら、粗略に我が魂を取扱ふは天下の儒者を待つの禮に非ずとて、將に席を蹴つて立去らんとするを見て、河合の侍者は大に驚き、是れ老職の知る所に非ず、全く吾等の不注意なれば平に御容赦あれかしとて、漸く山陽を宥めつゝ其大小を紫縮緬の袱紗に包みて恭しく床の刀架に掛けたので、山陽も忽ち機嫌を直して懇に河合と交り、其後姫路を通行する時には必ず仁壽山黌に立寄つて、子弟の薫陶を力めたさうであるが、維新の際武井男を始め其他の同志が大に勤王論を唱へ、反對黨の爲めに數年間土牢の中に投ぜられても、更に其志操を變ぜざりしと云ふが如き、蓋し山陽等の訓育に係る勤王思想が藩中の子弟に浸み渡つて居つたが爲めであらう、河合が仁壽山黌に於ける學者の禮遇は至れり盡せりであつたと見え、彼の山陽の手簡の中にも平目の鱠、ゑびの炙、難忘候とあり、其御馳走の潤澤であつた事が分るのである、山陽遺稿中に竹樓記と云ふのがあるが、其發端に

竹樓記

姫路藩執政河合君、就其室東偏、起小樓、材用竹、曰竹樓、乙酉之秋、余蒙其延請、甞一登觀、蓋其屋既葺以竹、自椽榱欄楯、又無往非竹、明潔雅素、登者無不肅然也、聞君當國、以儉爲政、百弊盡革、居第弊、不敢修、而俟時來臨、莫以待焉、所以有此樓、而凡其竹材、取之園中所生、不足者補充、窓櫺之間、往々用敗弓故箭、曰、是亦竹也、其示儉朴、非好事、可以見大臣之用心矣。

とあれば、當時山陽と河合は互に相許して、肝膽照し合つた間柄であつた者と見える。

姫路藩老河合隼之介は非常な好事家であつたらしい、山陽は文人趣味ばかりで茶事を解せぬ人であつたから、其文中曾て此事に言ひ及ばなかつたが、酒井伯爵家の名器

は多くは此河合執政時代に買收せられた者である、尤も抱一上人の實兄で、姫路藩主と爲られた酒井宗雅公は、松平不昧公と無二の茶友であつて、酒井家の名器買入が公の好事より起つて居る事は勿論であるが、河合は藩政を改革して國を富ました後大に感ずる所あり、徒に大金を積んで置けば、後來馬鹿者が出て之を濫用する恐れがあるから、有り餘る金を以て何でも名器を買入れ置くが得策であると云ふ說を立て、今内務省である處に在つた酒井本邸の通用門内に高札を建て、名器とあらば世間相場の倍額にて買入るゝに就き、其心して持參せよと觸出したので、當時の道具商等は遠近相傳へて、爭ふて名器を酒井家に持込み、每日門前市を成すの有樣を呈したと云ふ事である、當時松平不昧公は多數の名器を買入れられたが、世間の評に、松平家は値段を云々すれども、酒井家は之を論ぜざるが爲め高價の名器はヨリ多く酒井の方に這入つたと云ふ事であつた、如何樣酒井家にては、明治四年大阪に於て多數の藏器を賣却せられたが、此程武井男の紹介を以て同家の藏器を拜見せしに茶入茶碗のみにても現在名物數十點に上る程であるから、其以前に於て寶庫が如何に豐富であつたかと云ふ事は容易に想像せらるゝので、河合が當時名器買收に着眼した其眼力の非凡なるに驚かざるを得ない、而して雲州藩に於ては之れと殆んど同時に、朝日丹波と云へる財政通の家老があつて、大に藩政を立て直し、姫路藩では河合が同樣の功を顯したのであるが、雲州では君公なる不昧公が道具買收に着眼して、家老の丹波は寧ろ之を喜ばなかつたのに引替へ、姫路藩に於ては君公の宗雅公も老職の河合も名器買收に就て全く同論であつたと云ふ事が頗る面白い對照である、兎に角振返つて觀れば、雲州家と云ひ酒井家と云ひ、共に名器買收を實行し、最も貴重なる多數の趣味的財產を今日まで傳へ得たので、是れは全く文化文政年中に夙に此點に着眼した君公若くは家老の賜と謂はざるを得まい、唯此一事だけでも余は河合が平凡の人でなく、山陽が其知己の恩に感じて大に敬服して居つたのも、決して偶然でないと思ふのである。

十一

中村歌右衛門丈が今度手に入れた山陽の尺牘は、三代目歌右衛門なる芝翫の名が書

入れてあるので、中村家に取つては最も珍重すべき者であるが、其文中に姫路藩老河合隼之介の事などがあつて、書中の人物が當時互に相關聯する事實を探究すれば、夫れから夫れと面白き話題が沸き出づるので、其記事が思はず餘り長くなつたから、先づ此邊で打切る事と仕やうが、抑も彼の三代目歌右衛門が、當時名優の評判高きに拘らず、四十にして舞臺を退き龍玉の名を以て脚本作者に隱れたと云ふのは果して如何なる事情であらう、彼は技藝夙成で、餘り早く大名を博したから、其名聲を惜んで逸早く勇退したのではあるまいか、凡そ藝人は所謂退時が大切であるが、其未だ衰へざるに身を引きて、盛時の盛名を全うするのは頗る六かし者である、古來有名なりし藝人中には、其名聲を墜さぬ範圍に於て早く勇退する者と、又其技藝の年と共に老衰するにも拘らず、舞臺に立つて生耻を曝す者と兩樣の行方があるが、是れには無論生活問題が關係するので、一概に其得失を斷言する事も出來ぬ、余は昨夏伊香保に於て歌右衛門丈と閑談せし序に、君は何時隱退する積りであるかと問ひたるに、左ればなり演藝上自身の思ふまゝなる注文を出して、座元が之を聽き容るゝ間は、自分に對する世間の人氣が未だ衰へざるの證據なれば、先づ其間は踏み止まり、座元が此注文に應ぜぬ樣子を見たらば早々隱退する考なりと言はれたが、徳川時代とは云ひながら、四十の男盛り藝盛りに勇退したる三代目歌右衛門の家系としては、五代目とても其進退に就き普通藝人と大に其趣を異にする所がなくてはなるまい、歌右衛門丈は今の俳優中最も能く文事を解し、發句を作り畫筆を揮ひ、名士と交はりて好んで其說を傾聽し、時に之を技藝の上に利用するの雅量がある、今度其家に無くて叶はぬ芝翫と云ふ名入の山陽尺牘を得たるが如きも、亦其平生の嗜好の賜で、目の寄る所に玉の寄ると云ふのは此等の謂であらう、余は偶々此珍卷を見たるのみならず、其鑑定の事に與り又之を買取る事を勸めた緣故があるから、同尺牘中に現はれた人物事實に就き、夫れより夫れへと想ひを走せて此一篇を綴つた次第である。

（大正十年一月二十日）

羸馬之圖

一

一月中旬の事であつた、或る新年宴會の席で加藤正義君と種々雜談の際、君は此程余が時事新報大正茶道記欄に掲げた芝翫と山陽中、山陽と姫路藩老河合隼之助に關する記事あるを見て、年來君が所持する河合舊藏、元人悉々女史の羸馬の圖を思ひ出したりとて其來歷を物語られたが、河合は未だ姫路藩老の職に就かざる前、京都に於て儒を以て世に立たんとした程の人であるから、勿論經史文學にも達し、山陽等を始め當時天下に有名なる儒雅風流の士人と交遊したのであるが、其中にも渡邊華山とは最も懇親であつたらしい、是は華山の仕へた田原藩主が、酒井家より養子に來られた人なので、華山は田原藩河合は姫路藩の家老として、其位置職掌上當然別懇の間柄と爲るべき緣故があつたのである、其處で世間に華山の描いた瘦馬の圖と云ふ者があるが、彼れは河合の舊藏元人悉々女史の羸馬の圖を摸寫した者であると言ひ傳へられて居るが、華山と河合が彼れが如く別懇であつた以上は、華山は無論悉々の羸馬を見る機會があつたらう、而して悉々の羸馬は精密なる着色畫で、如何にも衰弱しては居るが決して尋常の馬でない所謂千里の馬が時に逢はずして不遇の地に立ち適當の飼養を得ずして瘦衰へたと云ふ容體が畫面に活現して居るので、筆者が尋常平凡の人物でない事が分るのである、左れば河合も頗る之を愛玩した者と覺しく、羸馬行並に序と云ふ漢文の一篇を作つて之れに添へてあるが、蓋し彼は羸馬を以て自ら任じた者と見える、河合は播州姫路の東高砂の近傍に仁壽山黌と云へる學校を建て、酒井家の人才を養成する爲め、山陽に囑して敎鞭を執らしめた事もあつたさうだが、其羸馬行並に序の一篇を見れば、文學の造詣頗る深く山陽等と相伍して恥ぢざる程の學者であつた事が分るから、悉々女史の羸馬圖と併せて其中御覽に入るべしと約された、斯くて數日を隔てゝ加藤君より右羸馬の圖を屆けられたので其摸寫だと稱せらるゝ渡邊華山筆羸馬の圖を、三井銀行の神崎平二君より借り受けて兩々比較研究して見れば、各々特長があつて面白いものだから、茲に聊か余の所感を述べて同好者の參考に供へやうと思ふ。

二

元人悉々女史筆羸馬の圖は縱一尺四寸、横九寸五分の絹本の下の方に、瘦せ衰へた一

匹の馬が立つて居る、其前に青衣の馬丁が、右手に秣桶を提げて今や馬に秣を食ませやうとして居る處で、彼の趙子昻や趙仲穆等が好んで描いた馬と韃靼人の圖と略同樣で、唯彼は肥えた馬、此は瘦せた馬と云ふだけの相異である、時代の相似たる爲めか細線密畫の筆致が殆んど同手に出でたかと思はるゝやうに酷似して居る、如何樣加藤君の言はるゝ如く、馬は瘦せ衰へて首を垂れ脊骨が聳えて臀の肉が饒け、飢に羸れて今にも倒れんとする有樣であるが、其昔風雲に嘶き險路を物ともしなかつた氣魄が其相貌に現はれて、彼が若し人であつたならば、自ら顧みて今昔の感に堪へぬと云ふ趣がある、而して其上端に錢位坤と云ふ人の書いた左の如き讃がある。

杜工部詩曰、弟子韓幹能入室、亦能畫馬窮殊相、幹惟畫馬不畫骨、忍使驊騮氣凋喪、故九江義騟骨如堵墻、大宛名馬瘦若鋒稜、從來皮相非伯樂也、陳居中、趙榮祿、喜作雄偉巨麗之狀、而生氣具存、學者寢失其意、皆坊牢之養物、今皇帝之吉年、大家宰建德鄭公告辭、來之選君、誼難獨留、乞身歸里、行李蕭瑟、馬無豐秣、皮骨僅存、曰吾以此謝鄭公耳、予令姬人瑟々寫羸馬圖贈之、以比君子明澹泊也

吳門年盟弟錢位坤具草印

此讃に據つて觀れば、元人錢位坤の友人で來之選と云ふ人が、事を共にした鄭公と云へる人と共に朝を去り、行李蕭條として鄕里に歸らんとするのを、錢位坤が氣の毒に思つて、丹青に秀でた姬人瑟々をして來之選の境遇に似寄つた羸馬の圖を寫さしめて餞別と爲した者らしい、本來馬は順良なる動物で人間ならば君子とも謂ふべき者だが、今日で云へば一時若盛りに競馬のチャンピオンに爲つた名馬が、年老ては田舍の田子作殿に引廻さるゝやうな境遇に陷る者も少くないから、昔より老驥伏櫪だの、麒麟も老ては駑馬に如かずだのと云へる寓語があつて、世間には馬と境遇を同うする人物も少くない、有名な杜甫の曹將軍畫馬圖詩なども、馬を借り來つて人生の盛衰を詠じたもので、之を一讀すれば感慨淋漓たる者があるが、此羸馬の圖も之を贈つた人と贈られた人の境遇を考へ合すれば、風雅中一種言ふ可らざる感傷が含まれて居るやうである。

三

元人瑟々女史筆羸馬の圖には、姬路藩老河合鼎の羸馬行、並に序と云ふ漢文の原稿が添へられてあるが、是れは餘り長く且つ讀み難い文字であるから、今其序文だけを和譯して、彼の羸馬に對する感想が那邊にあつたかを示す事としやう。

鼎駑鈍の資を以て早く寵を先公に辱うし、叨りに祖考二百五十年の舊職を守り、今既に四十七年、馬齡亦六十有三、性尤も多病、其間疚痼を以て事を廢する者殆んど其半に過ぐ、居常兢々畏懼是れ懷ふ、此歲又病む、五月より今月に至り始めて良差ることを得たり然りと雖も、一日一日より、一年一年より衰老して、其職に勝へざる者亦昔日の比に非ざるなり、陸劍南の所謂譬へば東周の亡ぶるが如く誠に痛恨すべし、然り而して恩眷隆渥、惠養前日に倍す、卽ち其報效を圖る死して而して後に已むのみ、嗟々咄々衰態鬼の如く、叉髮目を突き、肉落ち骨出で趦趄蹣跚杖を須ひて而して僅に起ち、人に扶けられて而して漸く行く、神思恍惚、有に似たり無に似たり、其言を擧げて而して筆其字を得ず、其人に熟して而して名口に上らず、至近至隷の事にして而して呼んで出でず、腔殼の間猶ほ遠く千里を隔つ、聵々乎として之を思ふ三四、尙ほ得る能はず、而して居然復た之を不思の頃に得れども乃ち其事已に過ぎて而して及ぶなきなり、其迂騃遲駑此の如きに至る、豈に復た鞭すべけんや、然らば卽ち重任遠致、本より驕騫伏櫪の能く勝ふる所に非ざるなり、一朝蹉跌、其大事を覆へさば卽ち萬死其罪を償ふなきなり、何ぞ況んや飼ふに甘芻を以てし、飾るに瑤勒を以てし、而して之を魯莊の退廐に置くをや、此頃人あり瘦馬の圖一幀を示す、筆力精緻龍鍾眞に似たり、一見の間已に愀然として心傷むを覺ふ、其上に題する者吳門錢位坤たり、之を讀んで未だ其人と時とを審らかにせざるも、益々其事を感じ潸々として涕下るを禁ぜず、羸馬行一篇を賦す。

此序文に據つて觀れば、羸馬の圖は河合自身が所持せし者に非ざるやうなれども、是れは行文の都合にて人より示されたる者の如く書いたものであらう、而して河合が此羸馬に感じたのは、其身の不遇と云ふ點ではなく、病羸事に勝へざる點に於て嘆慨を發した者である、此文の末尾に文政己丑冬十月仁壽山樵河合鼎稿としてあるから、彼が之を作つたのは同十二年で、文中に在るが如く彼の年六十三の時である。

四

渡邊華山筆羸馬の圖は、河合舊藏元人瑟々女史の羸馬圖に據つた者だと云ふのは、現今同原圖所藏者たる加藤正義君の説である、幸ひ三井銀行の神崎平二君が華山筆の羸馬の圖を所持して居らるゝので、一日借り受けて原圖と比較した處が、馬の大きさは略同樣で姿勢も殆んど相類して居るが、馬だけを描いて馬丁を描かず、然も瑟々の如く彩色を用ひず筆力に任せて一氣呵成した粗畫であるが、流石は華山だけに徒に摸倣を事とせず己れの特長を發揮して頗る面白い處がある、而して其上の題詞は左の如くである。

寫此老驥、尙有壯心。譬之於人、不無日暮途窮之嘆、世間罷羸者、覩之踖々然、同一傷感乎壽一天涯一飄人、而猶有此嘆、況予羈官、常苦橛飾鞭策之威者哉、畫了不堪伏櫪長鳴也。

戊戌春月　　華山外史印

箱書は杉聽雨翁で、表に華山先生老馬圖逸品、裏に大正四年乙卯三月九日聽雨觀了題時年八十一と達筆を揮はれてある、而して右華山の題詞中に壽一天涯一飄人とあるのは何人の事であるか分らぬが、況んや予官に羈され、常に橛飾鞭策の威に苦む者をやとあるのを觀れば、華山が羸馬に感じたのは河合のとは少しく其趣を異にし、彼が田原藩臣として日常種々の羈束を受けるのを厭ふ處より老驥に同情した者と思はるゝのである、老馬に對する感想が人々の境遇に應じて斯く樣々に相違するのは寧ろ大に味はふべき處で、彼の瑟々の羸馬に讃した錢位坤は、其文中に杜甫の曹將軍畫馬圖詩を引用して居るが、杜甫には瘦馬行と云ふ七古があつて、是れは彼が肅宗皇帝に用ひられ掛つたのが、他の妨げに因つて遂に職を罷むるに至つた其趣を、棄てられた瘦馬に譬へた者で、其感傷の程度は彼の畫馬圖詩より一層深酷な者である、詩人や文人は心なき草木をも人格化して、之れに樣々の感想を寓するのであるから、況して氣息が通つて居つて一代の間に盛衰の變化多き馬に對して、無量の感慨を發するのは固より當然の事であらう、余は彼の芝翫と山陽に關する記事に依つて、加藤君より河合及び華山に關する逸事を聞く事を得たから、今其顚末を記して同好者に報じ、併せて加藤君の好意を謝するのである。

藪蛇庵紅艶

（大正十年二月二日）

一

東都名物男の隨一人益田英作氏は、持病の糖尿、腎臟に二回の腦溢血を加へて、二月二日悠然冥土に出立した、氏は故益田鳳翁の季子で、伯兄に孝男、仲兄に故克德號無爲庵を持ち、兄弟三人夫れ〴〵の特長を以て當代に榮達したが、中にも氏は飄逸なる天才肌で、社會各方面に數々の奇談逸事を殘された、氏は初め芝公園に住んで居たので音便を以て紅艶と號し、肥大圓滿の相貌が鎌倉の大佛に似たればとて自ら大佛と名乘つた事もある、目黑不動の傍に茅庵を結び、瀧の下水を庭前に引き込んで、之を靈水庵と稱し、其後同庵より程遠からぬ場所に新築して之を明日庵と名づけたが、此外小田原風祭の竹藪の中に小庵を營み、其開庵の際山縣老公が來臨して、戯れに是は藪蛇庵じやなと言はれたるを其儘藪蛇庵と號した茶席もある、而して氏は去る一月十三日嚴寒の候にも拘らず、糖尿、腎臟など數病俱有の身を以て、此藪蛇庵に茶會を催し、同村の大茶目仲間山下紺足袋君等を招待したが、越えて三日卽ち十六日築地別宅に於て發病し、此一會を名殘として遂に鬼籍に登られたのであるから、余は彼の數々の別號中より特に藪蛇庵紅艶と題して此名物男の一代中最も興味ある逸事を叙述し、其飄逸なる面目の一斑を傳へやうと思ふ。

紅艶は慶應元年生れで明治十一年十五歳の時見學の爲め先づ佛蘭西に赴き、次いで英國に渡り、最も長く米國に在留して英學を修めたので、其英語に熟するは勿論、英文の手紙を書かせては邦人中彼に及ぶ者なからうと言はれた程である、斯くて數年後歸朝して三井物產會社に入り、再び海外に出張して英米若しくは支那に轉勤したが、明治二十六年頃物產會社を辭し、此時より獨立生活と爲りて先づ暹羅に赴き、若くは巴里博覽會等に出張した事もあつたが、要するに飄逸の性質とて他の羈束を受けて規則正しく勤務する事を好まず、五斗米に腰を屈めざる腥陶淵明氣取りで、到る處に氣隨氣儘の生活を營むのが其習慣であつた、而して彼が平常嗜好する所は茶事、書畫、骨董、聲曲及び舞踊であつた、其中にも茶事は仲兄克德が最も堪能であつたので、見

様見眞似で早くも其趣向を呑み込み、彼が三十歳許りなる明治二十六年頃始めて日本橋區濱町に構へた小宅に於て、初陣茶會を催した其時は、洋行歸りのホヤ〳〵で、半分西洋趣味を加へ、來客を香水風呂に入れ、床に芭蕉の『無慘やな兜の下のきり〴〵す』と云へる句入り文を掛け、餘興に河東節の一曲を出したるなど、彼が後來一流を立てたる所謂趣向茶の處女的閃きを示して先輩の來客を眩殺したが、是れが彼れの茶道に於ける魔法の遣ひ始めであつた。

二

紅艷が明治二十六年頃濱町自宅に於て催した初陣の茶會より、本年一月小田原藪蛇庵に於て開いた最後の茶會まで、約三十年を通じて彼が開催した茶會の數は幾十回であるか算へ盡せぬ程であるが、一會毎に何か異樣な紅艷式の工夫を發揮せぬ事はなかつたのである、其中にも著しいのは暹羅より歸朝した時、彼は唐の三藏法師が印度に入つて、象の背に經文を載せて歸つたと云ふ故事に擬へ、根岸の無爲庵に茶客を招いで、床に清巖和尚筆地獄二大字幅を掛け、寄附に置いた火鉢の胴に自身を表した象が鼻先を立てゝ、彈き人形を彈き飛ばして居るポンチを畫いたが、其人形の顏を能く〳〵見れば伯兄、仲兄、加藤正義、若井兼三郎、山澄宗澄、伊丹元七など云ふ當時大天狗連の似顏であつたので、來客一同呆氣に取られて暹羅歸りの象の鼻息に辟易した事があつた、又小田原の藪蛇庵の初會には、林立する太き青竹を柱としてバラック式の茅庵を結び、蛇のノタクリたるが如き細流を鉢前に造り、風避けにとて立て廻したる六枚折屛風には、折に觸れて自身が描き溜めて置いた茶友の似顏ポンチを張り交ぜたが、其時の主客であつた山縣老公のポンチまで此中に張附けて、平氣で老公の一笑を買つたなどは到底他人の及ぶ所でない、或る時は目黑の明日庵開きに天平茶會と云ふを催し、寒中肥滿した大兵に寒冷紗の白衣を纏ひ、同人より土左衞門の幽靈と云ふ尊稱を奉られた事もあり、又或る時は自ら天下第一と許して居る伊賀花入の本尊を開帳して、御前立なる茶碗、茶入は言ふに及ばず、皿鉢德利の雜器まで悉皆伊賀燒揃ひの一會を催し、是れも大に同人を驚かして、イガにも結構なる茶會だと評された事もあつた、其茶事上の趣向に富み、時に洒落過ぎて茶番狂言に陷る弊もあつたが、

紅艶の茶會とさへ云へば何か一風變つた新趣向が出ると云ふ豫想で、何人も樂んで參會した程であつた。紅艶は斯く茶會の趣向が巧者であつたばかりでなく、平常非常な食道樂家で、魚河岸を始めとして有名なる平民的飲食店に出入し、繩暖簾の間に其巨軀を忍ばせて居るから、獻立でも風味でも自ら一流を出して毎度茶客を驚かせたが、或る時安價生活茶會を催して、金十錢以內の材料で茶客を饗應すると云ふので、如何に請求しても頑としてお汁のお替りを出さなかつたなどは、今猶ほ同人間に殘つて居る談柄である。

三

紅艶の茶事は飄逸なる天才の發露に任せて毎度人の意表に出でたが、多くは茶番的臭味を帶びて茶道のレール外に飛出し、唯此人にして始めて可なりと云ふべき者もあつたやうである。然るに彼が茶器及び美術品に對する鑑識に至りては頗る穩健精確で、玄人と雖も三舍を避くる程の場合が多かつた。是れは眞劍勝負で叩き上げた眼力の鋭かつたので、彼が近眼鏡を外して肉眼近くに器物を引寄せて、穴の明く程熟覽すれば所謂眼光紙背に透るの趣があつて、嘗て見損なつた事がないと云ふ事である。而して其鑑定は特に陶器が得意であつたが、蒔繪、佛像、佛畫、其他凡百茶器類に精通して、同人中では最も目筋の確かな者として許されて居つた。其上最も感心なのは安物を掘出さうなどゝ云ふ野心を抱かず、群る雜魚には目も掛けず鰐や鯨を追廻すと云ふ流儀で、名品ならば代價を論ぜず思ひ切つて購求したのは、彼が此方面に於て毎度勝利を占めた大原因である。明治二十六七年頃彼が道具の買始めに阿蘭陀立菊の小鉢を、當時破格の大金で購入したのが手柄の仕始めで、大に老功道具商の膽玉を挫ぎ、名品ならば價を論ぜずと云ふ金看板を道具社會に掲げたので、今日と違ひ名品の購買者が甚だ少かつた折柄、彼に名器を購入する好機會を與たのであるが、最初は資金の續かぬ所より伯兄鈍翁に取上られ、又は友人に浚はれた名品も少くないが、其都度彼は長い者に卷かれながら常に勝算を占めたのである。而して其精確な鑑定力を以て有り餘る名品を蒐めたのであるから、其當時に在つては破格の高價であつても、時過ぐるに隨つて此を引受けた者より御蔭で有り難かつたと云ふ感謝を受くる場

合が多かつた、現に明治三十六年頃、故井上世外侯所藏十一面觀世音幅を、當時破天荒の高價で買取るべく伯兄鈍翁を勸誘し、翁が躊躇するをも顧みず殆んど專斷的に讓り受けさせた其大膽に至りては伯兄も三舍を避けざるを得なかつた、其後奈良の興福寺に於て破損佛畫像賣却の議あるや、日露戰爭中であつたにも拘はらず、一手に之を買收し、其中に在つた多聞天の一體を本尊として多門店と云へる道具店を起し、爾後之を機關として買收した名器は幾何なるを知らず、又近年舊大名家の道具入札頻繁に行はるゝや、名器に對しては毎に大手筋と目され何時の間にか立派な玄人道具屋と爲り了せたのは、彼が美術鑑定眼の非常に發達し居つた一證であらう。

四

紅艶の茶器及び美術品鑑定に就ては、仲兄無爲庵に負ふ所が多大である、而して彼れは平常言ふに言はれぬ愛嬌を振り蒔いて、名器所藏者より名器を口說き取る事の秘術を得て居たから、仲兄所持の名品は少からず彼の藥籠中に取込んだやうである、抑も彼の鑑定力は頗る廣汎なる區域に涉つて、上は天平物より下は當代品に至るまで、美術的價値を認むる一隻眼を具へて居たから、其所藏品には新古異樣の種類が集まつて居たが、其中には觀音だの阿彌陀だのと云ふ古佛像の手足の斷片なども混つて居つた、彼の說に世界中に於て手足の最も自然に發達して居る者は日本人である、其日本人中でも子供の手足は生來何等の壓迫を受けて居らぬから、最も自然美に近い者である、乃ち古佛像の手足は之を摸本として造られたもので、土踏まずのない、ムックリとして柔かい子供の足に近い美形を保つて居るから、其斷片に依つて四肢顏面を想像すれば、佛像全體の美觀が自ら眼前に現はれて來る者で、眞に古佛像を愛翫する者は手足の斷片だけでも其美想を滿足する事が出來ると云つて居る、而して彼の寶藏には今日と雖も有名な伊賀の花入、中山肩衝茶入、玳玻盞天目、靑磁花入三室山硯箱等數〻の名器を所藏して居るが、彼が手を此方面に着けてより爾來三十年間に、其鑑識を經へ若くは一旦其所藏に歸して後、更に友人中に分配した名器は其幾何なるを知らぬ、兎に角彼は如何なる種類の品であつても、一旦之を手に入るれば種〻の趣向を設けて直に之を茶事に利用するを例とした稻葉子爵家の白菊の香を買入れた

時は、早速聞香茶會を開かれた、赤星家の天平尺度を買はれた時は、彩色撥鏤の象牙に十二支及び山水の圖があるので、之を床に吊して天平茶會の掛物に利用されたのである、又仙臺家の舊藏高尾の三味線と云ふ者を得た時は、之を種にして一場の茶劇を仕組み仙臺侯に扮した若手道具屋が、駕籠に乘つて其茶會に繰込んだなど云ふ茶番狂言も行はれたが、要するに工夫澤山で啻に名器を蓄ふるのみならず、之を茶事に利用して其品物に估券を附け、又名譽を博せしむる茶喜劇脚色家としては何人も及ぶ可らざる一種の天才を具へて居たのである。

五

紅艶は茶事に於て數々の逸事を持つて居るが、平生嗜好した音曲方面でも亦可なり多くの談柄を殘して居る、本來紅艶の血統には音曲家らしい者を見受けない、令兄孝男は甲高い美聲で能く謠曲を謠はるゝが、絃についた音曲には沒交渉である、紅艶は身體の肥大なる割合に聲は女性的で甲高い處があるが、何時までも子供らしく可愛らしい調子を脫する事を得なかつた、最初音曲を習ひ始めたのは三十歲前後であつたらう、河東節が皮切で無論當時の家元十一代目山彥秀次郎後秀翁と云つた師匠に就いたのである、此秀次郎と云ふのは生粹の江戶兒で一風變つた飾り氣のない老人であつたが、紅艶が習つた河東節數段の中に例の夜の編笠と云のがあり、白鷺は迎へに來たか只來たかと云ふ一節は紅艶が大得意であつたので、或る時白鷺會と云ふ一會を催し、列席の數人別々に皆白鷺を唄つて投票を以て其優劣を定むる事にしたが、會主が紅艶であるからお初穗として誰れも先づ一票を彼れに捧げたので、無論彼が第一等賞を得た處より、愈々自ら大得意を催し此邊の消息を解せぬ伯兄鈍翁等に向つて大氣焰を吐いて居つた處が、或る時鈍翁汽車中で秀翁に行き逢つたので、紅艶の河東節は大分旨いと自分で自慢して居るが實際どんなものであるかと秀翁に尋ねしに、例の秀翁の事であるからお世辭氣も何もなく、英作さんかいアノ人は調子外れでどうしても物に成りやせんと答へたので、其儘之を紅艶に傳ふるや紅艶呆るゝ事半時ばかり、始めて醉が醒めたる如く、此時より斷然河東節を罷めて、今度は長唄の門に入り、名譽回復とでも思つたか吉住小米に就いて大に勉強したのであるが例の工

夫澤山で有喜大盡の大石を成田屋張りで行くと云ふ調子であるから、到る處に喝采を博するので又々得意の鼻を蠢かして居たが、或る時小米方の稽古を終り、二階の梯子段で痺れを休めながら佇んで居ると、二階では小米が他の弟子の質問に答へて、紅艶さんは稽古を始めてからもう十年にもなりますが何時まで經つてもアノ通りで、先きの見込がありませんよと語つたのを聞き、紅艶思はず大聲を上げ、是れは怪しからぬと抗議を申込んだので、小米は喫驚仰天したが、此時限り長唄も亦廢業して、今度は大に河岸を替へて振事の方面に發展するに至つたのである。

六

紅艶は若い時から芝居氣澤山であつた、亞米利加より歸朝後今の大山公爵母堂がワッサー女學校出身で、大山捨松女史と云はれた頃シェークスピヤのヴェニスの商人を上場して、女史にポーシャの役を振り當て、自身はシャイロックを引受けて、ヘンリー、アーウキン張りで大見得を切つたのを手始めとして屢々劇的天才を發揮したが、音曲方面に大名を成す能はざるを悟つた時より、俄に芝居踊の方面に發展して、最初に試みたのは裝束着保名の振事であつたが、此時は巣鴨の癲狂院を訪ふて狂人の動作を取調べ、保名の心理狀態に立入つて其足取りと目の使ひ方に丹精を凝らした甲斐あつて、或る時山縣老公より踊の巧拙は分らぬが、目だけは氣違ひになつて居ると云ふ好評を賜はつたので、得意滿面で之を紅艶振事十八番の隨一に加へたさうだ、其後仙臺家の入札會に於て高尾の三味線を競落したので、直に之を振事に仕組んだが、最初金屏風の前に特別新調の紅葉に雪輪模樣の打掛を着た體量二十七貫目の高尾大夫が、彼の三味線を杖に突いて佇んで居たかと思ふと、ダークチェンヂで程なく此高尾が消え失せるや、河東節東山掛物揃ひ第七番の『思ひますほの絲薄、誰をさしてか招ぐらむ』の地方で、屏風の上より髪振亂した高尾の幽靈が現はれると云ふ仕組てある、然るに或る時友人の宅で之を演じ今や幽靈の段と爲りて後見が携へ來つた面箱を見れば、高尾の幽靈の面にはあらで大森彥七の鬼の面なるにぞ、扨はと心附たれども今更如何ともする能はず、紅艶は近眼だから多分氣附かぬだらうと、幽靈の代りに鬼の面を被せた處が、髪振亂してと頭に手を掛けた時、髪の毛がなくて鬼の角に觸つ

たので、紅艶戸惑ひして大狼狽を演ぜしに、見物人も堪り兼ねて一度にドッと噴き出したと云ふ奇談もあつた、斯くて次々に目先を替へて新案を仕組み、或る時は一人にて大森彦七、石川五右衛門、絹川與右衛門、勸進帳の辨慶など云ふ役々の早替りを演じ、又或る時は物語揃とて逆櫓の松右衛門、八島の忠信、太閤記の十次郎など云ふ、坐ながらにして演じ得る所作物語りを案出した事もあつたが、是れは晩年足の運びの自由を缺くやうに爲つてからであつた、已に舊臘も病軀を提げて自宅で蝙蝠安を演じた程であるから、其工夫に係る出物は幾何なるを知らず、肥滿の大兵を滿身白粉で塗り潰して半裸體のサロメを演じたり、蓄音機の地方を利用してヨロボヒながらトウダンスを踊つたり、最近に及んでは更に進んで能の型に據つて熊坂を舞はんと稽古最中他界したので、是れ丈けは冥途へお土産に持つて行く事になつた、兎に角彼が大兵肥滿で女形などを演ずる時の愛嬌は眞に天下一品で、如何なる素人演藝者でも紅艶が登場すれば、他の總ては彼に喰はれてみす〳〵影が薄くなり、彼れ獨り舞臺を脊負つて毎に座頭格を占めたのは、比較的氣焰の上らなかつた彼の音曲に比して、較べ物にならぬ程の大成功であつた。

七

紅艶が音曲振事の方面に殘した奇談は到底語り盡せぬ程澤山あるが、唯此方面ばかりではない、凡そ彼と交はつた者で何か二つ三つ彼に關する奇談の種を持たぬ者はあるまいと思ふ、仲兄克徳が根岸に住んで居つた頃、夏の日盛りに彼は兄貴の家と間違へて遽しく隣家に飛込み、固より遠慮すべき必要もなければ暑い〳〵と言ひながら、眞裸になつて座敷の眞ん中に大の字成に顚がつて居る處に當家の夫人が出で來りて吃驚仰天せしにも氣附かず、平氣で之れと應答し居る間に漸く家違ひの事を發見して、着物を抱へて這々の體で逃げ出したと云ふ奇談は、令甥太郎冠者が渡邊と題する喜劇に仕組んで帝劇に上演したこともあつた、紅艶は卽身喜劇に出來て居て何れの部分も滑稽の標的たらざるはなかつた、彼の容貌は自ら大佛と號した程あつて、鎌倉の大佛に近視眼の眼鏡を掛けさせれば其の儘紅艶と爲るのである、先づ其大兵肥滿が愛嬌であつて、一時小さい驢馬を飼つて騎り歩いた事があつたが、其脚が地を

距る事僅かに一寸と云ふのが何とも云へぬ奇觀であつた、次に極度の近視眼が又多く愛嬌の種を蒔いて居る、或る時箱根の温泉で先に浴して居つた未知の夫人の後姿を、心安き女性と見違へポンと其脊中を叩いて大に恐縮した事などもあつた、又晩年足元がヒヨロついて起居不自由なるが爲め、茶室に入つても足を前に投げ出すのが其風采に滑稽味を添へた、談話に江戸前の通人風を交へて、黄色い聲で時々『何うでゲス』を連發するのが又なく面白く思はれた、洒落が上手で、或る時茶客が濃茶々碗を見て萩燒か唐津燒かと論判して居るのを聞いて、『鷺を烏と爭ふのでゲスか』と洒落た事があつた、又折々警句を吐いて、長唄の囃子は古い妾の如く、有れば煩く無ければ淋しいものだと言つた事もあつた、何事に就ても兎に角珍しく變つた處があるから、西鶴だの三馬だのと云ふ戲作者が居たらば、必ず彼を一代男とか八笑人とか云ふ材料に使つたであらう、彼は斯く滑稽味を帶びて居るから、彼に對しては他も亦何か洒落たくなる者と見え、彼が臨終の當日大江天也卓和尙は紅艶に電話を掛けて、聞けば君は病氣ださうだが、自分も病氣で見舞ふ事が出來ぬから、何れ冥土でお目に掛らうと申込んださうだ、そして此電話が取次がれたのは紅艶が瞑目した刹那であつたさうだ。

八

紅艶は眞面目の方では能く英語を操り巧に英文を書き、日本手紙も達筆で、文章家と云ふではないが、其中に交ゆる奇語警句には人の及ばぬ所があつた、茶評劇評皆得意で、多くは滑稽味を帶びて居たが、能く急所を穿つて藝人の參考と爲る者があつた、攝津大椽越路太夫などに義太夫の上で訓告する所があつたのは頗る滑稽のやうであるが、滿更旦那評ばかりでもなかつたらしい、此程或る新聞に紅艶を評して無慾淡泊と書いた者があるが、淡泊はこれ有り無慾と云ふは彼を知らぬものである、紅艶は無慾どころか寧ろ握り家の方であつた、彼の拳固が今少し緩かつたならば、其一代は猶ほ一層華々しかつたらうとは最も能く彼を知る者の定評である、彼は徹底した主我主義であつた、此點に於ては近代思想に似寄つた處世觀を實行した人である、左れど彼は出す者を出さずに取る者を取らうと云ふ流儀ではない、世間には金も出さずに名譽や位置を得やうとする者があるが、紅艶は此點に於ては非常に淡泊で、好んで人

の上座に坐らうなど〻云ふ虚榮心は皆無であつた、詰りお布施を出さぬ代りに後生も願はぬと云ふのが紅艶式であつた、彼は自身が先祖で別に定まつた宗旨もなく、今度死去して築地本願寺境内に葬られ、圓融院釋靈水居士と云ふ法名を附けられたが、靈水とは彼が目黒の茶室靈水庵より出た名稱で、無論此方より望んだものであらうが、圓融とは本願寺の和尚が勝手に附けた法名である、而して最も能く故人の性格を表明した文字である、或る人が彼のステ、コ踊りを以て有名なりし故三遊亭圓遊と其院號が似て居るとて、

ステ、コを地獄で踊れ圓融院

と口吟んださうだが、彼の踊り舞臺は極樂ではなくて何の道地獄の方に掛けらる〻であらう、又或る人が彼の訃を聞いて

大道具閻魔の廳に落札し

と穿つたが、紅艶が冥土で之を聞いたなら『敵ながら天晴でグス』と首肯かる〻であらう、朝吹柴庵翁と云ふ大名物を失つて、程なく又此大道具があの世に落札しては、今後社會各方面で大に寂寞を感ずる事であらう、兎角此種の人には花は咲いても實を結ばぬ者があるが、紅艶は生前有らん限りの氣隨氣儘を續けて、然も人知れず大資産家と成り、自ら死期を知つて一男三女に對する遺産分配等殘る方なく、我死なば棺前に於て長唄の時雨西行を唄はせよと遺言したと云ふが如き、雅俗兩諦を兼ねて主我主義を徹底した完全の往生と云はねばなるまい、史記に滑稽傳及び貨殖傳と云ふのがあるが、今日若し大史公が居たならば彼を何傳中に收むるか、是れには頗る當惑する事であらう、紅艶一代の奇行逸事は到底斯かる短篇に盡し得らる〻者でないから、余は取敢ず胸に浮かんだ丈けの記憶を略叙して此邊で擱筆する事としやう。

青山莊夜話

（大正十年二月二十一日）

一

近年茶道の古老相繼て凋落を告げ、新進の後繼者未だ起らず、時としては二三ケ月間都下に茶會の沙汰を聞かない事があるのは誠に心細い次第で、現今茶道の不況は財

界の不況よりも猶一層甚しと言ても宜からう、現に改暦以來今日まで五旬に亙つて、東都中に一回の茶會もないと云ふのは、霜枯れ時とは言ひながら如何にも寂寞の感に堪へなかつた處が新進茶人の一人根津青山君は何か感ずる所ありし者の如く、餘り六かしい茶湯を仕やうと思ふから兎角物が億劫になる、有り觸れた茶器を用ひて親友閑談の樂しみを共にするのは何の造作もない事である、僕が試みに其先例を作つて見せやうと、如何にも老熟なる宗匠振を發揮して、二月二十一日午後六時より青山の青山莊に夜話會を開かれたのは、眞に空谷の跫音と謂ふべきである、當夜の相客は茶友として藤原銀次郎君、宗匠として藤谷宗仁老、茶器商として山澄宗澄、川部利吉の顔觸れで、久方振りで金澤より上京した越澤宗見が飯頭幷に代點の役目を承り、例の元氣よき態度で大いに座間を周旋して居つた、寄付は中の客間の次の間六疊で、元信筆山水中猿廻圖屏風半双を立廻し、紫色丸紋の毛氈二枚を敷き、時代木地大火鉢の傍に黑塗平煙草盆を置いて、染附一閑人の綺麗な火入を備へ、白湯は汲出しで至つて簡單な飾付であつたが、元信の屏風は無類の傑作で、紙中も綺麗に人物も大きく、箱書が佐久間將監だと云から、蓋し寸松庵傳來品であらう、猿廻しが猿を曳いて出て來たのを、多數の老若男女が各人各樣の態度で物珍らしく見物し居る圖で、茶席に何か名品が出て來ると座客一同目を欹てゝ之を見る其有樣に髣髴たる所がある、主人は何の氣なしに此屏風を立て置れたのであらうが、思ひ做し次第で頗る面白い圖柄とも見らるゝのである、斯くて程なく主人自ら出迎はれたから又しても余が正客を承り、廊下傳ひに原叟好み三疊半床附の席に罷り通つたが、此席は元と原叟が好んだのを、後年如心齋が改作して床に大柱を用ひたもので、主人は奈良の興福寺とかに在つたと云ふ徑一尺二寸許りなる、佛殿の古材を此柱に利用せられたから、利休の好みで宇治橋の古杭を柱とした彼の獨樂庵と同樣、非常に風變りの構造である、床前に細い長板があり、爐を大柱の傍に切つて、床脇に稍幅廣い隅板を入れ、其板の上に短檠を置かれた風情初春夜會の氣分が席上に漲つて如何にも奥床しく思はれた。

二

青山莊茶席の床には大徳寺の春屋即ち圓鑑國師の七字一行が掛けられた而して其

文句は

　機輪轉處實能幽

と云ふのであつて、是れは禪語に心隨萬境轉轉處實能幽とある其下句の頭に機輪の二字を附加へた者である、普通の茶席には掛らぬ程の長上幅であるが、此席は主人の好みで特に床の天井を高くしてあるから、此幅が緩々と掛けられて、一段見榮あるやうに思はれた、是れは元と片桐石州所持で、表具も箱書も石州の手に成つた者だが、中萌黄地雲形緞子、一風紫印金で如何にも茶味ある表裝である、春屋の墨跡は可なり多いが其多くは小字で極めて枯淡な書風である、彼は遠州や江月の宗師であつて、國師號を賜はつた程の有德の高僧であつたから、遠州の信仰殊に深く、其墨跡が當時大に流行して、諸家の茶席に掛けられたのは遠州の宣傳が與つて力あつたらうと思はるゝ、近衞豫樂院公が或る人に向つて、遠州は非常に春屋好きであつたが、金森宗和は其反對で誰某の茶會は頗る上出來なれど、床に例の坊主奴(春屋を指す)が睨んで居るのが甚だ不快であつたと言はれたさうだと語られた事が、彼の槐記に載せられてある、併し今夜の春屋は春屋中の春屋で、文字も大きく筆力も勝れて、是れならば宗和も決して不快を感ぜぬだらうと思はれた、扨て主人立出でゝ近來打絕えて手前を稽古せず、今度は突然の催しで之を練習するの餘暇がなかつたから、越澤宗見を全權代理とする事の許可を得たしと云ふ挨拶があつて、宗見は直に炭手前に取掛られたが、其器物は左の通りであつた。

　釜　蘆屋尻張梅地紋　　炭斗　時代竹組貝籠　　香合　交趾狸

　羽箒　鴻　　灰器　信樂香形

釜も炭斗も結構であつたが、別て交趾形物狸の香合は無疵で出來も一段優れ、顏は白土、身蓋共紫、及び萌黄釉で、背ろに黄色の長い尻尾が垂れて居る、此程原首相は或る席上で狸の綱渡りの圖で尻尾が比較的長いのを見て、這麽に尻尾を長くすると直ぐ捉まつて仕舞ふぞと笑つて政客に注意されたさうだが、此交趾狸は形物中の尤物で、其尻尾の長い程愈々人を魅する力が多く、處も青山で然も月夜の茶會と來ては獨りで此茶席を背負つて立つたのも決して不當でなからうと思はれた。

三

炭手前終るや給仕は一切主人直營で左の懐石を出された。

汁　獨活、三州味噌、落し辛子　向附　古九谷皿、たひら貝、山葵甘酢　椀　鴨、蕪、若芽、山椒
燒物　三島鉢、鱒照燒　吸物　土筆、針生薑　八寸　百合、鯉
香物　唐津小鉢、細根　酒器　唐津德利、樂燒銘々盃

青山莊主も今や次第に茶臘を閱して茶器の選擇に功者を加へ、雜兵中にも猶ほ一癖變つた面魂ある者を見受くるに至つたが、今晩出された唐津德利などは頃合が無類で胴に二ヶ所程括れた處があつて鼠色の無地ではあるが餘り形が好いので、是れが粉引であつたら天下第一であらうと法外の希望を洩らす者さへあつた、斯くて懷石終るや生蕷及び蕎麥饅頭が出て、中立は元の寄附であつたが、頓て主人の案内に連れて再び入席して床中を見れば、遠州作一重切花入に、白玉椿が生けられてあつた竹は肉厚の大筒で、後其箱書を拜見すれば、宗慶筆と覺しくて、一重切花入宗甫あしのやと書附けてあつた、是れより越澤宗見主人代理として例のキビ〳〵とした手前で濃茶を點てられたが、其器物は左の如くであつた。

茶入　利休不聞猿　茶碗　粉引　茶杓　石州共筒
蓋置　不昧公竹引切　水指　備前臼形銘山姥　建水　溜塗曲碌々齋書付

利休不聞猿茶入は、宗伯不聞猿茶入と殆んど同形同大であつて、口は抱へ、胴上が瓢簞の如く括れ、此括れた處に細き耳が兩方より附いて居つて、胴が張り底は圓座形で、背の高い者であるが、利休の注文であつたかどうだか、兎に角利休窯でも宗伯窯でも同形の茶入が作られて居るが、今晩使用されたのは黑飴釉の中に黃釉が混つて居つて、光澤が物を鑑すべく美事で、作行の極めて面白い者である、又粉引茶碗は大形で端反りで、内外共に薄紫に鼠色の浸み模樣が十分に現はれて、淺い轆轤が能く利いて、形は大きいが其大きいのが邪魔にならぬのは全く名作なる爲めであらう、石州茶杓は切口が少しく斜角になつて居つて、此人の作としては聊か異樣で、一見庸軒作と思はるる者だが、共筒で銘はなく唯宗關作と書附けてあつた。

四

青山莊夜話の濃茶器具は大略前記の如くであるが、其外水指は備前臼形で、底に一燈

宗室が朱漆で直書附した山姥と云へる銘の剝げたのを、認得齋が後年補つた者で、同人筆で箱に其事由が記されてあるが、古備前で雅味ある形で殊に其耳が面白く出來て居る、又蓋置は不昧公共蓋で、岩屋寺の竹を以て造之と書附けあり、竹の片隅に朱漆で一々と云ふ書判を認めてあつた、斯くて濃茶終るや同席で薄茶の饗應あり、水指は細藥罐と替り、茶杓は象牙、茶入は赤繪手桶形で、砂張の菓子盆に紅白薄氷を盛り、茶碗は旦入作黑地に白富士で吸江齋書附銘を富士と云ひ、之に配した赤樂茶碗は啐啄齋手捏銘竹垣と云ふのであつた。

扨て當夜の相客は何れも熟懇の者ばかりで、主人も薄茶の節より同席に入り來り、主客混同、勝手次第の批評を直言して、何等の隔意もなく夜話に耽つたのであるが、一同の感想に東都茶壇も次第に古老が凋落した中にも三井松籟、朝吹柴庵、最近には益田紅艷などが續々お先へ失敬せらるゝ一方に、其相續者と云ふべき者を見れば、僅に某某數人を算ふるのみで、新に大茶星の出現しさうな空模樣もないのは甚だ心細い次第である、從來の例に據るに未だ茶道に入らざる者は、斯道平々坦々として所謂尋常茶飯なる事を知らず、何だか窮屈な者と思ひ做さるゝのが、入門者の少い所以であるから、兎に角今夜の夜會の如き極めて無造作なる、又極めて解放的なる茶會を催して、多少茶脈ある紳士を招ぎ、之れに實地見學の機會を與ふるのが同好者を增加する捷徑であらうと云ふ主人の發案には、相客一同大贊成で、請ふ隗より始めよの意氣でお互に簡易茶會を開き、有緣の青同心を濟度する機會を作らうではないかと申合せた次第である、此節の如く世間で危險思想の流行を恐るゝ場合には、茶道宣傳は其最も穩健有効なる對抗策であらう、德川初代に幕府が戰國策士の謀叛心を緩和する爲め、頻に茶道を奬勵した先例を此際踏襲する必要がありはせぬかと、聊か我田引水的の所論もあつた、斯くて夜話の清興盡る時なきにぞ、斯くては果てじと厚く主人の好意を謝し、一同青山莊を辭して十四夜の月光が林間の殘雪に映ずる光景を眺めつゝ、家路を指して歸つたのは午後十一時頃であつた。

（大正十年二月二十八日）

湘南空心庵

近頃野崎幻庵は、小田原十字町に菟裘を營んで之を自怡莊と名づけ、莊中に竹を植ゑて其中に空心庵と云へる茶席を建てられたが、今年一月初旬取敢ず提灯村として知られた此小田原在住の益田鈍翁同紅艶扱ては山下紺足袋君等を招いで新庵開きの茶會を催されたさうである。然るに此時出席した紅艶は、之を彼が茶席入の最後として其後未だ三旬を出でざるに、紅爐上一點雪と消え失せたので、幻庵は切に人生の無常を觀ぜし者の如く、二月二十八日正午故人の令兄鈍翁及び余等を空心庵に請じて紅艶追善茶會の先鞭を着けられた。是に於て余は同日午前九時五十分新橋發の汽車で小田原に赴き、出迎への自動車に打乘りて十字町の自怡莊に着到すれば、町に面して瀟洒たる正門があつて、其左側に當れる竹林の中にある一構は、半分を寄附半分を茶室に區劃してあつたから、先づ其寄附に立入れば、皮附の雜木を以て無造作に造つた腰掛乃至半疊ばかりの疊敷があつて、土間を廣く取り、箱根水戸野の河岸より拾い來つた天然石を抉り拔きて石爐と爲し、之に時代鐵瓶を掛けた處は如何にも當意卽妙であつた。棚には料紙の上に扇形矢立、茶盆には唐津偏僂香煎入、煙草盆には繪志野火入を置きて鈍阿燒鮟鱇火鉢を蒲團の上に鎭座せしめたなど、庵主が物に應じ境に隨つて活現した意匠の數々は、到底筆舌を以て形容し盡すことが不可能である。更に此一構を環れる竹林を見廻せば、徑三寸もあるべき大竹と、母指大の小竹と參差錯綜して趣を成して居るが、是れが在來の竹林でなく、他より移し來つて新に出來た者だと云ふに至りては何人も信ずることが出來ないであらう。當日は遠來の賓を以て余が正客に推されたが、相客は鈍翁の外に室田蠻翁、山澄宗澄、益田信世母堂が加はつて總勢五客で、寄附を出で庭を仕切つた柴折戸を開けば、庵室前の竹林の中より一株の梅が今を盛りと咲き出たる其下に、苔蒸した蹲踞石があつて、其向ふに織部形の時代石燈籠が立つて居たが、青竹の筧より流れ落つる清水は鉢前を繞つて、眞に疎影横斜水清淺の趣があるのみならず、此篁の中にて余等を歡迎するが如く藪鶯が法法華經の聲を洩すは何等の好風情ぞや、殊に當日は曇天で折々豆を蒔くやうに小粒の雨が降つては又歇み、此竹林茶會には如何にも相應しき日和であつたから、桃青

翁の『竹植る日は降らずとも蓑と笠』と云へる名句も思ひ出でられて、未だ室内に入らざるに茶味は津々として湧き出でたのである。

二

自怡荘の茶室を空心庵と云ふのは、竹林中に在るから虚心勁節など云ふ竹の縁語を取つた者であらう、扨て此庵の入口は織部口二枚引障子であるのに、沓脱石を引き違ひの眞中に置いたのは何故なるを知らぬ、席は長四疊で普通の寸法よりも片隅に寄つた處に臺目柱があつて、太鼓張の二枚引で給仕口と茶道口を分たれたが、床には松花堂が僧正遍照の圖の上に其歌なる

末の露もとの雫や世の中の
おくれさきたつためしなるらむ

の一首を書いた一軸を掛けられたが、着色畫で光起でも描いたやうに、筆致精密で表具も頗る結構であつた、而して其下に唐物朱塗蓮實形木魚を、同作の尺二寸許りの木魚掛に掛けて飾られたのは、一見追善茶會の床飾と首肯かれた、斯くて庵主出で、余等遠來の勞を犒ひたる後、直に炭手前に取掛られたが、其器物は左の通りであつた。

釜　與次郎共蓋、遠山鐶附　　香合　伊賀伽藍　　炭斗　竹組丸形
羽箒　野雁　　灰器　南蠻平　　灰匕　桑柄

以上器具の中、伊賀伽藍は稍小振で、合口も好くビードロ釉も見えて如何にも殊勝であつたが、是れは啻に追善用に適當なるばかりでなく、禪房めいた竹林中の當茶席に最も相應しく思はれた、炭手前終るや庵主出で、左の懐石を出された。

汁　三州味噌、苞豆腐、銀杏二粒　　向附　織部馬上盃形、鱠、赤貝、防風、芽獨活、木耳、針生薑、白和へ　　椀　湯葉、白魚しんじよ、栗
燒物　八寸と併せて蒔繪重箱に入る、筍、生椎茸　　吸物　土筆、雲丹　　八寸　長芋、からすみ、莢豌豆
香物　細根、味噌漬茄子　　酒器　雪月花模樣鐵銚子、朱塗引盃　　菓子　手製草餅

懐石器具は至つて手輕で、取立てゝ言ふべき程の者もないが、織部馬上盃向附は佛器めきて面白く、鐵銚子には雪と云ふ字と櫻の花模樣と銀象眼の月とを細工してあつたが、玄賞齋法印と云ふ銘があるから無論此人の意匠に成つた者であらう、懐石終つて元の寄附に中立すれば、程なく銅鑼七點の合圖があつたが、搖曳長く筧の響と相和

して露地に一段の風情を添へた。

三

空心庵後席の床には、尹部の船形釣花入に白木瓜と赤山椿一輪を活けられたが、庵主は釣花入が大好きと見えて、東京自邸葉雨庵開きの節も古銅釣花入を用ひられたやうであつた。斯くて濃茶手前に取掛り左の器物を使はれた。

茶入	金華山瀧浪手銘斑衾　袋素襖地廣東	茶杓	利休共筒銘面影
茶碗	裏千家六閑齋宗安手捏赤茶碗		
水指	宗旦書附寠れ藥罐銘昔	建水	木地曲
蓋置	青竹		
茶	好の白		

茶入は松花堂箱書と云ふ事で、嘗て葉雨庵でお目に掛つた者だか、小柄で景色多く、其斑衾と云ふ銘が好く今日の追善に適つたやうである。利休茶杓は共筒で、ヲモ影と書いた文字が如何にも利休らしく思はれた。六閑齋手捏茶碗は彼の加賀光悦を狙つた者らしく、今日の茶會には何か面白い茶碗が出ると洩れ聞いて居たので、テッキリ庵主が光悦茶碗を掘出したナと云ふ考へが先入して、口作やら胴體の竪篦、扱ては高臺廻りの切篦など全く光悦作と思はれた。因つて猶更に之を熟視するに赤茶碗の内外に青き丹礬釉の吹出でたる工合高臺廻りにビードロ藥溜が一點玉の如く垂れ掛りたる景色など頗る面白い出來であるが、唯高臺作が光悦を裏切るやうに見受けられたので、後其箱書附を拜見すれば果して六閑齋造であつた、夫れに附けても光悦の鑑定は極めて六かしい者で、昔より人を見たらば泥棒と思へと云ふ事があるが、光悦を見たらば先づ贋物と思ひて能く〳〵研究すべき者だと心附いたのである。此外濃茶器具中庵主が最も大得意で、客も亦感歎を禁じ得なかつた者は宗旦所持藥罐水指である、此水指は古藥罐の取手を取り去り、鐵槌などを以て目茶々々に之を叩き潰したる者と覺しく、其口は斜に歪み、胴體はデコボコに爲つて居る、當日は之に附屬して居る黑塗蓋を東京に置き忘れたさうで、新調の木地蓋を用ひられたが、底には宗旦の朱書で昔と云ふ字の下に、咄齋の名書と例の書判とがあつた、蓋し侘好きの宗旦が一流の意匠を以て廢物利用に意外の成功を收めた者でがな御座らう。

四

空心庵の益田紅艶追善茶會は濃茶を以て一段落を告げた、庵主も去る者客が薄茶を好まぬのを知つて、形式を離れて小間の茶事を打切り、自身先だちて庵室前より竹藪を穿ち、廣き母屋の庭前に出で、天然に見ゆる草川の流れを横り、母屋の一端に突出したる八疊敷の間に案内されたが、此廣間の正面には、鶴が其胸を張りて立てるが如き老松一株、小高き崖より流れに臨みて一庭の主人公然たる光景を呈して居る、此老松の奥の方には懸崖よりチヨロチヨロ瀧が落ち掛つて、其下流は庭前を迂回して末は竹林の中に走り去り、庵主が其天然派の築庭術を發揮するに、慘憺たる苦心を費した効果が遺憾なく此間に著はれて居る、扨て廣間に入つて其床を見れば、清巖和尚が墨黒々と梅の大木を描いて、傍に

不及天上　枝々花開　第一春風　自筆下來

と云ふ讃を書附けた横物を掛けられたが、書畫共に無類の上出來であつた、此一軸の下には方形平卓を置て織部八角形の香爐を載せ、銘竹馬と云へる香を薫ぜられた爐には遠州好らしき大西五郎左衞門鶴頭鐶附の釜を掛けられたが、薄茶を出さず惣菓子を番茶で味はせたので、客は庭前の景色を眺めつゝ一同打寛いで故人の追懷談に耽つたのである。

斯くて明日は當地益田鈍翁の別業掃雲臺閑雲庵に、今日と同樣紅艶追善の朝茶會が開かるゝ筈であるから、余等は當夜御輿を當自怡荘に卸して、庭前を流るゝ遣水の響を聞きつゝ物靜かなる一夜を過したが、老の寢覺めに空心庵茶會中に見聞した事共を思ひ浮べて、左の腰折を物したから掲げて此記事の遺漏を補ふ事としやう。

小田原なる野崎幻庵の空心庵にて、故益田紅艶の追善茶會ありける折よめる。

なき人をしのぶまとゐの窓ちかく
　　經よみがほの鶯の聲

自怡荘空心庵にてよめる。

たのしみぞ中にこもらむ竹のごと
　　心むなしく世を送る身は

梅の影さやかに見えてやり水の
　音も春めく竹の下庵

おなじ折紅艶の令兄鈍翁のなげきを思ひやりてよめる。

はらからといふばかりかは月花の
　友とも君がたのみたりしを
ともに見し昔しのびて此春は
　花のむしろや露けかるらむ

紅艶追福會

（大正十年三月一日）

一

益田紅艶物故してより未だ三旬を出でざるに、二月二十八日其追善茶會の烽火は、先づ故人の庵室藪蛇庵に程近き小田原の空心庵に打揚げられた、而して其翌朝は故人の令兄鈍翁が同地掃雲臺の閑雲亭に於て其第二回目を續發した、此勢ひで推して行けば今年の茶會は大方紅艶の追善で持切る事であらうが、兎に角昨日空心庵の茶會に出席して間もなく、今朝又閑雲亭の客と爲つたのは故人の賜に外ならぬから、謹んで先づ故人に御禮を申さねばなるまい。

三月一日午前八時、昨日より色々造作に預かつた野崎幻庵の自怡莊を莊主と共に立出て、板橋村の掃雲臺に赴けば、母屋の八疊寄附には一方に六枚折屏風を立廻し、床には掛物を掛けず時代根來塗の高卓に、雲鶴姥口の小形香爐を置いて、紅艶が生前最も嗜好した名香白菊を薫じ、席上には毛氈を敷いて時代桐大木魚形の火鉢の傍に、鈍阿燒繪志野寫の火入を備へた煙草盆を出し、白湯は汲出しで、唯床の姥口香爐に今日の茶會の趣意を語らする趣向であつた、相客は幻庵夫婦の外、昨日空心庵で同席した室田蠻翁、山澄宗澄等であつたが、今日も亦余が正客を失敬して湘南山海の風景を一眸中に收る掃雲臺の庭前を横切り、母屋の背面の懸崖より琴々として流れ落つる瀧の下流を打渡り、雜木林中の閑雲亭へと繰込めば、其入口に往時洛南八幡の瀧本坊に在つた松花堂自筆の閑雲亭と題する匾額の掛かつた木地に透彫ある露地門が立つ

て居て、其中に入れば木蔭暗く青苔蒸して些やかなる一構の庵室があつた、此庵室の一方には杉皮葺の腰掛が附屬し、一方の躙口に向つた處に丈高き蹲踞石があつて青竹の筧より山水が滾々と落ちて溢るゝ光景は朝茶會に於て一段の妙趣を感じたのである、扨て一同入席すれば當席は三疊臺目向切で、彼の燕庵と同樣二枚引きの襖の後に更に一疊の餘地を留めて居るので、當日は總勢六客であつたが席中緩々として更に窮屈を感じなかつた、先づ床の前に進んで一軸を拜見すれば、是れは松平不昧公の筆で、細い竪幅の眞中に墨黑々と一點を打つて、傍に是什麼獨立庵主不昧宗納行年六十七歳書之印とあつた程なく庵主出でゝ挨拶の後直ちに炭手前に取掛られたが、其器物は左の如し。

釜	飯田助左衞門作 共蓋、遠山鐶附	香合	宋胡錄撮み蓋	炭斗	暹羅青貝内朱蓋物
羽箒	青鸞	灰匙	古銅飯匙	灰器	南蠻内澁
火箸	桑柄				

二

閑雲亭の遠山鐶附釜は遠州が其釜師飯田助左衞門に命じて作らせた者で、其鐶附が普通の遠山よりも一段薄作なる處に遠州の意匠が現はれて居る、炭斗青貝内朱蓋物は、紅艶が暹羅より請來した者で本來何に生れた者やら分らぬが、底の方まで暹羅模樣の青貝細工が施されて頗る精巧なる者である、又宋胡錄香合は今日の茶會に無くて叶はぬ一品である、古來茶人仲間では此種の陶器を宋胡錄と稱しながら其由來を知る者がなかつた、宋胡錄には德利、香合が多いやうだが、中には德利を半分に切つて、火入、香爐若くは小鉢に利用した者もある、青鼠色釉の縞筋と、澁色釉で無造作な模樣を描いた作行が、如何にも茶味に富んで居るので、古來寂茶用の珍器に算へられて居るが、扨て此陶器が何處で出來たかと云ふ事に就ては從來一定の說がなかつた處に、紅艶の暹羅に赴くや同國のスンコラウと云へる場所が古代より製陶を以て有名であつた事を聞き込み、實地研究の上、今日日本で宋胡錄と稱するは、スンコラウと云ふ地名の轉訛で暹羅產の陶器である事を發見した、紅艶の暹羅入りは故稻垣萬次郎氏が同國公使たりし頃であつたが、其後公使が歸朝の節スンコラウより掘出した古陶

磁器だと云つて持歸つた者を見れば、其過半は青磁であつた、或る學者の説を聞くに唐時代に暹羅國王が青磁の製法を傳ふるが爲め、唐より青磁窯工を招聘した事が歴史に殘つて居るさうで、スンコラウより青磁の破片が掘出さるゝものを見れば、當時此地で青磁をも製作した者であらう、兎に角宋胡錄製造地發見者たる紅艶の追善會に、宋胡錄香合を出されたのは故人に對する何よりの追善であらうと思はれた、斯くて食物博士たる庵主は時刻遲れて一同空腹であらうとて、イソ〳〵と例の禪坊主の應量器に附屬する俎膳で左の懷石を運れた。

汁　三州味噌、土筆、栄　　向附　染付蓮形皿、蒲公英、スイカンポ、若芽茎、アサリ貝、胡麻和へ　　椀　自製笹の雪豆腐、薄葛、生薑

燒物　織部燒角鉢、松露、椎茸味噌煮、青竹串に差して　　八寸　南蠻片口、燻し鰊、百合　　香物　八寸と同器、胡瓜、茄子、昆布漬

酒器　染附瓢形水瓶　　菓子　草餅

三

閑雲亭の懷石器具は何れも寂道具で、染附瓢形德利は元水滴に生れた者であらうが、小振で藍模樣がスッキリとして最も優れた出來であつた、珍らしく締つた南蠻片口を八寸と香物と二度に使ひ分けたのは、今日の如き茶會に於て器具適用の手本を示した庵主の老巧と云ふべきであらう、懷石は無論精進料理を旨とした者だが、其配合の妙は流石に食物博士の名に背かなかつた、頓て懷石終るや目と鼻の間なる腰掛に中立して、喚鐘七點の合圖を聞き、再び入席して床中を見れば、中程の節の邊で前の方に膨らみ、浸模樣が雲の如く現はれた尺八竹花入に白椿一輪を活けて、根〆に蕗の薹をあしらつた風情が又なく好かつた、聞けば此尺八は紅艶が嘗て自ら藪蛇庵の竹を切つて作られた者で、藪蛇位では手ぬるひとて筒の背面に墨黒々と青大將と云ふ銘を書き附け、其下に書判を認めた者であるさうだ、兎に角竹の選定が無類で銘柄も此人ならでは選み得ぬものであるから、彼の仲兄無爲庵克德の手捏翁さび茶碗と共に双絶として後代に傳ふべき者であらう、斯くて庵主出でゝ濃茶を二個の茶碗に三人づゝ別々に點て分けられたが、其器物は次の如くであつた。

茶入　利休所持、蓋裏宗旦書判　挽家形棗、袋定家緞子　　茶杓　澤庵和尚作　共筒銘釋迦　　茶碗　井戸脇及雲鶴　筒銘女郎花

水指　伊賀　　建水　木地曲　　蓋置　金森宗和作竹輪

茶　　好の白

以上器物中茶入は唐物で、椎の實の如き形を成し、中次になつて居て内朱で至つて締つた者で、裏に宗旦筆で利休咄齋旦印の朱書があつた、茶碗は最初の三人に井戸脇を使はれたが、此茶碗は箱に小堀家三代宗實政恒の筆で高麗千丸茶碗と書附けられ高臺が大きく其作行の下手な處が却つて大に嬉しいのである、今一つの雲鶴筒、茶碗は小振で總體玉蜀黍色で、口縁と腰廻りに横に二本の筋があつて、菊花の模様が竪縞の如く三方に白く現はれて居るばかりで、景色が至つて少いだけ夫れだけ上品で、高臺廻りに少しく火間があるのが愛嬌である、要するに薄手で綺麗で女性的の茶碗であるから、女郎花の銘は寸分動かぬ處であらう、此の茶碗の箱書は小堀權十郎蓬雪で表に女郎花筒、茶碗とあり、裏に

　女郎花うしろめたくも見ゆるかな
　　　あれたる宿にひとりたてれば

と云ふ古歌を認めてあつて、外箱には後の權十郎宗中の證明もあれば、自ら名物茶碗の資格を具へて居る。

四

閑雲亭濃茶器具は、前記の外、伊賀の水指が頗る珍品であつた、形は稍烏帽子箱に類して、口廻りに白釉を湛へ、胴以下は鼠色にコゲを交へて形狀釉色共に結構であつたが、生前殊に伊賀燒に趣味を持つて居た紅艷の追善茶會に此水指は無くて叶はぬ組合せであらう、澤庵茶杓は作者ばかりでなく、銘を釋迦と云ふからは是れも此茶會に動かぬ處であらう、斯くて濃茶一巡するや、薄茶を省き、母屋の書院で番茶を差出さんと云ふ庵主の挨拶があつたので、一同閑雲亭を立去らうとした時には、朝來泣出しさうであつた空が堪り兼てか潸々と降り出したので、先刻用意の傘を差翳して母屋の廣間に繰込めば、床には美事なる時代青貝高卓の上に空色滴らんばかりなる中形袴腰砧青磁香爐を飾り、其上に紅艷が日光遊覽中小西旅館に泊り、泥棒の用心にとて紙入を花生の中に隱した椿事を彼れが自らポンチにして、詞書を書添へた者を三幅對に仕立てゝ掛けられたが、其第一は大兵肥滿で近眼鏡を掛けた大入道が花生の中に紙

入を隱し居る處第二は此花生の中に水が殘て居て、入た紙入がピショヌレになつたのに驚いて之を取出さうとすると紙入の中にあつた鉛筆が花生の縁に閊へて、容易に出ないのに當惑して居る處第三は紙入の中から取出した濡た紙幣に火熨斗を掛て何やら是で通用するだらうとニコニコと喜んで居る處を描いた者で其自身で自身を描いたポンチの巧さは紅艶獨特の妙筆で是ぞ自ら其精神を寫し出した靈水居士の自畫肖像と云ても宜らう、此三枚續きポンチは紅艶死後其手箱の反古紙中より發見されたさうだが自像のポンチが餘り善く出來て居るので、今度庵主が表具して此床に掛たと云ふ事である、紅艶はポンチに天才的の妙を得て居たが伯兄の四角の顏と自身の丸い顏とを描く事が最も得意で、其傑作に至りては鳥羽僧正と雖も三舍を避くべき者があつた、而して其詞書が又中々面白く、中には狂歌などを交へた者もあるが現に今度彼れの遺族は香奠返しの袱紗に紅艶が自ら仁清の茶碗の圖を描いて、

仁清(人生)わづか五十圓(年)
　二十五圓は値でこなす(寢てくらす)

と讚した者を白地鹽瀨に染出して配られたが、又以て彼が狂畫狂歌に一種の着想を持つて居た一端を見るに足らう、紅艶追善の茶會は昨日先づ空心庵に開かれ今日又閑雲亭に催された程だから今年中東都の茶會は大抵彼れの追福で持切るであらう、而して余は大方之れに參會する事であらうから、其都度紅艶の逸事も併せて世間に紹介する事としやう。

(大正十年三月四日)

東瀛師木像

上

東瀛師とは博多聖福寺現住龍淵禪師の事である而して其木像は福岡出身の彫刻家山崎朝雲氏が大正五年自ら博多に赴き、當時六十九歲であつた東瀛師に謁して、親しく其頂相を寫し、元上野公園に在つて八百餘年の歲月を經たと言ひ傳ふる古楠樹を以て、約半身大に刻み上げた者である、此木像の施主は團狸山(琢磨)君並に令閨よし子夫人であるが今度彫刻完成を告げ愈々博多の聖福寺に奉納する事になつたので、そ

の前に之を知人中の好事家に示し併せて山崎朝雲氏を紹介すべく、三月四日正午團氏邸内の千年家鼓腹亭に同人を招いで午餐を饗し、東瀛師木像の開帳を行はれたのは、近頃殊勝な又風雅な會合であつた、此日正午原宿の團邸に赴き、正門脇の露地門より池を繞れる長露地を通り拔けて、仰木魯堂の處女作である文人風の十疊廣間に繰込めば、床には藤原時代と覺しき大幅の佛畫が掛けられてあつた、曼陀羅らしい圖樣で、本尊の面相は正しく藤原式で、其周圍に描かれた花卉などは大に佛畫愛好家の研究に資すべき者であつた、斯くて當日來會の人々は益田鈍翁、原三溪、岩原謙庵、野崎幻庵、池田成彬、小田柿捨次郎、田中親美の顏觸れで、仰木魯堂、古筆了任、伊丹常藏などが頻りに座間を周旋して居つた頃て來客の顏が打揃つたので、寄附を出でゝ例の大時代田舍家鼓腹亭に罷り通れば、二間に仕切られた上段の方の上手に東瀛師の木像を安置し、其傍に山崎朝雲氏所用の彫刻器具を列べ、床前の飾棚の上に朝雲氏の秘藏品なりと云ふ、丈一尺許りなる推古式銅製立像觀音を飾り、一方には鍍金小水瓶に馬醉木一枝を挿み、他方には長保元年號入白米返抄の古文書一卷と、主人所藏の大宗銘染附香爐を置き合されたが、此香爐は團夫人が故益田紅艶より讓り受けられた者なので、今日見えられた令兄鈍翁に對して追悼の意を表する爲め特に之を飾られた者である、顧みて一方の壁上を見れば、畫仙紙全面に東瀛師が達筆を揮はれた一軸が掛けてあつたが、是れは師が木像彫刻者山崎朝雲氏に與へられた者で、其文句は左の通りであつた。

佛身充滿於法界　普現一切群生前
隨緣赴感靡不周　而常此處菩提座
爲山崎朝雲囑　東瀛
中　印

東瀛師の筆跡は明人の風を帶びて居つて、古墨蹟に趣味を有する余等には少しく不向であるが、兎に角達筆で其中に自ら禪機も閃いて居るやうに見受けられた。

東瀛師木像は師が袈裟を纏ひ靈芝形の如意を兩手に持ち曲彔の上に腰を掛けた姿で、其丈三尺許りなるが、全部一木を抉りぬいて彫刻した者で、一見して其材料たる古

楠樹が稀有の大木であつた事が分明である、師は右眼が眇なりと見え相貌が餘程異樣であるが、鼻隆く脣厚く傲然として宇宙を呑吐する氣魄を其面上は現はし、ウッカリと問答でも仕やうものなら、彼の如意でコツンと一擊を頂戴するであらうと思はるゝやうである、總體白木地で衣の一部に金泥で唐草模樣を描き、臺の背面に東瀛師の略歷と、其木像製作及び寄進の由來を記述した漢文が彫附けてあつた、師は今年七十四歲であるが、初め教へを愚溪自哲和尙に受け、遂に其法を繼いで聖福寺の後董と爲つたので、此像は今後同寺中に安置せられて永く其風流餘烈を傳ふる者であるから、其彫刻者をして思ふ儘に其技能を振はしめた寄進者は、誠に無上の善根を施した者と謂つて宜からう、而して此製像者たる山崎朝雲氏は、今日此席に來會して親しく說明を爲すべき筈であつたのに、微恙の爲め醫戒に依つて缺席を餘儀なくせられたのは余等の甚だ遺憾とする所であつた、斯くて木像の一覽終るや、此間に續いて一方に土間を控へ、大黑柱の下に大爐を切つた古風な百姓家の三方に、小テーブルを一人一脚宛、凹字形に並べて、其上に朱塗の應量器を置き、禪寺の御馳走めきたる懷石を出されたが、片隅に立て置かれた二枚折の屛風を見れば、聖福寺の前住仙厓和尙の筆で太宰府の鷽換箱崎八幡の玉せゝりの光景を磊落に寫した粗畫で、其上に

太宰府八日夕祭

世の中のうそとうそとのかへ事に
かへて與へんわが誠をば

と云ふ一首を書附けてある、是れは太宰府で正月八日に鷽換と云ふ祭を行ふ時の故例を詠まれた者であるが、玉せゝりも亦箱崎八幡の祭禮の時の遊戲であるさうだ、和尙の畫は粗畫ではあるが、餘程達筆で、彼の白隱和尙などに比すれば一段垢拔けがして居るやうである、細川護立侯は仙厓の書畫を愛玩せられて多數に所藏せらるゝさうだが、近來和尙の書畫が九州地方ばかりでなく、全國到る處の好事家に愛玩せらるゝに至つたのは決して偶然の事ではなからう。

下

團邸の千年家で午餐終るや、薄茶一服進ずべしとて元の寄附に接續する八疊廣間に

案内されたので、一同同席に動座すれば、床には宅摩松谿筆と言ひ傳ふる周文風の密畫山水一軸を掛けられた、一説に松谿は周文と同人である、尾州德川家に松谿の印ある寒山拾得の圖が周文筆と爲つて居ると云ふ者があるが、是れは大に研究物であらう、扨て此一軸の下には青磁下蕪花入に牡丹を活け、床脇棚には名物歌切の多數に張交てある古筆帖を飾り、爐邊の遠州棚には染附雲堂水指を置き、白地御本喰違茶碗と了入作黑樂茶碗で一同に薄茶を侑められたが、此廣間と背中合せの四疊半にも、三尺四方の大石爐に時代煤竹自在を以て大釜を釣り、其壁床に當山第一の光琳筆紅白躑躅の一軸を掛け置かれたが、此床と相對する圓相戸棚の中には博多で有名な某の手造に係る河豚騎り惠比須が橙を抱へて居る陶製置物を安置してあつた、是れは橙河豚の神（大々福の神）と云地口的標像であるさうだ、騎龍、騎鶴、騎鯉等の圖は世間で往々見掛ける事があるが、河豚に騎つた人物像は甚だ珍らしい者である、是れは好んで河豚を食する九州人でなくては思ひ寄らぬ意匠で、河豚は喰いたし命は惜しなど云て居る關東人には夢想にも及ばぬ事である、今日は何れも心合ひの友人ばかりであつから、漫言放語勝手次第で近來稀なる清興を覺えたが、唯殘念であつたのは彫刻家朝雲氏の病氣不參であつた、五六年前下條桂谷翁夫婦の金婚式祝宴に、門人より贈呈した夫婦の小木像が、如何にも能く本人に酷似して居るばかりでなく、又能く其人格精神を表現して居るのに感服して、其作者は誰ぞと尋ねたるに、山崎朝雲と云ふ人が彫つたのだと聞いて、吾若し木像を造らば必ず此人を煩はさんと思つて居た處が、今度其手に成つた東瀛師の木像を見て愈々其妙技に傾倒したのである、此人頗る古佛像を好み、當日も推古式立像觀音を出陳した處を見れば、尋常一樣の彫刻師でないやうだから、他日面會して其苦心談を聞く事を得たらば、更に之を紹介する事と爲し、今日は唯同氏の丹精に係る東瀛師の木像を渴仰する機會を余等に與へられた團夫婦に向つて謹んで其好意を感謝するだけに留めて置かう。

（大正十年三月二十日）

光悦作山姥面

一

三月二十日、廐橋梅若舞臺の例會切能の山姥を勤めた萬三郎は、當日特に益田鈍翁所藏光悅作山姥面を被つて舞はれたので、演者も定めて精神を籠められたであらうが、觀客も亦頗る緊張した氣分で見物したやうであつた、此山姥面は大聖寺前田子爵家舊藏であるが、最初より同家に傳はつた者か、或は前田本家の分が後日大聖寺に讓られた者か、今其邊の委曲を審らかにする事は出來ないが、現所藏者鈍翁は先年故前田利鬯子より直接讓り受けられたのである。而して此面は普通のよりは總體少しく大きく赤味勝ちで何故か左の目が右より少しく大きく、鼻は下開きで口は普通の面よりも大きいが固より人を喰ふ鬼でないから何となく柔和で、思ひ做しにや微笑を含んで居るやうである。而して其光悅作と云ふ事は箱にも何にも記されてないが額に掛つた髮の毛は、俵屋宗達の描かれた者と覺しく、黑白入交りの線が筆太であつて、彼の光悅の書いた卷物の下繪にある宗達筆薄の穗と同一筆致であるから、古來光悅作と言ひ傳へられたのも、眞に當然と思はる丶、而して鈍翁が今度此面を萬三郎に使はせたのは、今より約二十年前萬三郎の實父實老人が存世の頃、老人は鈍翁に向つて、私の藝事は今や悉皆萬三郎に傳授致してござる、此上は彼が年功を積むに隨ひ、自身の工夫で力一杯に上達する事が出來るのであります、左れば彼が六十位になれば必ず私よりも上手になりませうから、長い目で御覽を願ひますと言はれた事があつたさうだ、然るに子を見る事親に如かずで、其後萬三郎の技藝はメキ／＼と上達し、果して實老人の豫言通りに爲つたので、同人は未だ六十に達しないが、彼が六十に爲るまで待つて居ると、追々自分の方が怪しくなるから、今度萬三郎が山姥を舞ふのを幸ひ、秘藏する光悅作の面を貸して其妙技を觀覽し、併せて實老人との宿約を果されたのであるさうだ、斯かる次第であるから萬三郎は當日鈍翁の席に來りて山姥面拜借の禮を述べられたさうで、其畢生の精力を籠めて懸命に勤められた事は固より多言を俟たぬのである、唯其面の關係より當日は通常の型で舞はれたから替の型の如く華美ではなかつたが後シテの莊重高雅なる舞振は、如何にも能く其面と調和して近來にない非凡の山姥と見受けられた。

二

光悦作の面を被つた萬三郎の山姥は、如何にもムックリとして覇氣のない幽玄高雅なる妙技であつて、前シテよりも、光悦の面を被つてからの後シテの方が一段優れたやうに見受けられた、當日萬三郎の音調は最初『のう〳〵』の出から前後を通じて一度も難澁を覺えず、過般の咽喉病も最早全癒したものと思はれた、前シテの『スハヤかげろふ夕月の』と云ふ處の凄みが何とやら平常程になかつたやうであつたが『うつり舞をまふべし』とツレに向つてからサラ〳〵とシテ柱に廻り込んだ足捌きの美事さは、人をして何とも言へない美感を覺えしめた、後シテの出の『アラ物すご』と云へる一節は餘りねばらず、サラ〳〵目に謠はれたが、音量が豐富であるから誠に樂々とした中に、懸河渺々として巖峨々たる有樣が歴々と目前に浮び出づるやうであつた、クセになつて床几に腰掛けたるまゝ扇を倒にして金輪際に及べりと足下を指したる思ひ入は、例ながら觀客に奥深き藝力を感得せしめた、而して其クセ舞のムックリとして女の鬼に相當する柔味を持た舞振が、凄味のある中に微笑を含んだやうな名作の面と調和して、古來此面を被つて山姥を舞ふた人が何人あつたか知らんが、ヨモヤ是れ程に舞はれた者はあるまいから、面も定めて嬉しかつたらうし、光悦も亦地下で滿足したであらう、殊に切の『花を尋ねて山めぐり』より舞容は颯爽として生氣を帶び『峰にかけり谷に響き』の飛返りより扇を切つて深谷を見込んだ姿勢は、予等をして感に打たれて落涙を催さしめたのである、抑も山姥と云へる謠曲は、古來一休和尚が作つたと言ひ傳へられてあるが、古人の說に山姥の山は世界、又姥は凡夫を指すのである、一切の衆生が生死の境に迷ひ、善惡の二つ卽ちよしあし引きの山めぐりするのは輪廻無窮の體を示すので、山姥に寓して之を說いた者であると云ふ事であるが、要するに大乘の見地より說を立た者で、一休禪師が『謠ふも舞ふも法の聲柳は綠花は紅、アラ面白の春の景色や』と言はれた事があるので、之を一休作としたのではあるまいか、尤も江口も一休作だと云はれて、此頃の謠曲に禪僧の作が交つて居る事は事實であるが、果して彼の作であるや否やは分らぬのである、左れど確かに幽玄體に屬する名曲で、光悦が多くの謠曲中より殊に此曲の面を選んで作つたのは決して偶然であるまいと思ふ。

三

梅若舞臺で山姥の能があつた三月二十日より三日を隔て、萬三郎より直接光悦作の面を被つた感想談を聞く事を得たが、大要左の如くであつた。

彼の面は普通の山姥の面より餘程大きいので、私のやうな顔の幅の廣い者には誠に被り工合が好うございました。面と云ふものは昔より餘程研究したもので、名作は必ず被り工合が好く出來て居ますから、彼の面も無論名作でありませう、アレを被つて舞ひますには白頭の方が引立つのでありますが、白頭の時には眞蛇の面を着る事になつて居ますから、普通の山姥を舞つたのであります、裝束は御承知の如く厚板の壺織に半切を着けましたが、當日は名作の面を被つたので平常と違ひ氣分が一段緊張して、實は替の型で一の松まで駈け入りたかつたのでありました、皆樣より當日の出來をお褒めに預りましたが、是れは全くお面の賜で、能の主眼たる面が名作であれば、被りよくもあり謠ひよくもあり、隨つて自分の精神も引締りますから、御見物の方でも平常より氣を入れて御覧下された事と存ぜられます、ヤ兎に角彼の面を着けて舞ふ事を得ましたのは、私一代の光榮として有難く感謝する次第であります。

以上は萬先生が光悦作山姥面を着けて舞はれた感想談である、而して其面が普通のよりも大きいと云ふ事は大に注意すべき所である、抑も光悦は謠曲に就て深い趣味を持たれた人で、自ら謠本を手寫したり、旅行用の爲めに細字にて之を認めたり、或は自ら謠本箱を作られた事もあつて、現に岩崎小彌太男の所藏になつて居る者は本箱の周圍に靑貝で謠曲名を嵌入して非凡な意匠を凝されて居る、又自筆の謠本百冊は嘗て勝海舟伯が所藏されたが、後徳川公爵家に獻じ、公爵家より更に宮中に奉納して今は御物となつて居るさうだ、此謠本の表紙は百冊とも總て草花の極彩色で、謠曲文は無論全部翁の自筆である、翁は斯く謠曲を好んで屢々素謠を試みた證跡はあるが、翁が果して仕舞を舞ひ若くは能を演じた事があるや否やは疑問である、左れど彼の山姥の面は翁が自身の顔に相應するやうに造つた者で、實際之を試用せずとも、詰まり自用の爲めに製したものではあるまいか、遺像に據つて觀察するに、光悦はデップ

りと肥つて重厚なる體格を具へ顏は大黑天の如く丸々として、普通の面では其顏に適當しなかつたと思はるゝ、彼の山姥面の普通のよりも大きいといふのは或は右樣の理由ではあるまいか、是れは光悅研究者に篤と研究して貰いたいものである。

四

光悅が本業の刀劍鑑定の外に、書畫、蒔繪製陶、茶事其他凡百の藝術に趣味を持つて居つた事は今更言ふまでもないが、當時廣く社會の上層に流行して居つた謠曲及び能樂に就て、翁の宿好が一通りでなかつた事は、其同好者と往復の文書が明かに之を證するのである、而して彼は何人より謠曲を習つたか分らぬが、觀世黑雪同宗雪は彼が書道の弟子であるから書道を彼等に敎へて謠曲を彼等より習つたのかも知れぬ、彼が友人に與へた書簡中謠曲に關する者は數々あるが、平常非常に之を好んで油斷なく之を練習した事は其手紙の一節に『此方の曉謠は去夜にて相濟申候』と云ふ文句があるので、例の寒稽古でも試みたものらしく思はれる、大倉鶴彥男の所藏せらるゝ光悅自筆卷物に、素謠番組を列記した者があるが、日附は五月十四日で其番組は二十番あつて、同吟者は祐安宗茂、彌七、兵衛尉、求意、與一郎、源治郎など云ふ連中で、光悅自身に此中の四番まで謠つて居るが、其曲目は

關寺小町　　天鼓
盛久　　山姥

である、彼の謠は他の藝術の如く優秀であつたかどうか分らぬが、一席に大曲のシテを四番まで謠はるゝ所を觀れば下手でも上手でも兎に角橫好きであつた事は明白である、光悅は自身に詩歌を作らず、無論文學者ではなかつたらうが、文學趣味には可なり通じて居つたやうである、左れば其山姥の面を作るにも、後年長澤蘆雪が嚴島神社に奉納した山姥圖の如く、唯之を奇怪なる山中の鬼女とのみ心得ては居らぬ、又彼の俗曲に謠はるゝ金時の阿母さんとして之を取扱つても居らぬやうである、乃ち一種幽玄なる理想を人格化して其表情を彼の面に刻んだ者で、山姥と云ふ謠曲の精神を十分に理解しない者の企て及ぶべき所でない、左れば彼の山姥面は光悅作品中最も彼の精神を打込んだ逸作と謂つて宜からうと思ふ、斯かる名品であるから益田鈍

翁は今度萬三郎に貸したのを最後として、最早何人にも被らせないと云ふ事であるから、余は鈍翁に向つて玄人には今度限りで宜いが、素人にも是非一度貸して貰ひたい、余は今より三年間山姥を研究した上で、光悦の面を被つて之を舞ひたい希望であると言つた處が、鈍翁は無言の儘顔に不安の念を浮べたから、余は更に一歩を進めて但し前以て試驗を乞ふて、愈々及第した上で面を拜借する事に仕らうと言つたので、鈍翁も夫れで安心したらしく破顔一笑曰く諾矣。

新網茶會

（大正十年三月二十六日）

上

王子製紙會社專務藤原銀次郎君は、三月下旬春季茶會を其麻布新網邸曉雲庵に開かれたが、余は二十六日夕刻の一組に加はつて之れに參席する仕合を得た、寄附は庭の東隅に在る三疊離れ家で、棚には蓋表に馬蹄の二字ある蒔繪小硯箱を置き、茶盆には染附捻茶碗と尹部香前入を置合せ、丸爐に時代鐵瓶を掛け、席中に敷かれた一枚の毛氈の上には桐木地大火鉢と、志野四方入火入を備へた手附煙草盆を並べられたが、毎度寄附飾附の雜器を目新しくせらるゝのは、庵主が如何に茶事に熱心なるやをトするに足る、相客は三井銀行の重役連で米山梅吉菊本直次郎、間島弟彥三君の外に、八百善主人と加州の越澤宗見が加はつて、余と共に六客であつた、菊本君が銀行の食堂會議で毎度茶室の消息を心得顔に談論せらるゝので、今夕は余を立會人として其腕前を試驗せんとて、米山間島兩君より頻に正客の辭令を突き附けたが、槓杆でも動かぬ容子なので、已むなく余が正客を失敬して、池水に沿ふたる露地傳ひに順次曉雲庵に繰込めば、裏千家又隱の席に酷似した四疊半の床に寂竹一重切を掛けて、赤椿と藤の新芽を活けられた、此花入は其寂竹なると底廻りに一鉈切立てた工合など、一見宗旦作と思はるゝ者であつたが、後其箱書を拜見すれば石州門の高足藤林助之丞より畑山喜右衞門に贈られた者で、一重切寂竹石見守作と書附けてあつて、外箱は本屋了雲の筆である、斯くて庵主出でゝ挨拶の後早速炭手前に取掛られたが其器物は左の通りであつた。

釜　寒雉作姥口柏の一葉地紋　　香合　染附角田川　　炭斗　和物竹組曲形

羽箒　野雁　　灰器　了入燒ぬき

以上器物の中角田川香合は染附の形物で、川柳の下に屋形船の圖があるので、茶人が斯く稱する者であるが、藍模樣が美事で確かに此種中の逸品であつた。軈て炭手前終るや朱地靑貝櫻模樣、卽ち明月椀寫の皆具で左の懷石を出された。

汁　三州味噌陸芹　　椀　鶏しんじよ、蕨　椎茸、木の芽　　向附　祥瑞鉢形丸紋模樣　鯛昆布〆、山葵、甘酢

燒物　赤繪大形魁鉢、白魚　　吸物　水前寺海苔、芽獨活　　八寸　車海老むしり、松露

香物　織部燒小鉢、澤庵細切　　酒器　靑磁獅子蓋鐵銚子　備前小形德利唐津　及染附松竹梅盃　　菓子　絹笠

中

新網藤原邸曉雲庵の懷石は八百善の庖丁であつたが、今度は庵主の好みで乙に凝らずに至つて淡泊なのが有難かつた、扨て當夜は烈風屋を動かすと云ふ物凄き天候であつたから、庵主は大に氣を利かせて廊下傳ひに母屋の廣間に中立せしめ、合圖を用ひず自ら出迎はれたので、再び入席して其床を見れば、白河切よりも竪が短く字が太い西行の歌切を掛けられたが、其歌は

世の中にたえて櫻のなかりせば
　春の心やのとけからまし
散ればこそ櫻はいとゝめでたけれ
　うき世になにか久しかるべき

の二首であつて、其中廻しに櫻と波模樣の茶地緞子を使はれた所は然るべき好事家の手になつた表裝と思はれた、而して庵主手前の濃茶器物は左の通りである。

茶入　金華山眞如堂手　遠州銘八雲　　茶杓　細川三齋作　狂歌銘吳竹　　茶碗　靑井戶

水指　木地曲　　蓋置　靑竹引切　　建水　南蠻〆切

眞如堂手茶入銘八雲は甑際の黑釉光澤物を鑑すべく、胴廻りは黑釉と柹金氣色と錯綜して、斑紋面白き景色を成し、腰以下に鐵氣色の土を見せ、糸切は稍荒い方で無疵で品位高く、釉色の美事さは本歌にも劣らぬ程であつた、茶杓は細川三齋共筒で狂歌が書き添へてあつたが、此茶杓に就いては一條の珍談があるから、其品評は後廻しとし

やう、青井戸茶碗は内外共に青味勝ちの裡にドロ〳〵と共釉のナダレがあつて、高臺内外の作行手強く、見込に目が五つあつて、疵も割合に少く、見所多い茶碗であつた。斯くて濃茶一巡し終るや十四五許りなる愛孃が薄茶代點とあつて、令閨補導の下に平常練習のお手前を試みられたが、其器物は左の通りであつた。

茶入　永坂三井氏好み 楓木地金輪寺形　茶碗　茂三一刷毛　替茶碗　ノンカウ作 如心齋銘菊水

水指　高取菱形

建水は前同樣で、惣菓子は紅白櫻打出を唐物菊花形朱盆に載せて出された、薄茶器中では茂三の茶碗が一見朝日燒のやうな出來で、高臺内外の作行殊に勝れ、一部に凹があつて内側にサラリと白き一刷毛あるは正しく此種の逸品である、ノンカウ茶碗は薄作で小形で、其薄茶専用なのが珍しかつた。

下

新網茶會の懷石及び道具取合は大略前記の通りであるが、茲に注目すべきは庵主が次第に茶臘を經て、坐作進退が茶室と相調和し來つた進境の著しい事である、但し本業多端の爲め點茶の手順は相變らずシドロモドロで、折角の宗匠振を引下ぐるから、夜分少間にても家庭教師なる令閨に就て今少し御練習を願ひたいものである、併し實業家の事とて要領だけは先刻承知して、當夜の濃茶六客分の大服を紅に刷いたやうに點てられたのは玄人跣足のお手際であつた、扨て客方に於て當夜の荒大名中先進と許された菊本君は三客目であつから、大に其客振を示すべき餘地もなかつたが、左ればとて別段失策と云ふべきものもなかつた、唯二客の米山君が竹花入の箱を茶杓の箱と見違ひて、茶人は物を大切にして二重箱三重箱に入れ置くさうだが、彼の小さき茶杓をコンナ大きい箱に入れ置くからには、定めて幾重にもして秘藏するのだらうと非常に感服せられたのは一座大笑ひであつたが、誠に無理からぬ感違ひである、然るに此茶事中玄人で大感違ひを演じた一場の笑話がある、一夕團狸山翁の正客に池田成彬君などが加はつた一組の末客を勤めた東都茶器商の元老梅澤鶴叟は、彼の細川三齋の茶杓を見るや正客なる團翁に向ひ、凡そ茶杓は作者の魂の現はれ出るもので、其人柄に依て夫れ〳〵の手癖があります、此茶杓は無論遠州作でありま

すが權先は云々切留は斯く〳〵、是れが遠州の遠州たる所でありますと、何の疑ふ所もなく演說したので、團翁は彼が餘りの斷言に驚き、君は左樣に言はるゝが此茶杓が果して遠州であるや否やは筒書を見ない中には分らぬではないかと言はれた處が、鶴叟は禿頭を左右に掉り、否々此茶杓が若し遠州でなかつたならば、私は明日より茶道具屋の看板を外しますと公言したので、一座成程と感服して、扨て愈〻茶杓の筒を見れば細川三齋が朱漆で銘をくれ竹と書き、其傍に左の狂歌を認めてあつた。

　折りすつるものにはあらて呉竹の
　　世々の笑ひの一節となれ

斯くて此筒書附を見た鶴叟は、其言責に對して明日より看板を外さゞれば二枚舌の道具屋と爲るべき破目に陷り、大閉口の體であつたので、團翁取敢ず

　遠州と思ひの外の三齋で
　　世々の笑ひの一節となる

と口吟まれ一座大笑ひとなつたさうだが、梅澤が遠州と鑑定した三齋の茶杓を見れば遠州よりも利休に近く、無條件で之を遠州と斷言するは餘りと云へば大膽過ぎて、縱し其看板は外さぬにしても、其中何か一廉の手柄を立てざれば此茶器盲事件に坐して、東都茶器商の元老株を辭職せねばなるまいなど、無邪氣なる餘談に時移り、一同藤原邸を辭したのは午後九時半頃であつた。

辛酉大師會

（大正十年四月三日）

一

今年の大師會は四月三日午前十時より、例の如く品川御殿山益田邸碧雲臺に開かれた因つて前會の例に倣ひ干支に因みて之れを辛酉大師會と稱しやう、今回は表裝の出來上つた信實筆三十六歌仙を一堂に掛け列ね、此信實に緣故ある榮華物語、或は光長病草紙、慶恩平治物語等略同時代の繪卷物を展陳して、好事家に比較研究の便宜を與へ、茶室の方は加藤正義幽月亭、戶田彌七太郎庵、竹内廣太郎爲樂庵、益田英作未亡人玉子無爲庵、多門店田舍家、仰木敬一郎扇庵受持で、是れは期せずして各室共益田紅艶

追善が主題と爲つたやうである、因つて先づ本會の根本道場たる應擧館の床飾より、三十六歌仙及び繪卷物に及び、夫れより各茶室の飾付を略記する事としやう。

應擧館

床には信實筆普賢十羅刹女の圖を掛け、其前なる東大寺舊藏で丈の高い螺鈿春日卓の上には、草花を盛つた鍍金毛彫の天平鐵鉢を飾られたが、普賢十羅刹女は小幅ながらも、面相の優美なる傅彩の鮮麗なる、信實佛畫中の絶品で、螺鈿卓天平鉢と共に大師會の第一壇を莊嚴すべき名品揃ひであつた更に床脇棚を見れば、上に例の大師筆座右銘一卷を納めたる時代青貝の箱と、大師請來枕本尊同古銅獨鈷を置き並べ、其下に時代波模樣辨財天箱を飾られたが、何れも古物鑑賞家をして感涙に咽ばしむるものであつた、顧みて下段十八疊の座敷を見渡せば、入側より上段の間の一部まで打通して、壁上隈なく天下の好事家が思ひ〱の意匠を凝して表裝したる信實卅六歌仙中の卄五幅を掛け列ねたる光景、是れぞ眞に歌仙の表具較べにして、幕内力士が綺羅美やかなる化粧褌を着けて、土俵の眞中に整列したる有樣にも譬へつべく、比類稀なる盛觀に來客一同無限の興味を催した、猶又此上下二間を引通した入側には長テーブルの上に信實筆後京極良經詞書の榮華物語三卷を披陳されたが、是は蜂須賀正韶侯、藤田平太郎男森川勘一郎氏の所藏品で、此外には久松定謨伯が一卷所藏せらるゝのみであるから、今度天下に現存する右四卷を一堂に集めたい希望で、會主より久松家に懇願したが同家の都合上遂に出陳の運びに至らなかつたのは甚だ遺憾の至りであつた、而して今回展陳の三卷中蜂須賀藤田兩家のは何れも五段森川氏のは八段で、圖樣傅彩の優美高雅なる到底筆舌の形容すべき所でない。

二

辛酉大師會の中堅應擧館の壁上に掛け列ねられた信實筆歌仙幅は、已に表具の出來上つた二十五幅で、此外に表具が間に合はないので切の儘出品された四枚は、入側の一部に披陳せられてあつた本來信實歌仙は三十六人の外に、住吉明神を表現する住吉社頭の圖が加はつて三十七枚あるのだから、當日出品に及ばなかつた者が猶ほ八枚あるのである、而して已に出來上つた表具は各所藏者思ひ〱の意匠を凝らして、

或は歌仙の人物に相應すべく、或は其歌意を表現ずべき、色彩模樣を好まれたので、表具價格が中身以上に上つた者さへあるさうである、兎に角苦心慘澹で善美の極を盡した者だから、今其歌仙と持主と表具裂とを記錄して數寄者の參考に供しやう。

住吉明神　一風紫印金、中納戶廣東縞、上下銀モール、　東京　津田信太郎
人丸　一風本願寺裂白茶小牡丹、中織部緞子、上下時代水淺黃緞子、　尾張　森川勘一郎
躬恒　一風花色中牡丹、中茶地小牡丹、上下唐物緞子、　尾張　横井清三郎
小大君　一風白茶竹屋町花兎、中茶地織部緞子、上下紋絽、　橫濱　原富太郎
家持　一風茶地權現堂、中萠黃安樂庵火燈龍、上下納戶七寶撫子、　東京　岩原謙三
業平　一風白地小牡丹、中慶長花見縫取、上下唐物緞子、　東京　馬越恭平
素性　一風中萠黃地更紗印金、上下紋紗軸螺鈿、　東京　野崎廣太
猿丸　一風花色牡丹金襴、中素地摺形蝶鳥、上下淺黃石疊緞子　尾張　船橋理三郎
敦忠　一風縫紗、中織部緞子、上下時代萠黃紗綾、　東京　團琢磨
公忠　一風紫印金、中萠黃織紗、上下幸菱緞子、　兵庫　藤田彥三郎

齋宮　一風中紫地更紗印金、上下淺黃唐物紗綾、　東京　益田孝
宗于　一風興福寺類裂、中納戶地金襴、上下淺黃鳳龍緞子、　東京　山本唯三郎
興風　一風紫印金、中紫印金牡丹、上下唐物緞子、　京都　大辻久一郎

三

辛酉大師會に於て、應擧館壁上に掛け列ねたる歌仙幅は、前記の外左の十二幅であつた。

是則　一風中鎌倉時代唐紙繪吉野山圖、軸螺鈿、　東京　益田弘
兼盛　一風嚴嶋經紙、中鎌倉時代繪紙、上下萠黃シケ、軸蒔繪　京都　土橋嘉兵衞
伊勢　一風紅鹿の子、中淺黃紀無地、上下天平紅絹、　東京　有賀長文
赤人　一風紫印金、中茶地牡丹古金襴、上下雙魚古金襴、　東京　藤原銀次郎
貫之　一風茶地印金、中淺黃二重蔓牡丹、上下扇面散し縫取、　京都　服部七兵衞
信明　一風紫地小牡丹、中萠黃竹屋町、上下茶地紹紀、　大阪　住友吉左衞門
遍照　一風石山紗、中茶地椎實印金、上下白茶シケ　東京　小倉常吉

頼基　一風白茶松竹梅金襴、中花色本願寺裂、上下白地靈芝雲、　東京　益田信世

中務　一風萠黄上代紗、中上代緞子、上下淺黄唐物緞子、　大阪　山田德太郎

仲文　一風花色小牡丹、中丹地安樂庵牡丹、上下時代赤蜀錦　大阪　鈴木馬左也

順　一風嚴島經紙、中東山竹屋町鳳凰紋、上下慶長時代水流紙、　東京　高橋義雄

高光　一風紫牡丹印金、中二重蔓大牡丹、上下黄絹、　大阪　兒島嘉助

以上二十五幅は、大師會後帝室博物館表慶館に陳列して、四月七日より十一日まで五日間公衆の展觀に供せられたから、余は其特別招待日なる七日に參觀したが、場所が廣く光線が明るいので、繪畫も表裝も非常に引立ち、比較研究上一段の便宜を得た扨て此表具を完成するに就き所藏者の苦心は容易でなかつたらう、東京方面では大經師三好竹馬が多年貯蓄して置いた材料を用ひて數幅の表具を完成したが、中身が中身であるから大に意匠を要して、高價な裂だから結構な表具であるとは言はれぬのである、中には表具の華美なるが爲め畫面の色彩を打消した者もあるやうだから、今度比較研究の結果、後來或は其表具に多少の變更を來す者があるかも知れぬ、最初二卷に纏まつて居つた歌仙卷物を分斷した時は、國寶を毀損したかのやうに思つた者もあつたが、持主が斯くまで之れを珍重して斯る表裝を施した所を見れば、其分斷されたのが強ち歌仙の不幸でもなかつたやうである。

四

辛酉大師會の中堅たる應擧館奥の間には、床に中金蒔繪多聞天、左右經文下に蓮蒔繪の三枚を三幅對の如く掛けられたが、是れは元と厨子の扉であつた者らしく、藤原時代の製作で、文字も圖樣も蒔繪も眞に結構な名品であつた、此三枚畫聯の前には時代散蓮平卓に青磁千鳥の香爐を載せられたが、其滴らんばかりの青色の美事さは何と評したら好からうか、彼のイタリヤンスカイなど云ふ言葉を以て之を形容するの外なからうと思ふ、而して其床脇棚に飾られた木彫僧形八幡坐像、竹帙入天平經三卷及び袈裟箱は、時代と云ひ品質と云ひ、何れも好古家の目を驚かす者であつた、夫れより鍵の手形の入側を見渡せば、名古屋の關戸守彦氏所藏光長筆病草紙と、松平直亮伯出品の住吉慶恩筆平治物語が長卓上に披陳せられてあつたが、此光長病草紙に就ては

嘗て詳細に記述した事があるから今又贅せず、平治物語りの方を略說せんに是れは光長や信實とは一風變つて寫實の方に發展して居るので、畫品は少しく乏しいやうであるが、當時に於ては蓋し新派に屬する者で、自ら一流を開いたのであらう、多數の武者を描寫する筆力が輕快自在で要するに一代の大家たるを失はぬ、以上應擧館飾附は當會の中堅で何れも稀代の珍品のみであるから其說明は此邊で切上げて、是れより茶室の陳列を記述する順序であるが、各室に於ける多數の珍什名器を掲げ一一之を品評する事は到底不可能であるから、今其槪況と重立つた道具を摘記し、其他は讀者の自から想像推察するに任せやうと思ふ、處で先づ應擧館廊下續きの

太郎庵

より始めやう、當庵は大阪の茶器商戸田露朝子の受持で、床には隆蘭溪尺牘一軸の前に、南蠻繩簾の置花入を飾られた、釜は古蘆屋輪違紋、香合は吳洲菊蟹であつたが、其他重立つた器物は左の通りである。

水指　伊賀耳附
茶入　面取手口廣　遠州銘吸江
茶杓　細川玄旨共筒
茶碗　光悅黒銘殘月　替　雲鶴筒
菓子器　刷毛目飯櫃鉢

以上道具組の中で光悅黒銘殘月茶碗は、京都の福井家舊藏で作行の頗る面白い者である、昨年春京都の同家藏器入札會に於て三萬餘圓に落札したのを見ても其凡品でない事が分るのである、伊賀耳附水指はビードロ藥が美事で耳作が面白く、吳洲菊蟹香合は疵が少々あつたが又逸品たるを失はなかつた。

五

品川御殿山大師會の茶席巡りは太郎庵より邸內東南崖地に臨んだ

爲樂庵

に立寄る順序である、當庵の主人は東都茶器商近善事竹內廣太郎で、飾附の趣向が益田紅艶の追善であるから、床に故靈水居士筆仁清茶碗及びハンネラ火入畫讚を、其黒絽紋附の羽織で表裝した一軸を掛けたが、ハンネラ火入の讚は

はんねなら買つても見たし火入かな

と云ふので、紅艶追善茶席の掛物として恐らく是れ以上の適役はなからう、此掛物の

前には四方入角盆の上に青磁縄耳三足香爐を置き、大西淨久作定家卿三夕歌地紋の釜を掛け、名物靑江手銘面影の茶入を床中に飾られたが、之に準じて其他數々の名器を陳列した庵主の心入の深きには、大いに敬意を表せざるを得なかつた而して其中重立ちたる者は左の如くである。

香合　時代蒔繪　　水指　南蠻横縄四ッ耳　　茶杓　光悦共筒

茶碗　伊羅保片身替

以上器物中では光悦共筒の茶杓が最も面白く、伊羅保片身替茶碗は此手の中では稍締つた方で、其無疵なのが何より嬉しかつた、扨て其次は益田紅艶未亡人たゞ子の主人たる田舍家

無爲庵

であるが、是れも勿論故人追善の趣意で、其遺品を大師會員の展觀に供しやうといふのだから靈水居士の遺愛は大方出陳せられ床には推古時代如意輪觀音像を飾り、其前の香爐は井戸銘あの世と云ふ小形の珍品で、之を天皮盆に載せられた此外時代蒔繪伽羅箱翡翠の珠數なども見受けたが、紅艶が生前に自ら二十五萬圓と評價して居つた天下一伊賀花入が、推古時代の古佛像前に在つて、更に見劣りのせなかつたのは流石に名品の貫錄と思はれた其他田舍家の事であるから、多くは佗道具を飾られたが、其重立つ者は左の通りであつた。

茶碗　ノンカウ加賀七種の内銘善福寺　　茶入　信樂銘牛聖　　釜　朝鮮四ッ耳平釜

茶杓　遠州歌銘山吹　　建水　砂張鐵鉢

以上器物中ではノンカウ善福寺の茶碗が最も異彩を放つて居たが、遠州歌銘山吹の茶杓も亦誠に殊勝な者で、故人が此陳列を見たらば『何うでゲスエッへ、、』と得意の一笑を洩らすであらう。

六

御殿山田舍家無爲庵は、一棟中の廣間を紅艶未亡人が受持ち、小間は紅艶が生前に主宰した多門店で追善の趣向を凝らされたが、床には靈水居士筆夢の一字を、居士が生前十八番として度々諸方で踊られた保名の袴裂で表装した一軸を掛け、其前に備前

の水盤を置いて枯蓮と杜若を活けられたが、掛物が夢の一字で表裝が保名の袴とあれば、花は菜種がヨリ適當であらうと思はれた、此席は櫻湯攝待を特色と爲し、荒磯地紋鐵瓶掛に銀瓶を掛け、唐物四方茶盆に繪高麗煎茶茶碗を載せ、大師饅頭を點心としたのは如何にも手輕な垢拔けのした一席であつた、而して此田舍家より楓谷を隔てた對岸に陣取つたのは仰木魯堂の

扇庵

で、床には實朝の日課觀音を掛け、銅鐵鉢の香爐の傍に時代袈裟を置き、釜は天明手取、香合は呉洲中赤玉で、恭しく靈水庵消息の一巻を飾り、テーブルの上に果物と紅茶を置並べて薄茶に飽果てた賓客を待受けた庵主の機轉は、先づ以て輕妙と賞讃せずばなるまい、斯くて最後に殘つた一席は、茶道具の上に於て完全無缺宗の開山たる加藤正義翁の受持たれた

幽月亭

であつて、趣向は矢張り紅艶追善を含まれた、今入亭匇々床中を窺へば一休禪師が上に心の一大字を書き其下に

　西へ行く一の心たかはすは
　　十のおもひもたかはさらむ

と認め、傍にむらさきのゝ純藏主爲四條唯阿彌陀佛書之と物された一軸を掛けられたが、尺五幅の紙本で文字の出來は勿論、中茶地印金表具の結構なる目を驚かす許りであつた、此一軸の前には堆朱輪花盆に砧青磁小袴腰香爐を飾られた、其香爐の青色滴らんばかりにして、卯の毛で突いた程のすれ疵さへないのは、流石に完全宗家元の所持品なりと首肯かれた、而して釜は與次郎作卍地紋、香合は祥瑞立瓜であつたが、其他重立たる器物は左の通りである。

茶入　中興名物瀬戸肩衝 銘玉柳
茶碗　本手御所丸
替　一入土見 銘玉かつら
替　九谷裂模様半筒
茶杓　藤村庸軒銘 宇津山詩入
水指　備前緋襷種壺
建水　七寶袋形
蓋置　織部竹引切形

七

前記幽月亭に飾附けられた加藤正義翁の列品は、完全無缺の一言を以て之を蔽ふべく、其一々に就て之を說明するは到底不可能の事であるから、これは讀者の推測に任せる外なからう、其外小書院には白桐軸盆に筑紫切金剛經一卷を飾り、南蠻砂張二段靑海盆に櫻打物の惣菓子を盛り、煙草盆は鶉蒔繪で其染附網手の火入の美事なるは言ふまでもなく、席上の茶器は總て精美と奇雅とを兼て、茶人の垂涎に價する者ばかりであつたが、建水に廣間用の七寶袋形を使はれたのは、當日の飯頭たる大善主人などに多少異論があつたらう、左れど是れが加藤式で是れなくては完全宗の本山と云へぬ譯で、綺麗好きなる翁の性格は此一品で一層明瞭に現はれたのである、斯くて從來大師會に幽月亭を使用した茶人は幾人あつたか知らないが、斯る名器揃ひの陳列は確かに前代未聞であらう、然れども加藤家の秘藏品たる志野丸壺茶入若くは竹屋井戸茶碗などを見受ぬ所を觀れば、今日の陳列は幕內中軸位の勢揃ひで、加藤部屋の横綱大關は未だ〳〵土俵入しなかつたのである、扨て今度加藤翁に幽月亭を受持つべく談判したのは、斯く云ふ箒庵で、翁も相手が惡いから承諾する外あるまいと言はれたさうだが、兎に角斯る名品を陳列して多數の好事家を悅ばせたのは一大功德と謂ふべきであらう、猶ほ其上にも加藤家の寶藏に在つて、永年日の目を見なかつた名物道具を數寄者の眼前に引出した功德は一層廣大であつたらうと思ふ。

當日は午前より早や暴風雨の先陣が到來したので、茶室巡りに番傘を要する不便はあつたが、會主が無性庵と名づけた西洋館で辨當式午餐を饗應せられた注意周到で、來客一同雨に濡れて天幕中に立つ心配もなく、今年も亦例の如く大成功の大師會であつた、斯くて此興味ある大師會は今度改めて法人組織と爲し、來年よりは邸園茶室等の設備が此大師會を開くに足るべき會員中の某々家に順次持廻つて開會する都合となつたから、次回は何人が會主と爲らるゝか未定だが、場所が變り趣向が改まれば興味も一段加はつて、此風雅高尙なる會合は碧雲臺主百年の後までも繼續し、古物美術愛好家に無限の參考裨益を與ふる事であらう。

（大正十年四月十二日）

一木庵茶評集

人間の壽命は神様より拜借した借金で何人も一度は返濟せねばならぬが、其期限が定まつて居ないから、何時催促されて何時返濟せねばならぬやら、思へば油斷のならぬ次第である、況して耳順翁となつた箒庵の如きは、早々棺桶の置場を設けて置かねばなるまいと思ひ立ち、昨年五月起工して從來の座敷十疊の先に十二疊入側附の一間を造つたに連れて、茶室の一木庵をも改築する必要が起つた、其折柄根津青山君が所持して居つた奈良興福寺の古柱二本の内一本を分與せられたので、彼の原叟好み太柱の席に修正を加へて、三疊半の新一木庵を造り上げた處で三月三十一日を初日に四月十二日まで新席開きの春季茶會を興行し、或る時は一日に正午夕刻兩會を催し、茶會十四回を重ね茶客七十人を招待したのであるが、余は其茶客に向つて每度貴方の茶事を批評して居る其代りに、今度は反對に貴方の茶評を聞き、之を收錄して自茶自評に代へる積りであるから、可否善惡とも一切茶交的辭令を用ひず、露骨赤裸々の品評を賜はりたいと請求した、然るに茶客は兎角遠慮勝ちで豫期の如く多くの評論を辱うする事を得なかつたが、右黑泥翁、益田鈍翁、原三溪其他諸先輩中より有益なる敎示を賜はつたから、先づ懷記附を發表して其後に右評言を揭載する事としやう。

一

一木庵新席寄附

掛物　利休消息定家卿色紙彌秘藏云々　　硯箱　時代網代　　鐵瓶　時代大霰れ、鐵四方透し風爐に掛けて

香煎入　宋胡錄　　茶碗　染附松竹梅模樣、木地丸盆に載せて　　煙草盆　松花堂好み鯨手

火入　祥瑞六角舟人物　　火鉢　時代桐あこた　　手焙　乾山共蓋櫻模樣

敷物　絹緞通

二

右利休消息一軸は本席に掛けた小倉色紙の附屬品で、表具は色紙と共に細川三齋の好みである、鐵瓶は加賀の龜田と云へる侘數寄者の愛藏で、大霰れの外側を其儘に保存して、中に鐵瓶を仕込んだ者である、又乾山手焙は滿開の櫻の中に香の圖を透かした者で、極めて小形で底に乾山の二字が燒付けてある。

一木庵本席の床に掛けた定家卿の小倉色紙は、古筆家が白色紙と稱する者で、金箔若くは地紋のない色紙で、其歌は

　たかさこのおのへのさくらさきにけり
　　とやまのかすみにたゝすもあらなむ

と云ふのである、此色紙は數年前まで子爵久世廣英氏の所藏で、之に附屬する由緒書を見れば、一條殿御所持、其後仙石兵部殿へ參り、爰にて細川三齋公表具を好まれ、夫れより一柳殿へ參り、同家息女金保安齋方に嫁入の節に持參して、其子の道訓に傳ふとあるが、白河樂翁公の編輯せられた集古十種に久世家所持としてあるから、寛政年度には已に同家の所藏に歸して居たのである、上下淺黃地銀襴、中紫印金、一風上代紗の表具は卽ち細川三齋の好みで、利休の文を始め畠山牛庵其他古筆の外題が多數に附屬して居つて、久世家傳家の重寶であつたが、數年前余の懇望に任せて子爵が割愛せられた好意は余の大に感荷する所である、此一軸の前には新席の事とて三寶の上に熨斗を飾り、扱て炭手前の器物は左の通りであつた。

釜　古天明銘おぼろ夜 三齋箱書　　釜蓋　肥後鐔師 平田彥三作　　香合　青磁桃、後ノンカウ雀
炭斗　唐物竹組　　羽箒　大鳥　　鐶　與次郞作
火箸　完偏所持桑柄　　爐縁　時代澤栗　　灰器　長次郞燒ぬき

炭手前終つて後、黑塗角切膳皆具にて運び出した懐石は左の通り。

汁　三州味噌露共葉　　向附　金襴手、鯛掻き身、岩茸、煎酒、山葵　　椀　星鰈、蕨、木の芽
燒物　織部四方鉢、鶉つくれ、筍　　吸物　鯨骨、濱防風　　八寸　若鮎、松露青松葉に差して
强肴　越前産雲丹蟹 唐津編笠猪口に盛りて　　香物　吳赤洲繪魚手鉢 京都產すぐき　　酒器　志野蓋糸目鐵銚子 緋襷德利、染附捻酒呑
菓子　銘伏屋、朱塗青貝櫻模樣盆に載せて

懐石後中立の節合圖は石磬を用ひ、後座の床には古銅紹鷗所持桃底花入に白玉椿を活けたが、濃茶手前の器物左の如し。

茶入　中興名物金森大海　　茶碗　千家名物黑光悅　　茶杓　古田織部共筒 隨流書附
水指　木地曲　　建水　南蠻餌畚形銘泊船　　蓋置　半枯青竹引切
茶　庵主新名鶴の白、松柏園詰

三

一木庵茶會は廣間を用ひず、濃茶に引續きて同席で薄茶を出したが、其器物は左の通りであつた。

水指　古伊賀瓢共蓋　　茶器　庸軒朱手桶　　茶碗　無地刷毛目
替茶碗　薩摩　　茶杓　利休形象牙　　建水　塗曲
蓋置　金森德元作鐵樓象眼　　惣菓子　獨樂盆草結、濱千鳥

一木庵新席の懷石及び道具は大略前記の如くであるが、新席は舊庵よりも一間程前方に出張つたので、露地は地面の傾斜を利用し、梅見門より石段を下り腰掛を客間の軒下に取設けたのは誠に已むを得ざる窮策で、奈良仕込の伽藍石を飛石、捨石、蹲踞石其他の役石に使用し、聊か目先を換たのであつた、斯くて今度の茶事に就き庵主の希望に應じて先づ茶評を寄せられたのは、初日の正客石黒況翁であつたが、數々の讃辭の後に左の一節を附け加へられた。

拙評可申上旨御約束候得共何と可申上樣も無之候、强ひて我が流儀に引附けて申上候へば、御掛物御茶入又は御床柱に對して御爐緣が塗緣にて候はゞ、一入宜しかるべきかと被存候、是れは責塞ぎに申上候事にて、ホンの盲人の雜評と御笑ひ可被下候、私の懷記本日が第七百十六回に右の如く記入致し置候、

石黒況翁は當代茶道の耆宿で、茶會に招がるゝ毎に必ず其懷記を認むるを例とし、是れが今や七百十六回に及んだ不斷の丹念は誠に感服の外なく、隨つて其老巧の程も窺ひ知らるゝ譯であるが、翁は遠州流であるから重きを廣間に置き、小間にも塗爐緣を採用を主張せらるゝ者であらう、次に原三溪君の評は、小倉色紙は結構であるが、興福寺殿堂の古材を柱とした一木庵には古墨蹟こそ似合しけれ、小倉色紙は寧ろ向島の嬉森庵で使はれた方が適當だらうと云ふのであつた、團狸山君は此評を聞いて、定家色紙は假名でこそあれ其文字大きく、一種の墨蹟と云つても宜いから、最初より色紙である歌物であると云ふ念を取除けば、此掛物が古材の柱と調和せぬ事もなからうと言はれたが、何れも一說として謹聽しやう。

四

一木庵茶事に就き最も親切に觀察して、其品評を寄せられたのは益田鈍翁で大要左の通りであつた。

小倉の色紙でお茶を頂戴すると云ふ事は、昔は大々名でなければない事であるのに、今度箒庵子の新席開きに測らず此光榮を得たのは誠に老後の幸である。寄附に利休居士の添文が掛けてあつたから、扨ては思ひながら本席の床の掛物を拜見するに、其表装は常人の好みと思はれず、定家の出來も誠に美事で頭の下る者であつたが、頓て庵主より其傳來を聞けば左もこそあれ細川三齋公の好める表装で、何時の頃にか老中久世大和守の家に傳はり、今の久世子爵より庵主の手に入つた者であるさうだ。斯くて庵主は此掛物に配するに青磁桃の香合を以てし、花入は美事なる古銅鶴首の形で、然も紹鷗所持であるのに、白玉椿を活け、茶入は金森大海茶碗は黒光悦で何れも名物揃ひ、大々名のお茶であるから何れの茶會でも打寛いで勝手の事を言合ふ仲間も、今日ばかりは襟を正して大々名になつた心地がした。斯く緊張した茶會の終りまで客を窮屈にして置く庵主でないから、濃茶を終るや伊賀の水指、庸軒好みの朱棗、無地刷毛目の茶碗に薩摩を取合せ、如何にも平民的氣分に爲したのは庵主が苦心の策戰計畫であつて、濃茶の間は嚴肅なる能樂と謂ふべく、薄茶となりては心機一轉、氣の利いた清元に變つた者とも謂ふべき乎。

處で茲に一説を出せば、今度の茶會では如何に廣間嫌ひの庵主でも、薄茶を廣間にして客の心機を一轉せしむるが至當ではあるまいか、大々名の道具組が目前にあつて床に古銅の名花入も置かれてあつては、緊張した氣分が容易に失せず、若し此席で薄茶を出すとすれば、砂張の菓子器も出でなくてはなるまいし、薄茶器水指共中中面倒になつて、能に始まり能に終り、結局前後の氣分を轉ずる事が出來ないから、是れは寧ろ席を換へて氣樂に薄茶を出す方が宜からうと思ふ、再三の督促であるから一評なくては叶はぬ所と、庵主の襟度に免じて聊か口を滑らしたのである、自分は平素小倉色紙を尊敬する者で、斯かる表具の非凡なのを拜見したのは誠に有難く、深く庵主の好意を謝する次第である。

五

當代茶道の耆宿で、一年中に最も多く茶會を催す事では、關の東西に匹敵する者のない益田鈍翁の茶評は流石に肯綮に中つた所がある。今度の茶會には大阪の住友春翠男も來臨せられたが、東京の茶會は關西のと異つて食物が簡單で、自分等の如き食量の餘り多くない者には誠に好都合であると言はれたさうだが、男の如き有力者が此點を歎ばるゝとすれば、頓て關西の茶風も一變を來すの時機があらうと思ふ。又茶評と云ふではないが田中親美氏の說に、小倉色紙以前は寸松庵色紙だの升色紙だの俊賴大色紙だのと云ふ色紙があるが、此等は何れも歌切であるか又は帖放れであつて、現に寸松庵色紙の如きは帖の中に向合に張つてあつたので、一方の文字が他方の紙に寫つて居る者さへある。故に最初より色紙として生れた者では、小倉色紙が嚆矢であると云つて宜からう、小倉色紙一たび世に出でゝより、爲家の色紙が之に次ぎ下つて有名なる宗祇法師の大倉色紙などが出來たので、兎に角色紙の開祖は小倉であると述べられた。又原三溪君の說に、小倉色紙の文字の大きいのは山莊の襖に張つたからである、歌切の如き細字では遠方より見て之を讀み得ぬ所より、定家の工夫で其文字を大きくした者であらうと言はれたのは如何にも尤もと思はるゝ、抑も小倉色紙が天下の寶物となり、封建時代にあつては此一品が大名の御家騷動の種に使はるゝ程珍重せられたのは、如何なる理由であるか、余は最初是は小堀遠州等が定家樣を好み、書簡文は勿論、茶入茶碗の箱書附にも皆其筆法を摸したので、寛永時代に於て定家樣が非常の流行を來し、隨つて小倉色紙が天下に寶重せられたのであらうと思つて居たが、今度余が使用した久世家傳來の小倉色紙は利休所持で細川三齋が表具を好んだ者とすれば、小倉色紙は遠州以前に早や已に茶人間に尊重せられた者であらう、兎に角今回の茶會に定家色紙が好評を博して、諸先輩より種々の茶評を賜はつたのは誠に光榮の至りで、謹んで其好意を感謝する次第である。

（大正十年四月十六日）

櫻川茶會

一

老て益々壯に實業方面に活動し、日東の禹を氣取つて門を過ぎて入らざる底の多忙

を極め居る馬越化生翁も、今日此頃の長閑けき春風に吹かれては、昔取つた杵柄ならぬ茶杓を手にしたくや思ひ立ちけん、久方振りで櫻川茶寮に名品揃ひの茶會を開かれた、初日は四月十二日で大阪の住友春翠男、東京の今井町三井男など貴人客を招がれたからでもあらう、小間廣間共大氣張の飾附で、櫻川茶寮に花羞かしき光彩を放たれたが、余は十六日の一組に加はりて例の三疊寄附に到着すれば、相客は牧田環君、伊達忠七老と、常磐屋主人で余と共に四客であつたが、當寮の小間は二疊臺目であるから四客を一組としたのであらう、扨て席上を見廻せば、竹自在で手取釜を釣り、茶盆には染附菊模樣の茶碗に祥瑞三重瓢箪の香煎入を取合せて、宗品蓋置に砂張の小建水を其傍に置き、萬暦氈の上に蔦蒔繪火鉢と信樂燒の火入を備へた松木地手附煙草盆を並べ、片隅に時代蒔繪亂れ箱を置いてあつた、此寄附に於て先づ一同の目を驚かした祥瑞三重瓢箪香煎入は面白い來歷のある者で、明治二十年頃益田鈍翁が有名なる東山御物因陀羅寒山拾得二幅對を若井兼三郎より買取らんとした時、或る事情の爲め談判頗る行詰つた其仲に這入つて馬翁が調停の勞を取り、若井老人に得意の河

東節を語らせなどして、機嫌取り〳〵遂に彼を納得させた其功に依り、鈍翁よりは遠州藏帳の掛物一幅、又若井老よりは此三重瓢箪を謝禮として贈られたさうだが、當時因陀羅の二幅對が四百五十圓と云ふので、掛物相場のレコード破りであつたさうだから、此三重瓢箪も定めて五圓か十圓であつたらう、今日より之を回顧すれば全く隔世の感があると當夜披の間にて馬翁の懷舊談があつた、扨て今日の相客牧田君は、當主人より壯年實業家中に於て斯道有緣の候補者たるべく見立られて此客組に加へられた者で、當家の茶客と爲るのは勿論最初の事であるから、余は當夜主人の態度に就き豫め君に告ぐる所あり、先づ主人が出迎へに來るや、平常の馬翁とは全く一變して極めて恭謹なる宗匠と爲り、鄭重に一禮したる後、懷中より手拭を取出して敷居の上を一拭するから御覧なさいと注意し置いた處が果して其通りであつたので、牧田君が不思議さうな顏付して、余の透視術に一驚を喫せられたのは時に取つての一興であつた。

二

櫻川茶寮の小間二疊臺目の床には一見遠州と首肯るゝ半面に浸模樣のある一重切竹花入に、白玉椿と蘇黄一枝を活けられたが、後其箱書を拜見すれば是れは遠州名物花入で、色替と云ふ銘が書附けてあつた、顧みて爐邊を見れば、黑柿爐緣の鈌爐に東山御物古蘆屋松尾浦と云ふ名物釜を掛けられたので、愈々容易ならぬ茶會と思はれたが、頓て主人立出でゝ挨拶の後、左の器物で炭手前があつた。

香合　交趾形物笠牛　　炭斗　宗旦在判唐物籐組　　羽箒　鶴

灰器　南蠻内塗　　火箸、灰匙　時代桑柄

釜が名物で雜器まで何れも珍品揃ひなれば、暫時留置を乞ふて順次之を拜見したが、松尾浦は光信下繪と云ふに違はず、前後に一株づゝ描かれた濱松が如何にも土佐繪の行方で、地肌に光澤があつて丸味を持つた上品な作行は眞に稀代の名釜である、交趾笠牛は笠が黃で身が紫なのが珍らしく、無論無疵で普通のより一段時代が古いやうに思はれた、又宗旦所持籐組炭斗は底に宗旦の朱書判があつて、寂味十分でザングリとした作行は如何樣宗旦畑の珍品と首肯かれた、斯くて炭手前が濟むや始終主人自身の給仕で懷石を運ばれたが、其器具及び獻立は左の通りであつた。

汁　蕨、水からし、三州味噌　　向附　藍桃模樣金襴手、いたら貝、山葵、甘酢　　椀　小鯛、隱元、木の芽

燒物　織部手附鉢　鶉寄せ、根芋　　吸物　生椎茸、濱防風　　八寸　小海老、空豆

强肴　越前産雲丹蟹、三島馬上盃に盛りて　　香物　唐津小鉢、澤庵及び胡瓜細切　　酒器　染附半開扇蓋鐵銚子、青磁瓢形手附德利、金襴手盃臺共

菓子　葡萄餅

懷石は八百善の庖丁とて固より結構であつたが、其器具も藍繪金襴手向附、扨ては織部手鉢など取り〴〵一同の目を驚かした中にも青磁瓢形取手附德利は、上段の兩側に福壽の二字あり、下段に浮牡丹の如き模樣があつて、無論無疵で頃合が好く、砧手ではないが七官手の上乘で、別に一種を成した青磁と思はれた、此德利は先年加賀の石黑家入札會に出たもので、德利博士たる當主人がレコード破りの大奮發を以て手に入れた事は當時非常の評判であつたが、今度之を拜見して主人が浮氣になつたのも尤も至極と思はれた而して金色も赤味も目の覺むるやうな盃臺附金襴手猪口を、此青色の德利に配合した美麗さは誠に言語道斷であつた。

三

懐石終つて後元の寄附に中立したが、當夜は舊三月九日の弦月が庭前の楓の嫩葉の間に朧氣に匂つて、何處より飛來りしか露地に落花の點々と散布したのも風情あり、暑からず寒からぬ晩春の良夜、眞に一刻千金の想ひがあつたが、此夜景の中に大銅鑼七點の搖曳長く隱々と響き渡る感興は、茶人ならでは知る事の出來ぬ妙味である、扱て後座の床を見れば、東本願寺舊藏東磵、悅堂兩禪師の墨蹟が掛けられたが、東磵の書は

老虛堂虛丘十詠中、其一題慈々泉、末句有云、陸羽若教知此味、定應天下水無功、

と云ふ發端で、十一行ある其次に悅堂闇禪師が更に八行を書き添へた者で、中萠黃地上代紗、一風紫印金は小堀遠州好みの表具であるさうだが、表具も文字も共に美事で、殊に其の中に老益壯と云ふ文句があるのは主人の自讃も交つたやうで、誠に結構な趣味ある墨蹟であつた、斯くて主人は鼠色の小袖の上に十德を着けて、老宗匠然と行ひ澄して濃茶手前に取掛られたが、其器物は左の通りであつた。

茶入　中興名物 正意作銘面壁　　茶杓　利休作石州筒　　茶碗　錐呉器四方 撮み出し

水指　瀨戶一重口　　建水　木地曲　　蓋置　青竹引切

茶　鶴の祝松柏園詰

茶入は正意作であるが遠州筆で箱蓋に面壁とあり、挽家の蓋には江月和尚が書いた

九年坐久　面不見人

拂六宗盡　無一點塵

と云ふ四言四句が彫附けてある、正意作には初祖、二祖、六祖など云ふ茶入があつて、何れも此面壁と同型で達磨の姿に似て居るので此銘を負ふたのであるが、面壁は他の同型の茶入に比すれば一段小形で、栗色に銀氣を含んで中に少しく青味を帶びた處があつて、氣色には乏しいが轆轤に高低があつて、其形に無限の雅味が含まれて居る、扱て又茶杓は一見藤村庸軒作と言ひたい者で、櫂先の丸い處は片桐石州の樣でもあつたが、後其箱を拜見すれば利休の作で、片桐石州が筒書附を爲し、又同人より奈良の松屋源三郎に宛てた左の手紙が添へられて居るが、其文に

利休居士の此茶杓三齋公も御ほめの上は不及申候へ共見申すたび〳〵驚きまゐらせ候。

とあるのを見れば、利休作の茶杓中最も高名なもので、時代を若く見違へる程、如何にも奇麗に保存されたのが何より以て嬉しかつた。

四

櫻川茶會の茶杓は普通の利休作と大に其趣を異にして居るが、片桐石州は最も此茶杓に感服した者であらう、彼の茶杓は切止こそ例のブツ切りであるが櫂先の工合など殆んど之れを寫したやうであるから、彼は平常此茶杓を摸本として削つたのであらうと思はるゝ、又錐呉器四方撮み出し茶碗は二方撮み出し二方撮み込みで、無類の形であるのみならず、釉色は紅葉呉器の如く淺紅と淺青と錯綜したる中に、其色釉のナダレあり、高臺は三つに割れて下に開き腰の邊に掛け外しが面白き景色を成し、見込はキリ〳〵と深く如何にも錐呉器の名を證據立てゝ居る、之に配した瀨戸水指は一重口で釉色も景色も美麗であつたが、取合せの上より云へば南蠻縄簾か或は之れを木地曲にして、建水を砂張などに爲す方見た目が變つて、名物茶入茶碗を一層引立てたであらうと思はれた、斯くて名器揃ひの濃茶が終りを告ぐるや、飛石傳ひに八疊廣間に案内されたが、其床には遠州藏帳の松花堂筆中布袋、左柳燕右竹雀の長上三幅對を掛けて、其前に唐物四方盆に載せた宋胡錄香爐を飾り、床脇棚には蒔繪硯箱及び時代蒔繪二重香箱を置き、爐には九兵衞作丸釜を掛け、宗和好み水指棚には麗しき染附唐犬撮み四方共蓋水指と直齋好み仁和寺古木棗を置き合せ、左の器物で薄茶を出された。

茶碗　青井戸　　替茶碗　仁清作内釉掛り 外素燒菊模樣　　茶杓　象牙

蓋置　古銅糸巻　　建水　砂張　　菓子　砂張盆、紅白打出

廣間は大略前記の如く、席上に桐木地鮟鱇手焙と、赤繪火入一對を備へた鯨手煙草盆を置き並べ、小間と相對して遜色なき堂々たる飾附であつた、扨て此櫻川茶寮主人は江戸千家宗匠故川上宗順の弟子で、明治十三四年頃より算盤採る傍に茶杓を持ち、故益田無爲庵が無二の道友であつたから、茶器は雜具までも精選し客としても主

人としても、今は都下に於て屈指の老大家である、而して老來聰明更に衰へず實業熱心は左る事ながら、來年は早や八十と爲るべき身にて數々の名器を持ちながら、三年鳴かず飛ばずと云ふ從來の遣口は甚だ感服仕らず、本年は此春季茶會に引續いて初風爐、名殘、口切共併せて開會あらん事を、余は此機會に於て同人を代表して希望する次第である。

圓齋茶會

（大正十年五月四日）

上

加州の產八田圓齋茶事を嗜む事生命の如く、去る三月末郷里金澤に於て春季茶會を催し、歸京の上余等を向島の嬉森庵に招くべく豫定して歸省した其途中より流行感冐に罹り一時危篤に瀕せし程であつたが、豫て招待して置いた金澤の茶客を斷るは本意に非ずとて、東京より子息を呼び迎へて豫定通り茶事興行中、自ら起つ可らずと覺悟して、我れ若し死すとも喪を秘して茶事は其儘決行すべしと遺言したさうである、然るに神佛の加護にや辛くも一命を取止めて此程無事歸京するや、前約に依りて五月四日正午余等を嬉森庵に案內せられたので、定刻同庵寄附に着到すれば、床に了了齋の自畫讃一軸を掛けられたが、其讃は

　　飛石の雪ふみ散らす花の友

と云ふのであつたから、扨ては三月末の道具組を其儘採用する趣向と思はれた、而して此一軸の下には月に草花蒔繪小硯箱を置き、丸爐には鐵瓶を掛け、茶盌には南京香煎入、赤繪茶碗を置き合せ、一閑手附煙草盆に手捏樣の風雅なる信樂火入を備へた主人の心入深きには一同感服の外はなかつた、相客は宮北宗春、梅澤鶴叟、柏木彥兵衞、八百善主人であつたから、余が正客を引受けて順次入席すれば、三疊臺目不審庵寫の床中には宗旦の歌入文を掛けられたが、其歌は

　　降る雨の心のとけき音なれや
　　　　たちかへる花をまちそめそする

と云ふのであつた、斯くて大患後初めて面會する主人の容態如何と見れば、聊か面窶

れの氣味はあるが、今日其大好きなる茶會の初日とあつて、御一同に此世で再び御面會する事の出來たのは夢ではないかと思はれますとて、喜色面に溢れて直に炭手前に取掛られた、而して其器物は左の通りであつた。

釜　寒雉作瓢形　炭斗　竹組平　香合　新渡阿蘭陀白雁

羽箒　犬鷹　灰器　南蠻甕蓋　灰匕、火箸　時代桑柄

斯くて炭手前濟むや子息が代理して左の懷石を出された。

汁　三州味噌、つる菜、水からし　向附　染附木瓜形、鯖、山葵、蓼　椀　海老つくれ、火取鯖、根芋

燒物　仁清手附鉢、石鰈　强肴　祥瑞手桶形、雲丹　八寸　若鮎、蠶豆

香物　蕪、胡瓜　酒器　鐵銚子、三島德利　菓子　水羊羹、青葉に載せて

下

懷石後嬉しの森の椎の大木の新綠を愛でつゝ、暫時腰掛に中立すれば、主人自ら出迎はれたので、再び入席して其床を見れば、石州作一重切寂竹花入に白玉椿と野菊を活けられたが、記名投票で其作者を鑑定する事と爲り、八百善主人は棄權し他の四人の分を開票すれば三人は宗和、梅澤鶴叟獨り遠州であつた、今三人まで同說であつたに拘らず宗和當らず、案外にも石州であつたので、花入と茶杓さへ見れば何でも遠州で押通す梅澤鶴叟もホツト一息吐いたらしい、是れより主人の濃茶手前あり、器物は左の通りであつた。

茶入　萬右衛門落穗手 銘田向袋薩摩廣東　茶杓　宗和共筒　茶碗　常滑燒ハンネラ蓋

建水　木地曲　蓋置　半枯青竹　茶　好の白

右手前中梅澤鶴叟は遠方より茶杓を覗き込んで、今度こそ宗和であらうと推測的鑑定を下したが、是れは不思議に的中したので、何うして分つたかと尋ぬれば、當主人は何か一品宗和物を使ふのが慣例であるから、心眼を以て斯く鑑定したのであると言はれたので一座大笑ひであつた、又萬右衛門茶入の銘を田向と云ふのは主人が大崎に於ける住宅が字田向と云ふので、落穗手には田面と云ふ名物茶入があるから斯く命名したと云ふ事である、斯くて濃茶終るや同席にて薄茶を出されたが、其器物は左の如くである。

茶入　唐物朱塗籠　　茶碗　高麗堅手　　替　益田無爲庵手捏黒銘面影
水指　唐津手桶形　　菓子　獨樂盆、紅白扇子打出

如上濃薄茶器懐石道具何れも名器と云ふ程の者ではないが侘び數奇者の選擇は一風變つた所があつて、輕きは輕きまゝに面白く、常滑燒水指の一見南蠻と思はれたのも趣あり、又志野茶碗は六十以下の人には不似合なりと古來言ひ傳へて居るが、聞けば主人は今年其六十路の坂を登りかけたさうで、思ひ做しにや此茶碗が如何にも能く調和したやうであつた。兎に角死んでも喪を秘して豫定通り茶事を興行せよと遺言した主人が、九死に一生を得て前約通りに余等を招がれた其茶道執心は何よりも嬉しく、縱令趣向は淡泊であつても、眞正の數奇は斯かる茶事中に在るので、大患の全快と併せて今度の茶事の成功を中心より祝福する次第である。

（大正十年五月十五日）

靈寶館落慶式

上

明治四十三年に發起した高野山靈寶館は、十二年目で去る五月十五日落慶式擧行の運びに至つたので、東京よりは發起人總代として益田鈍翁、根津青山、馬越化生、野崎幻庵と余の五名の外に、室田義文氏、九州よりは安川敬一郎男、京都よりは日置藤夫氏等が登山して午前十時靈寶館中の紫雲殿に參集し、發起人總代益田男は靈寶館寄進文を、金剛峰寺管長土宜法龍師は其受納文を讀み上げ、建築技師長大江新太郎氏の報告、發起人總代馬越化生翁の祝詞があつて、首尾克く落慶式を終り、發起人總代等は多年双肩に懸つた重荷を卸して、大師結緣の靈場に一宇の寶物館を寄進し得た事を悦び合つたのである。最初此靈寶館は高野鐵道社長根津嘉一郎氏が、高野繁榮の一策として之を建設する必要を唱へ、高野山側に於ては同山開創千百年記念事業の一部として頻に其實現を望み、是より先き年々大師會を自邸に催して、大師の功德を讃歎して居つた益田鈍翁が之を贊成したので、靈寶館建設の議は忽ち具體化したのであるが、扨て其資金募集の一段に至りて豫想外の困難を生じ、當初は故朝吹柴庵翁等が勸募の世話方を引き受けたが、諒闇に引き續きて歐洲戰爭等の爲め一時行き惱みの有樣を

呈し、高野山側を代表して資金募集主任となつた、故寶城院住職佐伯宥純師が、僧俗兩間に立つて非常の窮境に陷つたのを見て、餘りの氣の毒さに余と野崎幻庵が進んで資金募集事務を擔當した、其意氣を馬越化生翁が大に買つて、知己大家の義捐を勸誘したばかりでなく、諸大家の入札札元道具商等より、數回に亙つて巨額の冥加金を徵收するなど云ふ非常手段を執つて、辛うじて十一萬許りの資金を募集し得たが、物價騰貴の爲め、最初十三萬餘圓で落成すべき豫算が殆ど其倍額を要する事となつたので、當初より此事業の相談役であつた文學博士黑板勝美、荻野仲三郎兩氏、建築技師大江新太郎氏等の考案を煩はして、發起人側よりは靈寶館建築資金として十七萬圓を支出、其他造作、備品等に要する十餘萬圓は高野山側に於て受持つべく協定して、發起人中より跡引受人八名を選み、不足資金六萬餘圓を分擔して靈寶館第一期計畫を完成し、本日目出度く此落成式を擧行するに至つたのである、此間發起人を代表して高野鐵道常務であつた日置藤夫氏が工事監督の役目を引受け、高野山側に於ては此事業に心血を注いだ佐伯宥純師が遷化した後は、金剛峰寺執事藤村密幢師が專ら斡旋の勞を取り、兎にも角にも巍然たる靈寶館が出來上り、高野一山寶物の統一、及び其火災濕損散逸の防禦、將た又登山者に靈寶拜觀の便利を與ふる等、其利益する所啻に高野一山に止まらず、社會各方面に永く無限の功德を普及するであらうと思へば、余等は此落慶式に臨んで中心實に欣躍に堪へぬ次第である。

中

靈寶館建設の必要及び其事業の經過等に就ては、已に兩回程記述してあるから今又之に說及せず、唯五月十五日靈寶館中央紫雲殿に於ける落慶式の概況だけを述べやう、靈寶館は正殿を中心にして左右に兩翼を張りたる如き、他の二館を廻廊で連接する趣向であるが、今回は第一期事業として正殿即ち紫雲殿、左翼即ち放光閣だけが先づ落成して、右翼は第二期事業として他年の完成を待つのである、而して正殿は二十五菩薩が本尊であるので紫雲殿と名づけ松方老侯が例の大師流の妙腕を揮はれた、金粉字形の大額を正面に揭げ、左翼の一館は阿彌陀如來が本尊なので之を放光閣と名づけて、富岡鐵齋翁が其額を揮毫したのである、當日は落慶式場たる紫雲殿正面に

二十五菩薩來迎圖を掲げ、兩側に清盛の血曼陀羅と稱する二大幅を列ねて、其中央に祭壇を設け、發起人其他來賓は祭壇に向つて左側高野山管長以下僧侶は右側に整列して、最初に讀經あり、次に益田孝男が發起人總代として靈寶館寄進文を讀み上げられたが、此寄進文は黒板文學博士の筆に成つた者で、頗る古調を帶びた文字であるから左に之を掲げやう。

奉寄進高野山靈寶館一宇事。

右當山者、弘法大師入定之聖跡、三世諸佛集會之淨域也、上自天子、下至衆庶、致一心歸依之懇志、期三會得脫之値遇、是以蓮峰蘿窟、德風吹兮、一千百餘年、靈寶秘珍、充于庫、溢于藏、惜哉、或罹祝融之災、或爲蠹魚之食、散于日、失于月者、不知其數、而保存之法未立、展觀之便尙缺、登山之輩、參詣之衆、多以爲恨矣、於是明治庚戌之春、始有靈寶館造立之發願、我等隨喜之、勸奉加於四方、及功德於一切、然而經十餘星霜、輪奐之美未成之間、奉始座主密門大僧正、佐伯權中僧正、朝吹柴庵等、忽告黃壤之長別、前後之恨無極者也、切感浮世如夢、彌歎事業難遂、更集多少之志、纔終土木之功矣、殿稱紫雲、閣呼放光焉、乃虔奉寄進于大師寶前、聊以果小願、庶幾遍照金剛之威光彌輝、普賢行願之梵風益加、又願依此微善、故座主以下聖靈、出離生死、頓證佛果、同心緇素、現當安樂、願望圓滿而已、乃至法界平等利益、敬白。

大正十年五月十五日

高野山靈寶館建設發起人總代

益田　孝　　根津嘉一郎
馬越恭平　　村井吉兵衛
原　富太郎　　朝吹常吉
野崎廣太　　高橋義雄

下

益田男が寄進文を讀み上ぐるや、次で金剛峰寺管長土宜法龍師は其寄進狀受領文を朗讀せられたが、先づ寄進狀の全文を繰返し、其末尾に左の一節、

今本寄進狀之趣、謹奉領納之、永爲一山之規模、衆侶合心、至龍華三會之曉、奉護持之、

謹所請如件、敬白。

大正十年五月十五日

高野山金剛峰寺座主大僧正　土宜法龍

を加へたのであつた。最初控室に於て黒板博士が寄進文を示された時、余等は益田翁に向て、是は閣下が平常謠曲に於て鍛へた所の美聲を發揮すべき最上の機會であるから、寄進文の朗讀は安宅の勸進帳か、正尊の起請文に倣つて天もひゞけと遣り給へと注意するを、鈍翁は言ふにや及ぶと打消して、頓て朗讀に取掛るや、上は天子より下衆庶に至ると云ふ所に於ては、團十郎が勸進帳で、茲に中頃の帝おはしますと云ふ所で恭しく一禮した型に依り、高く寄進狀を捧て敬意を表し、芝居氣漫々で奥の院までも響き渡れと讀み上げたので、來賓は勿論高野一山の僧侶も、一同感に堪へたのは落慶式第一の見物であつた。斯くて落慶式終りを告ぐるや、紫雲殿放光閣及び其廊下に陳列せられたる當山第一の佛畫、佛像、佛器、古文書等を拜觀したが、之を細記するは不可能であるから、有志者は本年より毎年五月、八月、十月の三期に分ちて、陳列せらる

る其折登山して拜觀するのが捷徑であらう。扨て寶物を拜觀し終り、館前に於て一同記念撮影あり、發起人及び來賓の重立ちたる者は夫れより金剛峰寺に招待せられて午餐の饗應を受けたが、余は豫て約し置きたる奥の院の墓地に繩張りを爲さんが爲め、寶城院住職と共に奥の院に赴いたので之を辭し、午後二時金剛峰寺に於て土宜管長に暇乞し、一同山駕籠で下山、同夜大阪に歸着した。

顧みれば靈寶館建設の議起つてより十二年、余等が此事業の爲めに托鉢坊主と成り澄まし、勸化に憂身を窶し始めてよりも已に七年間を經過して、其間に幾多の困難を重ねたが、扨て愈々出來上つて此靈寶館が今後幾久しく無限の僧俗に無量の感化を與ふるだらうと思へば、誠に愉快の至りである。余は今之れに對する幾多の感想を述ぶる事を省き、落慶式の節胸に浮かんだ例の腰折二首を左に掲ぐる事としやう。

類なき法の寶ををさめつゝ
　代々に傳へむ高殿そこれ

眞心のこもれば文もうつしゑも

知足齋爐名殘

古き聖の面影にして

（大正十年五月十七日）

一

浪華の長者住友春翠男は、五月初より茶臼山本邸の知足齋に爐名殘茶會を開いて連日同好を招がるゝ折柄、余等東京勢が高野山靈寶館落慶式に臨む由聞き傳へ、其歸途十七日正午知足齋に立寄られては如何と益田鈍翁まで申越されたので、鈍翁乃ち馬越化生、根津青山、野崎幻庵と余とを誘ひ合せ、五客打揃ひて茶臼山住友邸に推參することゝ爲り、當日正玄關より十二疊半の書院に寄附けば、床には應擧筆十二支幅の中、時候に因める蕨に兎青麥に蛇の二幅を掛け、違棚の上段には古清水燒色繪草摺曳人形を飾り、下段の時代手附籠花入には黄菖蒲と鬼薊を活けられた、斯くて座敷の中央に鶯茶色毛氈を敷き、汲出茶碗は染附蘭の繪で、一燈好み燒桐手附煙草盆一對に、南京赤繪松竹梅模樣火入を供へ、初夏の寄附とて廣々として涼しいのが何より以て有難かつた、是より腰掛に立出でよとの案内に接して、新緑滴るが如く苔氣滿徑とも謂ふべき長露地を飛石傳ひに腰掛へと進めば、圓座に添へて朝鮮唐津の火入を備へた松木地合利蓋煙草盆が出されてあつて、程なく主人春翠男が出迎はれたから直に茶室の前に到れば、破風には男の令兄西園寺陶庵公の揮毫に係る知足の二字匾額が懸けられ、蹲踞石、石燈籠の苔蒸したる茶庭のたゝずまゐ面白しなんど言ふばかりなし、頓て順次入席すれば又隱寫しと覺しき四疊半の床に、澤庵和尚筆善行無轍跡の五字一行を掛けられたが、向つて右の方に爲卜半老人、其左に澤庵叟書とあつて、善行の行の字を片假名の「リ」の字のやうに簡單に書かれたのが一段と面白く、聞けば此幅は泉州貝塚の左る寺院の住持であつた卜半老人と云へる高德に澤庵が書いて遣つた者で、無論彼が最も得意の作であるさうだ、扨て此一行幅を拜見した目を更に爐邊に轉ずれば、徑一寸許りで中程の少しく曲つた寂竹の自在に、遠州好みの大角豆鐶と利休好み鎌形の鉤で寒雉作の細筒釜を釣られたが、爐緣は久以作澤栗で、爐名殘の大寂味を示された殊に此寂竹自在が茶臼山園丁の荷桶棒であつたのを、主人自ら取上げた者

だと云ふに至りては、知足齋主が平常茶事に執心の如何に深いかを證明して、一段嬉しく感ぜられたのである、斯くて齋主は先づ余等の遠路參會を謝しつゝ、直に炭手前に取掛られたが其器物は左の通りであつた。

香合　交趾黄大獅子　　炭斗　宗旦好み一閑葛桶　　羽箒　鶴
火箸　時代桑柄櫻皮卷　　灰器　直齋好み玉川炮烙　　灰匙　赤樂宗入作

二

知足齋に於て齋主の炭手前終るや、一閑紅溜胡桃足折敷、一文字小形椀で齋主自ら左の懷石を運ばれた。

汁　合せ味噌、摺り胡麻筍、姫皮、葉附蕗　　向附　ノンカウ青薬三つ葉形、鯛細作り、防風　　燒物　祥瑞針木銘々皿、はも、お福豆
煮物　掬ひ豆腐、海老、白瓜、花柚　　强肴　呉洲赤繪花鳥の繪丼、茄子、はもの子　　同　唐津橋の繪鉢、筍、松露和へ物
吸物　蓴菜、搾り生薑　　八寸　若鮎、大葉百合根、唐辛　　香物　高麗梅鉢の繪丼、澤庵、胡瓜

懷石は何れも結構であつたが、中にも關東人には鱧と其の子が殊更珍らしく味はれた、器物は勿論一粒選りで一々品評は不可能であるが、ノンカウ作青薬三葉形向附は五客の口より口に賞讃の聲が傳はつた、當日は益田鈍翁が正客たるべき處を、近來耳が遠くなつて應答不自由なりと云ふ口實の下に、馬越化生翁を正客に推し、末客は余が承つたが、東京勢が斯く顏揃ひとなつたのを主人が非常に悦ばれて、給仕萬端自ら入念に勤められたのは、茶事なればこそと一同有難く感佩した、斯くて道志作黑塗丸形寸切銘々盆に載せられた、銘岩躑躅と云へる御菓子を頂戴して一同腰掛に中立すれば、雨氣を含んだ空氣を傳ひて、青葉の間を搖曳長く陰々と響き渡る南蠻大銅鑼の音色は、言ふに言はれぬ感興を催したが、打手は無論齋主であつたらう、扨後座の床はと見れば、宗旦作竹花入銘ゆがみとて竹に少しく歪みある一重切に、大山蓮華を活けられた風情得も言はれず、爐邊には南蠻繩簾の水指を置いて、其前に定家緞子の袋掛りたる小棗を飾り齋主出て濃茶手前に取掛られたが其器物は左の如くであつた。

茶入　利休黑小棗仙叟在判三つの内　　茶碗　瀬戸伯庵　　茶杓　遠州歌銘若紫
蓋置　半枯青竹引切　　建水　木地曲　　茶　千代の昔

伯庵茶碗は本形で薄すりと生海鼠釉を見たる處あれども、總體黑ずみたる黄釉地で、